財団法人八尾市文化財調査研究会報告57

Ⅰ　恩智遺跡（第7次調査）
Ⅱ　郡川遺跡（第1次調査）
Ⅲ　神宮寺遺跡（第1次調査）
Ⅳ　花岡山遺跡（第2次調査）
Ⅴ　水越遺跡（第2次調査）
Ⅵ　水越遺跡（第3次調査）

1997年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告57

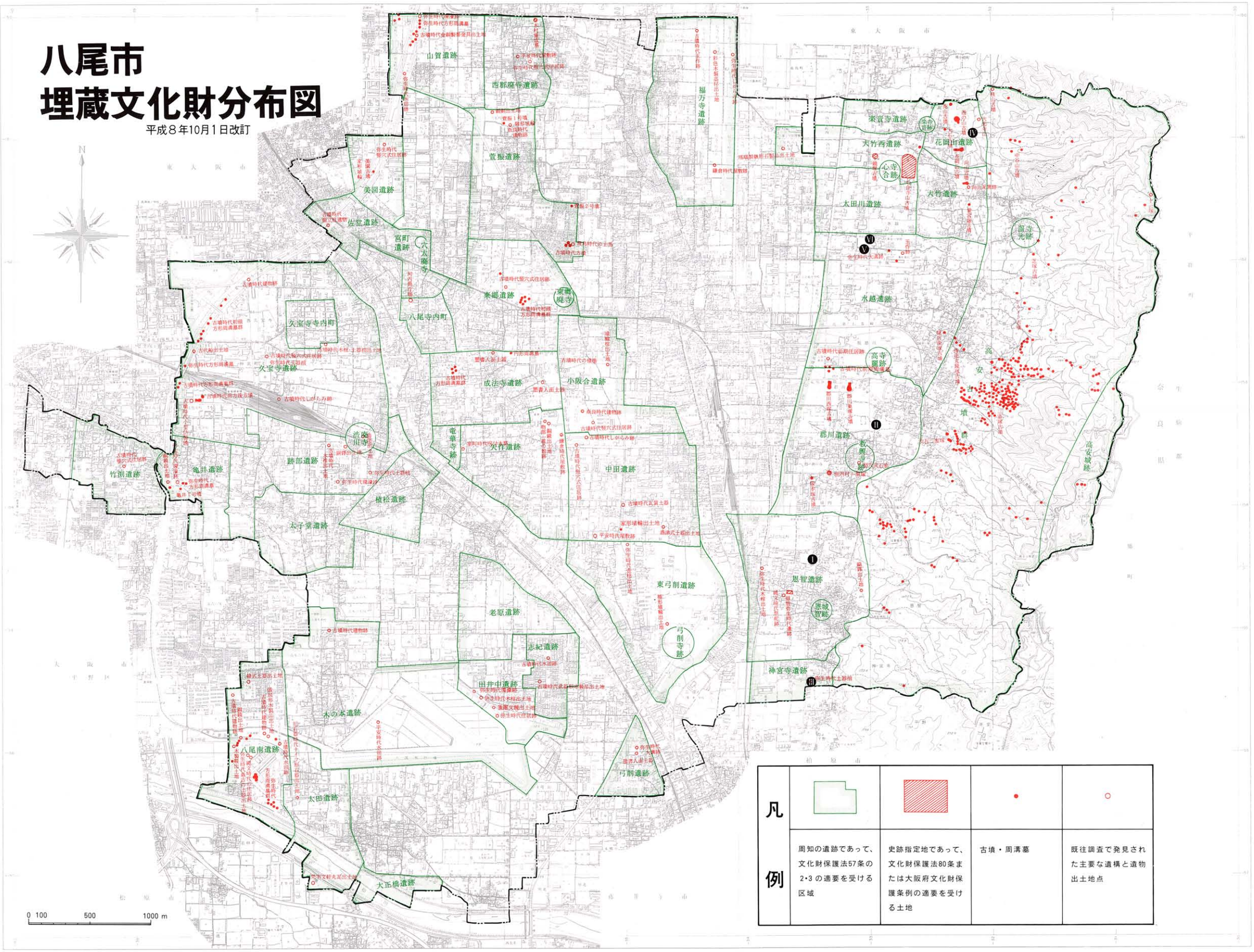
Ⅰ　恩智遺跡（第7次調査）
Ⅱ　郡川遺跡（第1次調査）
Ⅲ　神宮寺遺跡（第1次調査）
Ⅳ　花岡山遺跡（第2次調査）
Ⅴ　水越遺跡（第2次調査）
Ⅵ　水越遺跡（第3次調査）

１９９７年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成８年10月１日改訂



はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、恩智遺跡・郡川遺跡・神宮寺遺跡・花岡山遺跡・水越遺跡の遺物整理が完了し、報告する運びとなりました。これらの遺跡は、八尾市の生駒山地西麓の扇状地に位置する縄文時代から近世に至る複合遺跡であります。神宮寺遺跡第1次調査では、弥生時代中期において甕棺やそれに伴う遺物が検出され、当時の埋葬施設を知る上で大変貴重な調査でありました。また水越遺跡第2次調査では弥生時代の環濠集落が検出され、当時の集落構成の在り方を知る貴重な資料が発見されています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの発掘調査が関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　木　山　丈　司

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査成果の報告書を収録したもので、内業整理の業務は各現地調査終了後に着手し、平成９年３月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。

1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅳ－成海佳子、Ⅱ－原田昌則、Ⅲ－岡田清一、Ⅴ－西村公助、Ⅵ－高萩千秋で全体の構成・編集は高萩が行った。

1．本書掲載の地図は、八尾市役所発行の2,500分の１（昭和61年８月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成８年10月１日改正）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面（T.P.＋）である。

1．本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北である。

1．遺構は下記の略号で示した。

竪穴住居－ＳＩ　掘立柱建物－ＳＢ　井戸－ＳＥ　土坑（土壙）－ＳＫ　溝－ＳＤ

小穴・柱穴－ＳＰ　落込み－ＳＯ　土器集積－ＳＷ　自然河川－ＮＲ　不明遺構－ＳＸ

1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・埴輪－白　須恵器・陶磁器・鉄製品－黒　石製品・木製品・瓦・鞴羽口－斜線

1．各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成しており、市民の方々に広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

Ⅰ　恩智遺跡　第７次調査 …… 1

Ⅱ　郡川遺跡　第１次調査 …… 29

Ⅲ　神宮寺遺跡　第１次調査 …… 41

Ⅳ　花岡山遺跡　第２次調査 …… 81

Ⅴ　水越遺跡　第２次調査 …… 105

Ⅵ　水越遺跡　第３次調査 …… 157

報告書抄録

Ⅰ　恩智遺跡第７次調査（ＯＪ92－７）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智北町４丁目650に所在する八尾市立南高安小学校で実施した屋内運動場建て替え工事に伴う恩智遺跡第７次発掘調査（ＯＪ92－７）の報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教社文第埋173号　平成４年２月24日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成４年６月９日から８月７日にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、指示面積（建築予定面積）約1000㎡のうち約860㎡である。

1．内業整理は、調査に並行して随時行い、平成５年３月に終了した。

1．現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音字順）。
磯上サカエ・澤井　幹・中川義朗(現阪南市教育委員会)・西田　寿・能勢直樹・宮崎寛子・村井俊子

1．方位は磁北である。図面の縮尺については、ことわりのないものに限り、遺構は50分の１、遺物は４分の１である。

本　文　目　次

第１章　はじめに…… 1
第２章　調査概要…… 4
　第１節　調査方法…… 4
　第２節　調査経過（日誌抄）…… 5
第３章　調査概要…… 9
　第１節　地区割…… 9
　第２節　層序……10
　第３節　検出遺構と出土遺物……12
　　１）１区の概要……12
　　２）２区の概要……15
　　３）３区の概要……18
　　４）出土遺物の概要……19
第４章　まとめ……20
　付　表……21

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図…… 2
第２図　調査区設定図…… 9
第３図　柱状図……10
第４図　ＳＫ1101・ＳＫ1102断面図 ……12
第５図　ＳＫ1103・ＳＫ1104断面図 ……13
第６図　ＳＫ1201断面図……14
第７図　ＳＫ1202断面図……14
第８図　ＳＥ2101断面図……15
第９図　出土遺物実測図……19
第10図　壁面図……23・24
第11図　第１面平面図……25・26
第12図　第２面平面図……27・28

図　版　目　次

図版一　１区
第１面全景(南から)、第２面全景(南から)
図版二　１区第１面
ＳＫ1101(西から)、ＳＫ1101・ＳＫ1102(北から)、ＳＫ1103・ＳＫ1104(西から)
図版三　１区第２面・下層トレンチ
ＳＫ1201(西から)、ＳＫ1202(西から)、下層トレンチ西側壁面
図版四　２区
第１面全景(南から)、第２面全景(南から)
図版五　２区第１面
ＳＫ2102・ＳＫ2103(西から)、ＳＫ2104・ＳＫ2105(西から)、ＳＤ2101(西から)
図版六　２区第１面・第２面
ＳＥ2101上層・ＳＫ2101(西から)、ＳＥ2101下層(西から)、ＳＫ2201・ＳＫ2202（西から)
図版七　３区
第１面北部（北から)、第２面北部（北から)
図版八　出土遺物

第１章　はじめに

恩智遺跡は、八尾市恩智北町・恩智中町・恩智南町一帯に所在する旧石器時代以降の複合遺跡で、生駒山地西麓から広がる扇状地上に位置している。遺跡の北には郡川遺跡、南には神宮寺遺跡が接し、玉串川を挟んだ西には東弓削遺跡が位置している。一方、東の山側には、古墳時代後期の群集墳として名高い高安古墳群や、銅鐸の出土地などが控えている。

遺跡が立地する扇状地は、周辺の生駒山地西麓の中ではかなり大規模なもので、裏山の深い谷筋から西へむかって大きく張り出している。この扇状地の中心部、恩智中町３丁目に所在する「天王の森」と呼ばれる広場は恩智神社の御旅所で、かつて恩智神社が鎮座していた場所であるが、この扇状地は、この「天王の森」周辺を先端部とし、ここから崖状に北・西・南の三方へ急激に一段下っていくことが、地図のうえからも認められる。

恩智の旧集落の近辺の田畑では、古くから遺物が散見されることで有名であったが、過去の調査で、旧石器時代から弥生時代にかけての遺構や遺物の存在が明らかにされたことから、1943年（昭和18年）、「天王の森」に「恩智石器時代遺蹟」の碑が建てられた。これらのことから、この「天王の森」付近を中心として、遺跡範囲が想定されていた。

ところが、近年の調査では、この「天王の森」よりも西側、扇状地の先端と沖積地の融合点にかけての恩智川周辺でも、弥生時代から古墳時代にかけての遺構や遺物が多量に検出されており、遺構の範囲は西側の低地の部分にまで及んでいることが判明した。当調査地は、この「天王の森」の北側、扇状地の北西側の縁辺部にあたっている。

恩智遺跡では多くの調査がなされているが、当調査地の近辺に限れば、これまでに３度の発掘調査が行われている。まず、今回の調査地である南高安小学校の敷地内、当調査地の北隣では、平成２年度に八尾市教育委員会による遺構確認調査（恩智遺跡90－10）が行われており、その結果、現地表下1.2ｍ前後（T.P.＋17.8ｍ）で、鎌倉時代（13世紀代）の炉跡状遺構が検出されている。また、同小学校南側の道路部分では、当調査研究会が平成３年度に発掘調査（ＯＪ91－５）を行っており、その結果、現地表下1.1～1.2ｍ（T.P.＋15.8～18.5ｍ）で、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を検出している。さらに西200ｍ地点の調査地（恩智遺跡91－335・ＯＪ91－6）では、現地表下0.8～0.9ｍ（T.P.＋11.2～11.7ｍ）で、縄文時代後期～古墳時代の遺構・遺物を検出している。

これらの調査結果から、当遺跡では、扇状地西側の縁辺部だけではなく、北側の縁辺部でも、縄文時代後期にまでさかのぼることのできる遺構・遺物のあったこと、さらに鎌倉時代（13世紀代）の遺構が存在することも明らかになった。

第１図　調査地周辺図(1/5000)

表1　周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体(略号)	調査原因	調査地住所	調査期間	文　献	発行
1	市教委	防火用貯水槽	恩智中町3(天王の森)	7412	「八尾市恩智遺跡の出土遺物について」大阪文化誌　第2巻1号	1976
2	瓜生堂遺跡調査会	恩智川改修	恩智中町～恩智北町 (母木橋～八尾新橋間)	751001～760426 761011～770331 770116～770630	「恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ」 「恩智遺跡Ⅲ」	1980 1981
3	市教委	共同住宅	恩智中町3-240他	76～78		
4	市教委	教会増築	恩智中町2-94	79		
5	市教委	個人住宅	恩智中町2-265	8302	八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書	1983
6	市教委	銀行建築	恩智中町1-77-2	840531～840702	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書	1985
7	市教委	個人住宅	恩智中町3-214	840611・840615	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書	1985
8	研究会(OJ85-1)	共同住宅	恩智北町1-51	850509～850608	「Ⅲ　恩智遺跡(第1次調査)」八尾市文化研究会調査研究会報告23	1989
9	市教委(86-494)	寮建設	恩智南町1-130-2他	870716	「恩智遺跡(86-494)の調査」八尾市内昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ	1988
10	市教委	国庫補助事業	恩智中町3-112	860721～860915	－恩智遺跡の調査－　八尾市内昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ	1987
11	市教委(86-518)	個人住宅建設	恩智中町3-126他	870803～830804	「恩智遺跡(86-518)の調査」八尾市内平成2年度発掘調査報告書Ⅰ	1988
12	市教委(62-529)	共同住宅建設	恩智中町3-224-1	880527	「2．恩智遺跡(62-592)の調査」八尾市内昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ	1989
13	市教委(63-015)	住宅建設	恩智中町3-125	880527	「4．恩智遺跡(63-015)の調査」八尾市内昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ	1989
14	市教委(63-201)	試掘(OJ86-2)	恩智北町1-59他	880722	「11．恩智遺跡(63-201)の調査」八尾市内昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ	1989
15	研究会(OJ86-2)	共同住宅	恩智北町1-59-60	880829～880901	「13　恩智遺跡(第2次調査)」八尾市文化研究会調査研究会報告25	1989
16	研究会(OJ88-3)	浄化槽	恩智1045外6筆	881107～881117	「14　恩智遺跡(第3次調査)」八尾市文化研究会調査研究会報告25	1989
17	市教委(63-361)	住居付教会建築	恩智中町3-239他	881118	「21．恩智遺跡(63-361)の調査」八尾市内昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ	1989
18	市教委(63-399)	公共下水道工事	恩智中町3-66	890118～890119	「10．恩智遺跡(63-399)の調査」八尾市内昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ	1989
19	市教委(88-509)	試掘(OJ89-4)	恩智中町4-55	890302～890316	「2．恩智遺跡(63-509)の調査」八尾市内平成元年度発掘調査報告書Ⅱ	1988
20	研究会(OJ89-4)	青少年施設	恩智中町4-55	890901～891106	「12　恩智遺跡（第4次調査)」八尾市文化研究会調査研究会報告28	1990
21	市教委(90-10)	市立小学校プール	恩智中町4-650	900823	「4．恩智遺跡(90－10)の調査」八尾市内平成2年度発掘調査報告書Ⅱ	1991
22	市教委(90-282)	個人住宅	恩智中町3-129	901005～901017	「15．恩智遺跡(90-282)の調査」八尾市内平成2年度発掘調査報告書Ⅰ	1991
23	市教委(90-457)	共同住宅	恩智中町2-323他	901018	「25．恩智遺跡(90-457)の調査」八尾市内平成2年度発掘調査報告書Ⅰ	1991
24	市教委(90-558)	共同住宅	恩智中町1-81	910222	「2．恩智遺跡(90-558)の調査」八尾市内平成3年度発掘調査報告書Ⅰ	1992
25	市教委(91-055)	専用住宅の地盤改良	恩智中町2-176	910711～910712	「12．恩智遺跡(91-055)の調査」八尾市内平成3年度発掘調査報告書Ⅰ	1992
26	市教委(91-232)	水道管埋設	恩智中町2	910930～911004	「6．恩智遺跡(91-232)の調査」八尾市内平成3年度発掘調査報告書Ⅱ	1992
27	市教委(91-363)	水道管埋設	恩智中町2	911030	「9．恩智遺跡(91-363)の調査」八尾市内平成3年度発掘調査報告書Ⅱ	1992
28	研究会(OJ91-5)	排水路改修	恩智北町3-112他	911114～911116	「Ⅳ　恩智遺跡(第5次調査)」八尾市文化研究会調査研究会報告34	1992
29	市教委(91-335)	共同住宅	恩智中町2-169他	911129	「25．恩智遺跡(91-335)の調査」八尾市内平成3年度発掘調査報告書Ⅰ	1992
30	研究会(OJ91-6)	共同住宅建設	恩智北町2-169他	911218～911221	「Ⅴ　恩智遺跡(第6次調査)」八尾市文化研究会調査研究会報告34	1992
31	研究会(OJ92-7)	小学校屋内運動場建替	恩智中町4-650	920609～920807	今回報告	

第２章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査は、八尾市立南高安小学校屋内運動場建て替えに伴って実施したもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した発掘調査の第７次調査（ＯＪ92－７）にあたる。調査期間は平成４年６月９日から８月７日までのうち、実働48日間である。

調査は、既存の屋内運動場を解体・埋め戻し後に行ったもので、当初の予定では、新築屋内運動場約1000㎡のうちの約860㎡について発掘調査を行うことになっていた。ところが、機械掘削を開始したところ、旧建物の基礎構築時および解体時の撹乱が調査対象面にまで及んでいる部分があり、実質的な調査面積は、約600㎡に減じてしまった。そこで、屋内運動場の西側に構築される階段部分の約260㎡についても発掘調査を行うことになった。

このように、調査区は屋内運動場部分と階段部分の２ヶ所に設定し、屋内運動場部分から機械掘削を開始したが、前述の撹乱が調査区東端・中央西寄り・南端で「コ」の字形に認められたため、便宜上、損傷を受けていない部分を別の調査区として取り扱った。その結果、調査区の数は３ヶ所となった。調査区の名称は、屋内運動場の東寄りを１区・西端を２区・階段部分を３区と呼んだ。また、３ヶ所の撹乱も、便宜上東トレンチ・中央トレンチ・南トレンチと呼んだ。

調査の手順としては、まず最初に屋内運動場部分の機械掘削を行い、３ヶ所の撹乱を利用して土層を観察しながら、２区の調査を先行した。２区第１面・第２面の調査終了後、１区の人力掘削を開始し、１区第１面までの調査終了後、１区・２区の調査の結果を参考にして、３区の機械掘削を開始した。ついで、１区第２面までの人力掘削を行い、１区第２面の調査終了後、３区の人力掘削を行った。３区の調査終了直前に１区に下層トレンチを設定し、第２面以下の土層堆積を観察した。

掘削については、土留め等を施さないいわゆる「素掘り＝オープンカット」で行った。掘削する深さについては、当調査区北側で行われた遺構確認調査（恩智遺跡90－10）の結果を参考にして、遺物包含層直上までの機械掘削0.5ｍ・遺物包含層の人力掘削0.4～0.5ｍを目安としていた。ところが、地形に沿って掘削していったところ、機械掘削は現地表下0.3～1.6ｍ（T.P.＋16.4～17.2ｍ）まで、人力掘削は、以下の0.2～0.7ｍとなった。完掘時の深さは、現地表以下1.0～2.3ｍ（ T.P.＋15.9～17.2ｍ）に達した。

調査の結果、第１面では１区で土坑５基、２区で井戸１基・土坑７基・溝２条、３区で小穴１個、第２面では１区で土坑２基、２区で土坑２基・小穴１個・溝１条を検出した。

第２節　調査経過（日誌抄）

平成４年６月９日（火）晴：調査開始。現状は旧屋内運動場の取り壊し後に埋め戻されており、上面はかなり凹凸が激しい。南東端から機械掘削開始。東端の幅約２ｍは、旧建物建設時および解体時の掘削のため、地表から1.5ｍ程度の深さまで撹乱されている。中央西寄りでも同様の撹乱が幅６ｍ・深さ1.5ｍ前後にわたって認められた。市教委平成３年度調査地（恩智遺跡91－335）に対応する中世の遺物包含層（第３層）は、南東部で浅く、北西へ下がる。

機械掘削開始（6/9）

６月10日（水）晴：第３層上面は、東部で地表から0.5ｍ前後、北西部で1ｍ前後の深さに達する。厚さは南部では0～0.2ｍ、北部では0.5ｍ以上を確認した。

６月11日（木）晴：第３層上面までの機械掘削終了。南端にも遺構面にまで達する撹乱が認められ、東端・中央西寄り・南端の３ヶ所の撹乱が、「コ」の字形にめぐることが判明した。３ヶ所の撹乱は、便宜上東トレンチ・中央トレンチ・南トレンチと呼び、撹乱で分断された調査区は、東側を１区・西側を２区と呼ぶことにした。面積・機械掘削深度ともに当初の予定（860㎡・0.5ｍ）から大幅に変わったため、事後の処置について市教育委員会施設課・同文化財課・当調査研究会の各担当者間で協議したが、決着はつかなかった。

レベル移動（調査地南向かい八尾農協南高安支店の仮ベンチT.P.＋20.268ｍから）。調査地内南東隅はT.P.＋18.50ｍ、調査区の現地表レベルはT.P.＋18ｍ前後、第３層上面のレベルはT.P.＋17.0～17.5ｍ、第３層の厚みは0.1～0.2ｍ程度ある。地区割り用杭打ちおよび調査地周辺図・調査区設定図作成。北側壁面・西区東側壁面精査。

現場事務所完成。

６月12日（金）晴～曇：１区・２区北側溝掘削（機械掘削終了地盤から0.6～1.0ｍ）、北側壁面分層、実測。第４層上面のレベルはT.P.＋16.8～17.4ｍ、厚さは0.1～0.15ｍ。最終ベース（第７層）までは0.4～0.6ｍの深さがある。２区はプール構築時にかなり削平されている。

６月15日（月）雨→曇：雨のため人力掘削中止、南トレンチを機械にて掘削・整理する。市教育委員会施設課と打ち合わせ。面積が減じた分は屋内運動場の西側に構築する階段部分（３区と呼ぶ）の約200㎡で確保することに決定した。調査の手順としては、調査対象面が深い２区を先行し、その結果を検討してから３区の掘削範囲等を決めることになった。

６月16日（火）晴：２区から人力掘削開始。南部２層上面で遺構らしきものの痕跡検出。掘

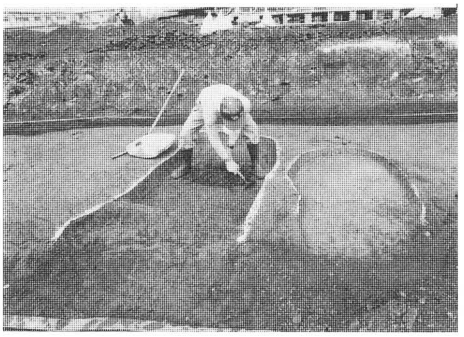
削するが上面はほとんど削平されている。構築面は不明、おそらく近世以降のものであろう。第４層は北部では薄く、ほとんど認められない。大阪府教育委員会文化財保護課技師亀島重則氏・西川寿勝氏来訪。

６月17日（水）曇：南部の遺構完掘、写真撮影・平断面図作成・レベル入れ、北部から第３層掘削・精査。

６月18日（木）晴～曇：西側壁面精査・分層、第４層・第５層上面（この面を第１面と呼ぶ）で遺構（井戸１・土坑７・溝２）検出。写真撮影用足場組み立て。

６月19日（金）晴～曇：西側壁面実測、南部から遺構掘削開始。

６月20日（土）曇→雨： 西側壁面写真撮影。第１面遺構完掘、写真撮影、平断面図作成、レベル入れ。午後からの急な雷雨のため途中で放棄（遺構完掘後の雨でよかった）。午後から遺物洗浄・図面整理等の屋内作業。



２区第１面遺構掘削(6/20)

６月22日（月）晴～曇：図面作成続き。南部から第１面遺構ベース（第４層以下）の掘削を進める。１区機械掘削後の上面・撹乱の整理。

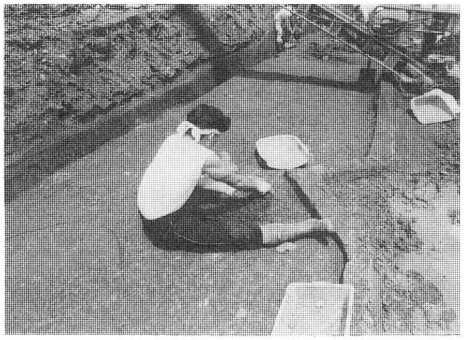
６月24日（水）雨→曇：昨日からの雨で遺構面水浸し、排水作業におおわらわ。第２面（第７層）までの掘削続き、南側・西側壁面分層。

２区泥土除去(6/24)

６月25日（木）晴～曇：第７層上面で精査、遺構（土坑２・小穴１・溝）検出、南部の遺構から掘削開始。

６月26日（金）晴～曇：第２面の遺構完掘。写真撮影、平断面図、レベル入れ、壁面図書き足し等で２区の調査終了。写真撮影用足場解体。

６月29日（月）曇：１区の調査開始。側溝掘削終了、調査区中央部に東西方向のトレンチ（中央トレンチ）も掘削する。南東部ではいわゆる「地山」の岩盤（第８層）を確認。第４層



２区第２面遺構掘削(6/25)

上面は、南半分ではかなり削平されている。校長先生から、７月18日に児童・保護者向けの説明会を行ってほしいと依頼される。とくに現場が見頃でなくともよいらしい。

７月１日（水）晴：当調査研究会創立10周年記念式典のため調査中止。ただし、残土整理等の現場作業は行った。

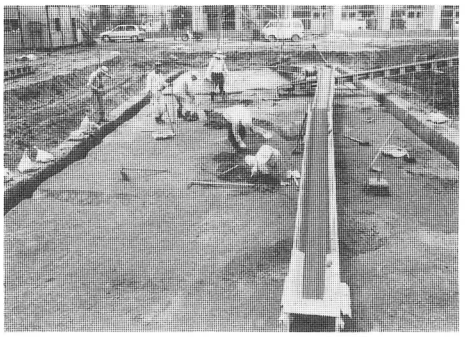
７月３日（金）曇：第１面遺構(土坑５)検出、掘削。

７月４日（土）曇：遺構完掘、写真撮影、平断面図作成等で１区第１面の調査終了。３区の調査位置設定。

１区第１面遺構掘削(7/3)

７月６日（月）曇：１区第１面遺構ベース（第４層）掘削。３区の機械掘削開始、現地表下1.0～1.6ｍまで（第３層上面）の掘削、南が浅く北が深い。第４層は粘性が低く礫少ない。中央部に撹乱あり。

７月７日（火）曇～雨：３区の機械掘削終了。空模様と相談して杭打ち・レベル移動等を行って、人力掘削は保留する。１区第２面遺構（土坑２）検出作業、上層遺構の窪みに重複するように遺構がある。

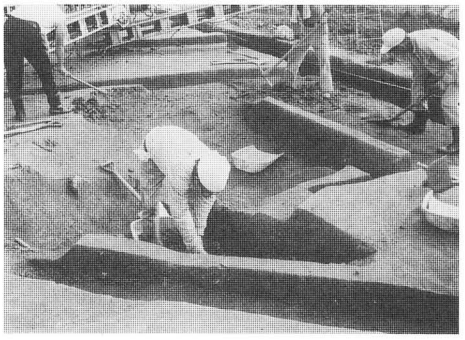


１区第１面遺構ベース掘削(7/7)

７月８日（水）曇～雨：１区西側壁面・中央トレンチ南側壁面分層、写真撮影、実測図作成。

７月９日（木）晴～曇：１区北西から第２面の遺構掘削開始。

７月13日（月）曇～雨：１区北・東・西側壁面・中央トレンチ北側壁面分層、写真撮影、実測図作成。

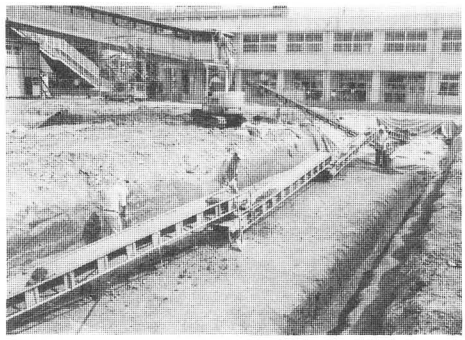


１区第２面遺構掘削(7/9)

７月15日（水）曇：１区の土坑はかなり深い。遺構面も中央部が谷状に落ち込むため、掘削土量は多い。市財政部契約検査室から２名見学。

７月16日（木）曇：１区遺構掘削約50％終了、遺構はかなり深い。教頭先生、市教育委員会管理課施設係長、市教育委員会文化財課技師・調査補助員、当調査研究会事務局長・主査見学。

7月18日（土）雨→曇→晴：１区遺構ほぼ完掘、週末でもあり、空模様もあやしいので、精査を残して３区に移る。３区西側溝から掘削開始、壁面精査。小学校側から依頼されていた見学会は突然中止にされた。



３区人力掘削開始(7/21)

7月20日（月）晴：１区精査終了後写真撮影、平面図作成。３区上面整理、壁面精査。

7月21日（火）晴：１区平面図等作成、１区の調査終了。３区第３層の人力掘削開始、側溝掘削、壁面精査。撹乱を機械にて掘削・整理。撹乱を挟んで北区・南区と呼ぶ。

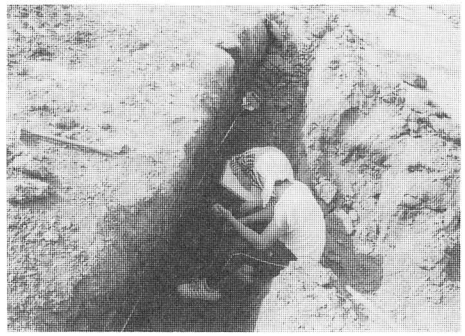
7月24日（金）晴：３区東側壁面実測

7月27日（月）晴：東側・南側・西側壁面実測、北側から第４層上面までの掘削開始。

7月28日（火）晴：北区第４層上面までの掘削・精査終了、写真用足場３区北側へ移設。

7月29日（水）晴：北区写真撮影、平面図作成、レベル入れ。南東と北西の高低差は40cm近くある。南区４層上面までの掘削開始。本日は大変暑く、作業員１名ダウンする。

7月30日（木）晴：南区第４層上面までの掘削、北側は0.4ｍと厚く、南端では0.1～0.15ｍと薄くなる。１区に下層トレンチ設定、掘削、位置図、壁面図作成。



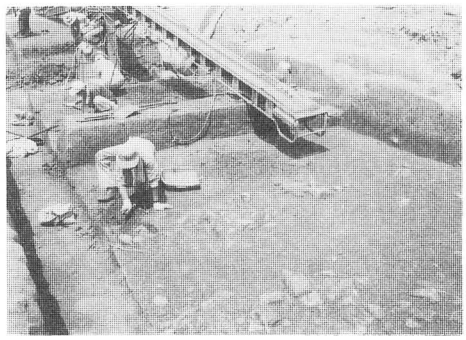
１区下層トレンチ壁面実測(7/30)

7月31日（金）晴～曇：南区第４層上面までの掘削終了、写真撮影、平板測量。北区第４層以下の掘削開始。

8月１日（土）晴：南区図面終了。北区とともに第４層以下最終面までの掘削開始。

8月５日（水）晴～曇：３日・４日は台風９号襲来のため作業中止、終盤になっての手痛い打撃である。南区は最終ベース（第７層）までの掘削終了、北区はまだまだ下がる。

8月７日（金）曇～雨：北区やっと完掘、平面図作成、レベル入れ、等高線記入等ですべての調査終了。



３区第４層上面精査(7/31)

第３章　調査概要

前述のように、調査地は屋内運動場部分と階段部分の２ヶ所の予定であったが、屋内運動場部分は中央東寄りおよび東端に旧建物基礎による大規模な撹乱が遺構面にまで及んでいたため、結果的には南北方向のトレンチ３ヶ所を調査することになった。調査区は、東から１区・２区・３区と呼んだ。

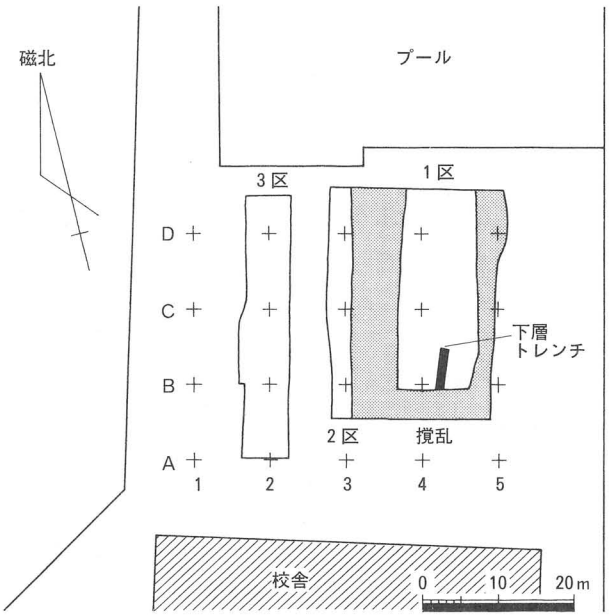
層名は全調査区を通じて「第１層」～「第８層」までを基本層としたが、各調査区ごとに、基本層には２桁の番号を、部分的にしか認められない土層には３桁の番号を与えた。
また、検出遺構は、井戸（ＳＥ）・土坑（ＳＫ）・小穴（ＳＰ）・溝（ＳＤ）の略号を用い、遺構番号は各調査区の遺構面ごとの続き番号とし、北から若い番号を与え、４桁の数字で表した。「ＳＫ2101」は２区第１面のうち北端にある土坑のことである。

第１節　地区割

調査対象地は、南北約50ｍ・東西約60ｍの平坦地で、北側には平成２年度に八尾市教育委員会による遺構確認調査（恩智遺跡90－10）の行われたプール、南側には校舎があり、西側は２ｍ程度下がってグラウンドとなっている。また、東側は１ｍほど高くなり、旧街道である東高野街道が南北に通っている。

地区割りは、新設建物に対して軸をもつように10ｍ四方に設定した。南北の軸は磁北に対して、東へ約15度東に振っている。

南北軸は西から東へアラビア数字（１～５）で、東西軸は南から北へアルファベット（Ａ～Ｄ）で表し、各地区の名称は、各軸の南西隅の交点を用い、「１Ａ区…４Ｄ区」と呼んだ。３ヶ所の調査区のうち、１区は「３Ａ区～３Ｄ区・４Ａ区～４Ｄ区」、２区は「２Ａ区～２Ｄ区・３Ａ区～３Ｄ区」、３区は「１Ａ区～１Ｄ区・２Ａ区～２Ｄ区」にあたる。



第２図　調査区設定図(1/1000)

第２節　層序（第２表・第３図・第10図）

現地表面の標高はT.P.＋18.00ｍ前後で、地表から0.3～0.7ｍ程度は盛り土で、部分的に旧屋内運動場・プール建設時の撹乱が地山面にまで及んでいる。当地の旧地形は、南東から北西へ下がる緩斜面を呈しており、土層堆積は複雑であるが、第１層～第８層までの８層を基本層とした。これらのうち、第１層・第２層は水平に堆積しており、近世以降の整地層と考えられる。

第１層：緑灰色礫混シルト（層厚0.1～0.2ｍ）　床土と考えられるが、耕土は削平されている。中世～近世の土器類の小破片が若干含まれる。

第２層：茶灰色礫混シルト（層厚0.1～0.2ｍ）　第１層同様床土状を示し、中世～近世の遺物の小破片（第９図－５ほか）を含む。

第３層：灰褐色礫混シルト（層厚0.15～0.25ｍ）　２区では、この層上面で遺構の底を確認できたが、ほとんどが第１層・第２層によって削平されている。層中からは、瓦器椀・瓦等の小破片や砥石・羽釜（第９図－３・４ほか）など、中世までの遺物が少量出土している。

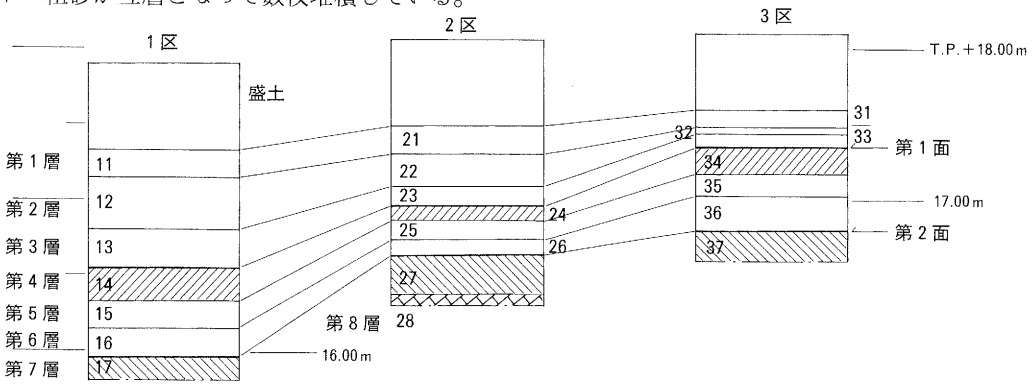
第４層：茶褐色礫混シルト（層厚0.2～0.3ｍ）　この層上面が市教委調査地の13世紀代の遺構面に対応するものと考えられ、上面で溝状遺構や土坑状の窪みなどを検出した（第１面）。

第５層：紫褐色礫混粘質シルト（層厚0.2～0.3ｍ）　谷状地形の窪みに堆積する土層で、調査区北西部では粘性が高い。この層上面でも、旧地形を反映する若干の窪みを検出している。

第６層：明褐色礫混シルトと灰色粘質シルトの互層（層厚0.2～0.3ｍ）いわゆる地山の風化・転落層を主体とする土層で、第５層同様谷状地形の深みには厚く堆積する。この層中から、縄文土器・弥生土器・サヌカイト剥片などが少量出土している。

第７層：明灰色巨礫混シルト～細砂（層厚0.3ｍ以上）いわゆる地山が風化した土層で、斜面には拳大～人頭大の花崗岩等が多量に集積している(第２面)。この層直上から、ナイフ形石器・石核（第９図－８・12）が出土している。

第８層：花崗岩を主とするいわゆる地山である。南東部では褐色系の粗砂～礫、巨礫混のシルト～粗砂が互層となって数枚堆積している。



第３図　柱状図（1/50）

表2　土層一覧

層名	層厚(m)	特　徴	第1調査区	第2調査区	第3調査区
第1層	0.1～0.2	床土状（耕土削平） 中近世の遺物含む	[11層　緑灰色粘質シルト混微砂]	[21層　緑灰色礫混シルト]	[31層　明橙色礫混シルト～微砂]
第2層	0.1～0.2	床土状（耕土削平） 中近世の遺物含む		[22層　茶灰色礫混シルト] 2201茶褐色礫混粘質シルト	[32層　明褐色礫混粘質シルト 3201茶褐色礫混粘質シルト
第3層	0.15～0.25	第1層・第2層に削平		[23層　灰褐色礫混シルト]	[33層　茶褐～灰褐色礫混シルト] 3301にぶい黄褐色礫混砂質シルト 3302茶褐色礫混粘質シルト（礫多・粘質強） 3303茶褐色礫混粘質シルト（礫少・粘質強） 3304茶褐色粘質シルト（粘性強）
第4層	0.1～0.2	上面が第1面	[14層　茶褐色礫混シルト]	[24層　灰色粘土・紫褐色礫混粘質シルト] 2401灰褐～紫褐色礫混シルト 2402灰色粘土と紫褐色礫混粘質シルトの互層	[34層　茶褐～紫褐色礫混粘質シルト(礫極少・粘性強)] 3401茶褐色礫混粘質シルト（礫少・粘性弱))
第5層	0.1～0.2	旧地形の窪みに厚く堆積 調査地北西部で粘性高い	[15層　にぶい褐色礫混シルト] 1501紫褐色礫混シルト 1502紫褐～茶褐色礫混シルトと灰色粘質シルトの互層 1503にぶい褐色礫混粘質シルト 1504にぶい褐色粗砂～礫 1505茶褐～にぶい褐色礫～粗砂 1506灰色微砂混粘質シルト 1507灰色粘土混茶褐色微砂	[25層　紫褐色礫混粘質シルト] 2501紫褐色礫混粘質シルト（灰色粘土少量含む）	[35層　紫褐色礫混粘質シルト] 3501淡紫褐色礫混粘質シルト 3502灰褐～紫褐色礫混粘質シルト（礫極少・粘性強） 3503茶褐色礫混粘質シルト 3504灰色粘質シルト・茶褐色砂質シルト・明褐色礫混粘質シルトの互層
第6層	0.2～0.3	地山の風化・転落土層 旧地形の窪みに厚く堆積する 弥生土器片・サヌカイト剥片等を少量含む	[16層　灰色粘土混明褐色微砂] 1601明褐色微砂 1602明褐色礫	[26層　灰色微砂] 2601黄灰色微砂	[36層　明褐色シルトに花崗岩粒(径10～15cm以上)] 3601茶褐～黄褐色礫混砂質シルト 3602茶褐色礫混砂質シルト(礫少) 3603明褐色礫混砂質シルト 3604灰色粘土混明褐色シルト 3605灰色粘質シルト（礫極少量含む） 3606明褐色シルト 3607明褐色シルトに花崗岩粒（5cm未満）
第7層	0.2～0.3	地山の風化土層 上面が第2面	[17層　巨礫含み明褐色礫]	[27層　巨礫含み黄灰色礫混シルト]	[37層　灰色シルト混明褐色粗砂] 3701灰色シルトと明褐色礫混シルトの互層
第8層	0.3以上	いわゆる地山	[18層　花崗岩風化土層]	[28層　花崗岩風化土層]	[38層　花崗岩風化土層]

第３節　検出遺構と出土遺物（第４図～第９図・第11図・第12図）

１）１区の概要

屋内運動場東側の調査区で、調査期間は平成４年６月９日～７月30日までである。ここでは、現地表下0.4～0.8ｍ（T.P.＋17.2～17.5ｍ）の第４層上面と現地表下1.0～1.2ｍ（T.P.＋16.6～17.5ｍ）の第７層上面で、遺構を捉えることができた。二つの遺構面は、上層を「第１面」、下層を「第２面」と呼んだ。１区に含まれる地区名は、南西から３Ａ・３Ｂ・３Ｃ・３Ｄ・４Ａ・４Ｂ・４Ｃ・４Ｄ区である。

第１面の検出遺構

第１面を構成する第４層は、１区では[14層　茶褐色シルト]である。遺構面である[14層]上面の標高は、南東が T.P.＋17.5ｍ、北西が T.P.＋17.2ｍを指している。南東の地盤が高いため、旧屋内運動場の建築・解体時に[14層]上面まで削平されている部分が多く、遺構面は北側の半分にしか遺存していなかった。

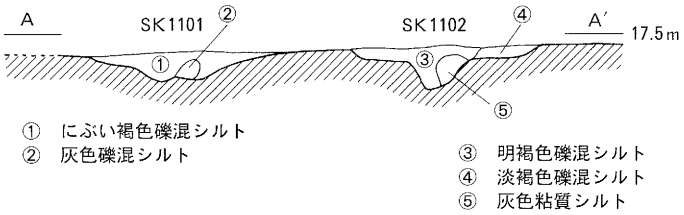
検出遺構は土坑５基で、北から「ＳＫ1101」～「ＳＫ1105」と呼んだ。

ＳＫ1101

調査区北西端部、３Ｄ～４Ｄ区で検出した。東西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面の形状は２段の掘り形を持ち、下段は浅い逆台形である。規模は、長径（東西）3.3ｍ・短径（南北）1.4ｍ・深さは上段が0.08ｍ・下段が0.18ｍを測る。内部堆積土は、①層にぶい褐色礫混シルトで、底に②層灰色礫混シルトのブロック層が堆積している。①層から弥生土器片、ナイフ形石器（第９図－７）が出土している。

ＳＫ1102

調査区北西部、３Ｄ～４Ｄ区の南端、ＳＫ1101の南東で検出した。東西に長く、東側に頂点を持つ丸みのある三角形を呈している。断面の形状は２段の掘り形を持ち、上段は浅く平坦、下段は深い逆三角形を呈している。規模は、長さ（東西）3.2ｍ・西側の辺2.2ｍ、深さは上段が0.1ｍ・下段が0.17ｍを測る。内部堆積土は、上から③層明褐色礫混シルト・④層淡褐色礫混シルトで、底の一部に⑤層灰色粘質シルトがブロック状に堆積している。



第４図　ＳＫ1101・ＳＫ1102断面図(1/50)

ＳＫ1103

調査区北部、３Ｃ～４Ｃ区北側で検出した。ＳＫ1102からは約３ｍ南に位置する。東西に長い溝状を呈する土坑で、断面の形状は逆台形、底は平坦である。規模は、長さ（東西）4.2ｍ・幅（南北）0.8ｍ・深さ0.25ｍを測る。内部堆積土は、上から①層にぶい褐色礫混シルト、④層淡褐色礫混シルト、⑤層灰色粘質シルトである。

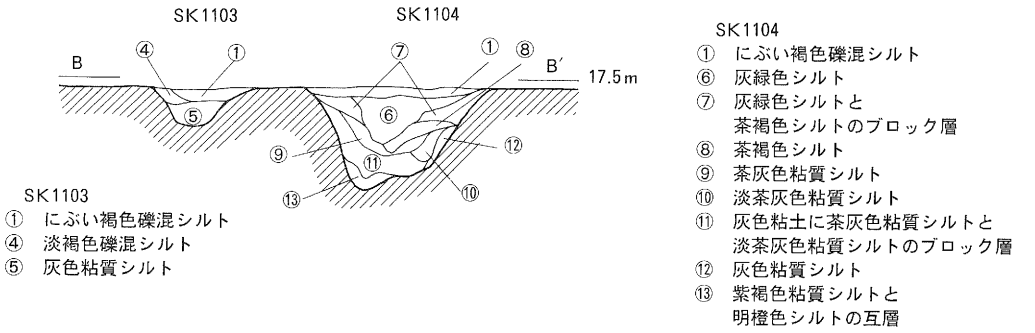
ＳＫ1104

調査区北部、３Ｃ～４Ｃ区北側、ＳＫ1103の南隣で検出した。東西に長い楕円形を呈する土坑で、断面の形状は逆台形、底はＶ字形である。規模は、長径（東西）3.85ｍ・幅（南北）1.2ｍ・深さ0.65ｍを測る。内部堆積土は、上層・中層・下層に分かれ、上層には①層にぶい褐色礫混シルトが薄く溜り、中層には⑥層灰緑色シルト・⑦層灰緑色シルト(⑥)と茶褐色シルト(⑧)のブロック層・⑧茶褐色シルト、下層には⑨層茶灰色粘質シルト・⑩層淡茶灰色粘質シルト・⑪層灰色粘土に茶灰色粘質シルト(⑨)と淡茶灰色粘質シルト(⑩)のブロック層・肩に⑫層灰色粘質シルト・最下に⑬層紫褐色粘質シルトと明橙色シルトの互層が堆積している。このうち、上層の①層は自然の堆積層、中層⑥層～⑧層と下層⑨層～⑪層は故意に埋められた土層、肩に堆積する⑫層と最下の⑬層はベースの崩落層である。

土層の堆積状況からは、土坑が掘られた後放置された間に⑫層・⑬層が自然に崩落して溜ったこと、その後⑨層～⑪層で埋められた後またしばらく時間の経過があること、つぎに再び⑥層～⑧層で埋められたこと、最終的に①層が自然に堆積したことがわかる。また、中層の⑥層～⑧層には炭が少量含まれている。

ＳＫ1105

調査区北部西端、３Ｃ区、ＳＫ1104の西南西で検出した。平面の形状はほぼ東西に長い楕円形、断面の形状は浅い半円形を呈すると考えられるが、西端は調査区外に至り、北西には撹乱があるため、全容は明らかでない。規模は、検出部での東西1.6ｍ・短径（南北）0.9ｍ・深さは0.1ｍを測る。内部には①層にぶい褐色礫混シルトが堆積する。



第５図　ＳＫ1103・ＳＫ1104断面図(1/50)

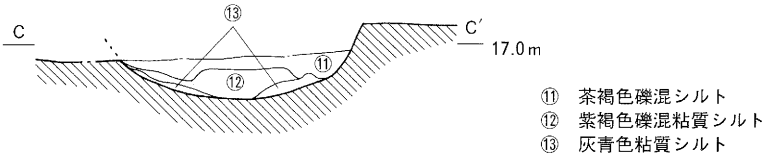
第２面の検出遺構

第２面を構成する第７層は、１区では[17層　巨礫含み明褐色礫]である。[17層]上面のレベル高は、南東で T.P.＋17.5m、北西で T.P.＋16.6m前後を指し、南東が高く北西が低い。

ここでは、土坑２基のほか、西～北西へなだらかに落ち込む谷状地形を検出した。２基の土坑は北から「ＳＫ1201」・「ＳＫ1202」と呼んだ。

ＳＫ1201

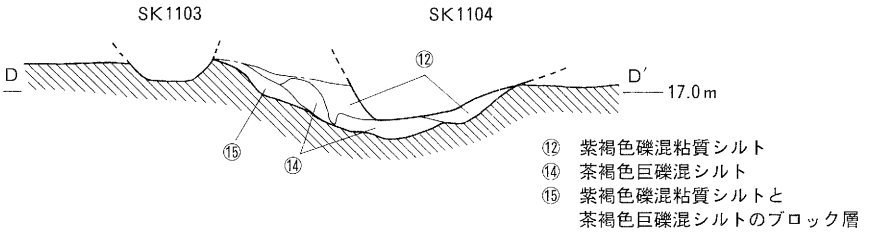
調査区北西部、３Ｄ～４Ｄ区に位置する。第１面のＳＫ1101・ＳＫ1102とほぼ重複した位置にあるため、上面は上層の遺構によって破壊されている。現状での平面の形状はほぼ東西に長い隅丸長方形で、断面の形状は半円形を呈する。規模は、長さ（東西）3.0ｍ・幅（南北）1.65ｍ・深さ0.3ｍを測る。内部堆積土は、上から⑪層茶褐色礫混シルト・⑫層紫褐色礫混粘質シルト・⑬層灰青色粘質シルトである。最下の⑬層の堆積状況から、しばらく帯水していたことがわかる。⑪層から弥生土器片、楔形石器（第９図－10）が出土している。



第６図　ＳＫ1201断面図(1/50)

ＳＫ1202

調査区北部西寄り、３Ｃ～４Ｃ区に位置する。第１面のＳＫ1103・ＳＫ1104にほぼ重複しており、ＳＫ1201と同様、上層の遺構に破壊されている部分がある。平面の形状は、ほぼ東西に長い楕円形で、東端に小さな突出部をもつ。断面の形状は半球形であるが、東側は二段の掘り方をもち、突出部にむかってテラス状の平坦部を有する。規模は、長径（東西）4.9ｍ・短径（南北）2.25ｍ・１段目の深さ0.2ｍ・二段目の深さ0.4ｍを測る。内部堆積土は、上から⑫層紫褐色礫混粘質シルト、⑭層茶褐色巨礫混シルト、⑮層紫褐色礫混粘質シルト(⑫)と茶褐色巨礫混シルト(⑭)のブロック層である。このうち、おもに⑫層は１段目に、⑭層は１段目の肩の斜面に、⑮層は２段目に堆積しており、⑭層には炭が含まれる。



第７図　ＳＫ1202断面図(1/50)

２）２区の概要

屋内運動場西端の調査区で、調査期間は平成４年６月９日～６月26日までである。ここでは、現地表下0.5～1.1ｍ（T.P.＋16.8～17.3ｍ）の第４層・第５層上面と現地表下0.8～1.3ｍ（T.P.＋16.5～17.2ｍ）の第７層上面で、遺構を捉えることができた。１区と同様、上層の遺構面を「第１面」、下層の遺構面を「第２面」と呼んだ。

２区も南上がりの微地形を呈し、過去の開発などで第４層は南部ではほとんど削平されている。さらに、２区の北部は建て替え前のプールがあった場所で、北側半分は、上面から約１ｍの深さまでプール建設時に掘り込まれて、削平されていたほか、南部では、基礎杭の痕跡が数ヶ所で認められた。またここでも、微地形を反映して、遺構面は１区よりも低い。

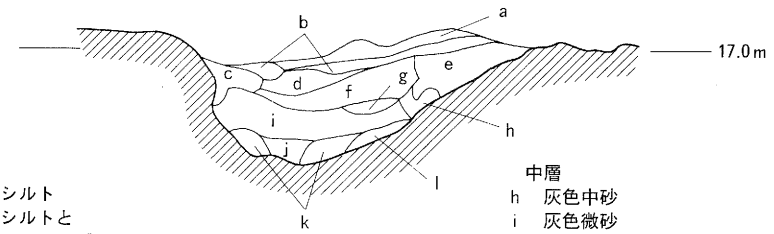
第１面の検出遺構

第１面を構成する土層は、２区では［24層　灰色粘土混紫褐色粘質シルト］であるが、南部では［24層］がほとんど削平されていたため、南部では［25層　紫褐色礫混粘質シルト］上面で第１面をおさえている。［24層］・［25層］のレベル高は南が T.P.＋17.3ｍ、北が T.P.＋16.8ｍ前後で、１区よりさらに0.2～0.3ｍ下がっている。

ここでは井戸１基（ＳＥ2101）、土坑７基、溝状遺構２条を検出した。土坑・溝は北から「ＳＫ2101」～「ＳＫ2107」、「ＳＤ2101」・「ＳＤ2102」と呼んだ。

ＳＥ2101

調査区北西端、２Ｄ区で検出した。西側は調査区外に至るため明確ではないが、平面の形状は円形または隅丸方形を呈するものと考えられる。断面の形状は二段の掘り形を持ち、上段は1～0.2ｍ程度の深さでゆるやかに掘り込まれ、下段は0.5～0.6ｍの深さで急激に落ち込む。検出部での規模は、径2.0ｍ前後・深さ0.75ｍを測る。



上層
a　茶褐色礫混シルト
b　茶褐色礫混シルトと
　灰褐色礫混シルトのブロック層
c　茶褐色礫混粘質シルト
d　茶褐色礫混粘質シルトと
　灰褐色礫混粘質シルトのブロック層
e　茶褐色礫～粗砂混粘質シルト
f　茶褐色シルトと紫褐色礫混シルトと
　灰色粘土のブロック層
g　茶褐色～紫褐色礫～微砂混シルト

中層
h　灰色中砂
i　灰色微砂

下層
j　暗灰色粘質シルト
k　暗紫褐色粘質シルト
l　暗灰色粘質シルトと紫褐色粘質シルトと
　灰色微砂の薄い互層

第８図　ＳＥ2101断面図(1/50)

内部堆積土は、おおまかに上層（ａ層～ｇ層）・中層（ｈ層・ｉ層）・下層（ｊ層～ｌ層）に分けることができる。

上層には、ａ層茶褐色礫混シルト・ｂ層茶褐色礫混シルトと灰褐色礫混シルトのブロック層・ｃ層茶褐色礫混粘質シルト・ｄ層茶褐色礫混粘質シルトと灰褐色礫混粘質シルトのブロック層・ｅ茶褐色礫～粗砂混粘質シルト・ｆ茶褐色シルトと紫褐色礫混シルトと灰色粘土のブロック層・ｇ茶褐色～紫褐色礫～微砂混シルトが複雑に堆積している。中層はｈ層灰色中砂・ｉ層灰色微砂、下層はｊ層暗灰色粘質シルト・ｋ層暗紫褐色粘質シルト・ｌ層暗灰色粘質シルトと紫褐色粘質シルトと灰色微砂の薄い互層からなる。

上層はブロック状の堆積が主であることから、人為的に埋め立てられた層と考えられ、中層の砂の堆積からは湧水層に達していたこと、下層の粘質シルトの互層から帯水していたことなどがわかる。

上層のｂ層から弥生土器片、下層のｋから縄文土器片（第９図－１）が出土しているが、弥生土器片は井戸埋め戻し、縄文土器片は井戸掘削の際に混入したものと考えられる。

ＳＫ2101

調査区北部東側、３Ｄ区で検出した。ＳＥ2101の南東２ｍ付近に位置する。東側はわずかに調査区外に至るが、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は、径0.7ｍ・深さ0.1ｍ程度で、内部堆積土は①層にぶい褐色礫混シルトである。

ＳＫ2102

調査区中央北東側、２Ｃ～３Ｃ区で検出した。ＳＫ2101から南７ｍに位置する。東側は調査区外に至るが、東西に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径（東西）1.4m以上・短径（南北）0.85ｍ・深さ0.05ｍを測り、内部堆積土は①層にぶい褐色礫混シルトである。

ＳＫ2103

調査区中央北東側、２Ｃ～３Ｃ区で検出した。ＳＫ2102の南隣に位置する。東側は調査区外に至るが、東西に長い隅丸の長方形を呈するものと思われる。規模は、長さ（東西）2.0ｍ以上・幅（南北）1.２ｍ・深さ0.18ｍを測る。二段の掘り形をもち、西側には、テラス状の平坦面をもつ。内部堆積土は①層にぶい褐色礫混シルトである。

ＳＫ2104

調査区南部東側、２Ｂ区で検出した。ＳＫ2102・ＳＫ2103から南10ｍ前後に位置し、すぐ北側にはＳＤ2101がある。西側は調査区外に至るが、円径から楕円形を呈するものと思われる。検出部での規模は、径1.7ｍ前後・深さ0.15ｍを測る。二段の掘り形をもち、東～南側には、テラス状の平面をもつ。内部堆積土は、上から⑧層明褐色礫混粘質シルト・⑨層茶褐色礫混粘質シルト・⑩層黄灰色礫混粘質シルトである。

ＳＫ2105

調査区南部西側、３Ｂ区で検出した。ＳＫ2104の南東約１ｍに位置する。東側は調査区外に至るため全容は明らかではないが、検出部での上面の形状は不定形で、規模は東西の幅0.9ｍ・南北の幅0.7ｍ・深さは0.18ｍを測る。内部堆積土は、上から①層にぶい褐色礫混シルト・⑦層灰色粘質シルトである。

ＳＫ2106

調査区南部西側、２Ｂ～３Ｂ区で検出した。ＳＫ2105の南１ｍ付近に位置する。東側は調査区外に至るが、東西に長い楕円形を呈するものと考えられる。検出部での規模は、長径（東西）1.4ｍ・短径（南北）0.85ｍ・深さは0.05ｍ程度を測る。内部堆積土は①層にぶい褐色礫混シルトである。

ＳＫ2107

調査区南部、２Ｂ～３Ｂ区で検出した。ＳＫ2106の南西1.5ｍに位置する。東西の長さ1.9ｍ・南北の長さ1.15ｍ・深さ0.1ｍの不定形を呈し、北部に幅0.3ｍほどの溝状の浅い窪みが伸びる。内部堆積土は、上から⑥層にぶい褐色シルトと灰色粘質(⑦)シルトのブロック層・⑦層灰色粘質シルトである。

ＳＤ2101

調査区中央南部、２Ｂ～３Ｂ～２Ｃ～３Ｃ区にまたがって検出した。ＳＫ2103の南２～３ｍ、ＳＫ2104のすぐ北側に位置する。西側壁面の観察から、ＳＫ2103とは切りあっていないことがわかる。北東－南西に伸びるもので、検出部ではＶ字形に分岐している。検出長4.0ｍ・幅0.6～1.2ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は⑧層明褐色礫混粘質シルトで、内部から楔形石器（第９図－９）が出土している。

ＳＤ2102

調査区南端、２Ａ～３Ａ区で検出した。ＳＫ2107の南１～２ｍ付近に位置する。北東－南西に伸びるもので、検出長2.5ｍ・幅2.2～2.5ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は①層にぶい褐色礫混シルトである。

第２面の検出遺構（第７層上面：T.P.＋16.5～17.2ｍ）

第２面を構成する土層は、２区では［27層　巨礫含み黄灰色礫混シルト］である。この面では、１区第２面ほどの深い谷状地形は認められなかったが、[27層]上面はなだらかに北へ下がっており、レベル高は南が T.P.＋17.2ｍ、北が T.P.＋16.5ｍ前後で、第１面と同様に、１区より低い。

第２面では、土坑２基、小穴１個（ＳＰ2201)、溝１条（ＳＤ2201）を検出した。土坑は、北から「ＳＫ2201」「ＳＫ2202」と呼んだ。

ＳＫ2201

調査区中央東側、３Ｃ区で検出した。東側は調査区外に至るが、検出部では、径1.0ｍ前後の半円形を呈し、断面の形状は浅い半円形、 深さは0.05ｍ程度である。内部堆積土は ⑪層紫褐色礫混シルトである。

ＳＫ2202

調査区中央部、２Ｂ～３Ｂ～２Ｃ～３Ｃ区で検出した。長径（東西）1.5ｍ・短径（南北）1.3ｍ程度の楕円形を呈し、深さは0.18ｍを測る。西側には幅0.55ｍ・深さ0.1ｍ程度の溝状の窪みが伸びる。断面の形状は二段の掘り方を持ち、底は平坦である。内部堆積土は上から⑪層紫褐色礫混シルト、⑯層青灰色粘質シルトである。

ＳＰ2201

調査区北部西端、２Ｃ区で検出した。長径（東西)0.45ｍ・短径（南北)0.25ｍ・ 深さ0.18ｍを測る。断面の形状は半円形で柱の痕跡などはなかった。内部には⑪層紫褐色礫混シルトが堆積する。

ＳＤ2201

調査区中央部、２Ｂ～３Ｂ区、ＳＫ2202の南隣で検出した。Ｓ字形に蛇行して伸びるもので、幅0.4～0.65ｍ・ 検出長2.0ｍ・深さ0.05ｍを測る。調査区内では、流路の方向は不明であるが、北東から南西に流下するものであろう。内部堆積土は、⑪層紫褐色礫混シルトである。

３）３区の概要

屋内運動場西側、階段部分の調査区で、調査期間は平成４年７月４日～８月７日までである。ここでは、現地表下1.1～1.8ｍ（T.P.＋16.4～16.9ｍ）の第４層上面と現地表下1.4～1.9ｍ（T.P.＋15.7～16.5ｍ）の第７層上面で、遺構を捉えることができた。ここでも、上層の遺構面を「第１面」、下層の遺構面を「第２面」と呼んだ。３区も南上がりの微地形を呈し、南部と西部では第４層上面まで削平されており、中央南部では、第７層にまで及ぶ撹乱があった。

第１面の検出遺構

ここでは第４層が[34層　茶褐色～紫褐色礫混粘質シルト]で、１区・２区より粘性が強い。上面の標高はT.P.＋16.4～16.9ｍで、１区・２区よりさらに深く下がっているが、中央部・南部は遺構面まで撹乱がおよんでおり、北側で小穴1個（ＳＰ3101）を検出した。

ＳＰ3101

調査区北部、１Ｄ～２Ｄ区で検出した。上面の形状は円形、断面の形状は半球形を呈し、径0.5ｍ・深さ0.25ｍを測る。内部堆積土は ①層にぶい褐色礫混シルト、⑥層灰色粘土と茶褐色シルトのブロック層で、①層から土師器の小破片が出土している。

第２面の検出遺構（第７層上面：T.P.＋15.7～16.5m）

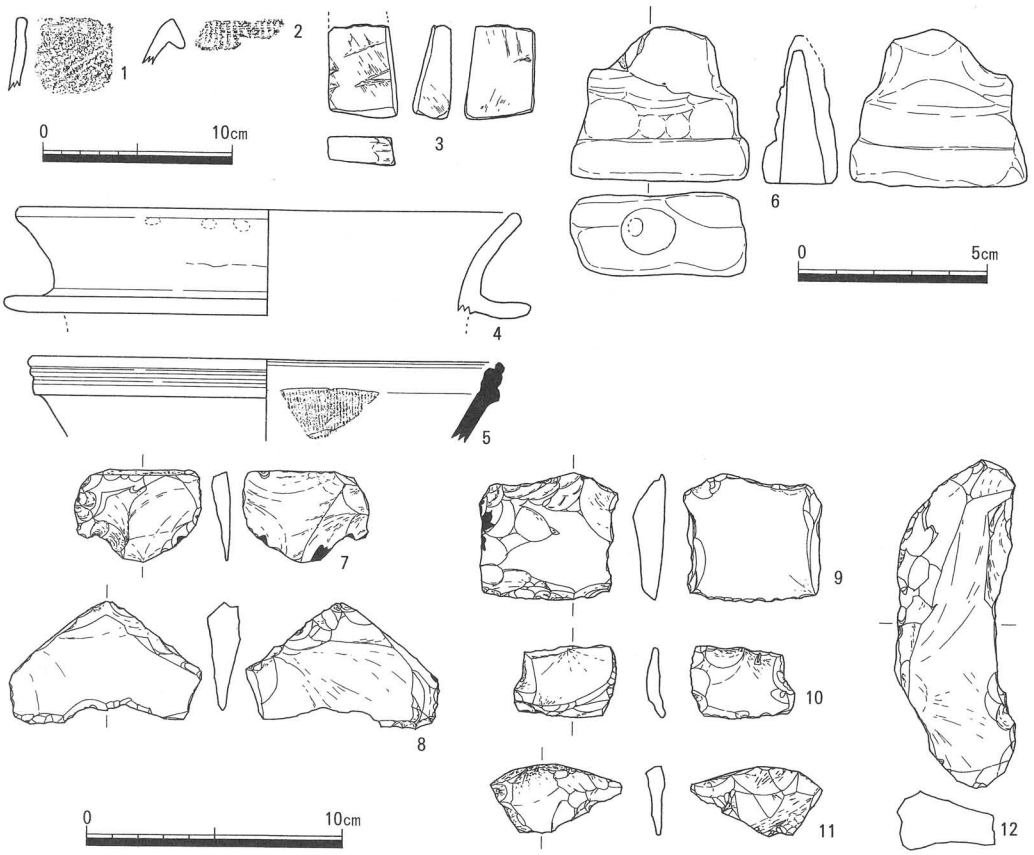
第７層は[37層　灰色シルト混明褐色粗砂]で、上面には拳大～人頭大の石が集積している。この層上面も南東から北西へ緩く下がる斜面となり、上面の標高はT.P.＋15.7～16.5ｍで、１区との高低差は約１ｍある。この面では東西方向の浅い谷状の窪みが１か所で確認された。

谷状の窪みは幅約5.0ｍ・深さ0.3～0.4ｍ程度で、東西の両岸は土手状の高まりとなっている。遺構面の直上に堆積する第６層からは、弥生時代中期の土器片、石器未成品、第７層直上からは、ナイフ形石器（第９図－8）、石核（第９図－12）が出土している。

４）　出土遺物の概要

遺物の出土量はごくわずかで、そのほとんどは遺構に伴うものではない。また、遺構から出土したものであっても、必ずしもその遺構の時期を決定づけるものでもない。

第２層から出土したものには、すり鉢（５）をはじめとして近世の遺物が含まれ、第３層中からは砥石（３）のほか、土師器・須恵器・瓦器などの小破片が含まれている。このことから、第４層上面で検出された遺構は、平成２年度に行われた八尾市教育委員会による遺構確認調査（恩智遺跡90－10）で確認された13世紀代の遺構に対応するものと考えられる。



第９図　出土遺物実測図（土器Ｓ＝1/4・土製品Ｓ＝1/2・石器類Ｓ＝1/3）

また、縄文土器片(1)は、2区第1面の井戸ＳＥ2101、下層k暗紫褐色粘質シルトから出土したが、井戸ＳＥ2101は最終ベースの第7層・第8層まで掘り込まれていることから、(1)は井戸掘削時に混入したものと考えられる。同様に、第1面の遺構ＳＫ1101・ＳＤ2101から出土したナイフ形石器(7)・楔形石器(9)も遺構掘削時・埋め戻し時に混入したものと考えられる。

一方、図示していないものの、縄文土器・弥生土器やサヌカイト剥片などは、第6層に含まれるもので、第7層直上でナイフ形石器(8)・石核(12)が検出されたことから、第2面の時期は、縄文時代から弥生時代中期頃までの可能性が高い。

第4章　まとめ

調査の結果、南東から北西へ下がる旧地形を確認することができ、数条の谷状地形もあわせて確認することができた。この地形は、13世紀代までの状況を反映しており、谷の深みの上層には、溝状、あるいは土坑状の窪みが残っていた。当地で大規模な開発が行われ、整地されるのは近世以後のことで、その時点で、高みに残る前時代の生活面はかなり削平され、逆に低地部は埋め立てられていることが、3区の複雑な土層堆積からも明らかである。

一方、当調査地は「天王の森」を中心とする扇状地の縁辺部に位置しており、これまでにその付近で検出されている縄文時代～弥生時代の集落からは離れているものと考えられる。しかし、いわゆる地山（第7層）の直上や直上層（第6層）からは、縄文時代後期～弥生時代中期の土器片や石器などが若干出土していることから、近隣に当該時期の生活の跡があるものと考えられる。

参考文献

梅原末治・島田貞彦「河内国府石器時代遺蹟発掘報告書」『京都大学文学部考古学研究報告 第2冊』1923
鳥居龍蔵「石器時代遺跡調査(15)」大阪毎日新聞大正6年8月12日付　1917
藤岡謙二郎他「中河内郡高安村恩智弥生式遺跡」『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告　第12冊』1941
今里幾次「河内恩智の縄文土器」『日本考古学1－3』1948
山本昭・泉本知秀・福岡澄男「八尾市恩智遺跡の出土遺物について」『大阪文化誌　第2巻1号』1976
田代克己他「恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」瓜生堂遺跡調査会　1980
嶋村友子他「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ」－恩智遺跡の調査－　八尾市教育委員会　1987
吉田野乃　「恩智遺跡（90－10）の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書』　八尾市教育委員会　1991
西村公助　「Ⅳ　恩智遺跡第5次調査」『八尾市文化財調査研究会報告34』　(財)八尾市文化財調査研究会　1992
原田昌則　「Ⅴ　恩智遺跡第6次調査」『八尾市文化財調査研究会報告34』　(財)八尾市文化財調査研究会　1992
吉田野乃　「恩智遺跡（91-335）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』　八尾市教育委員会　1992

付表１　検出遺構一覧表（第１面）

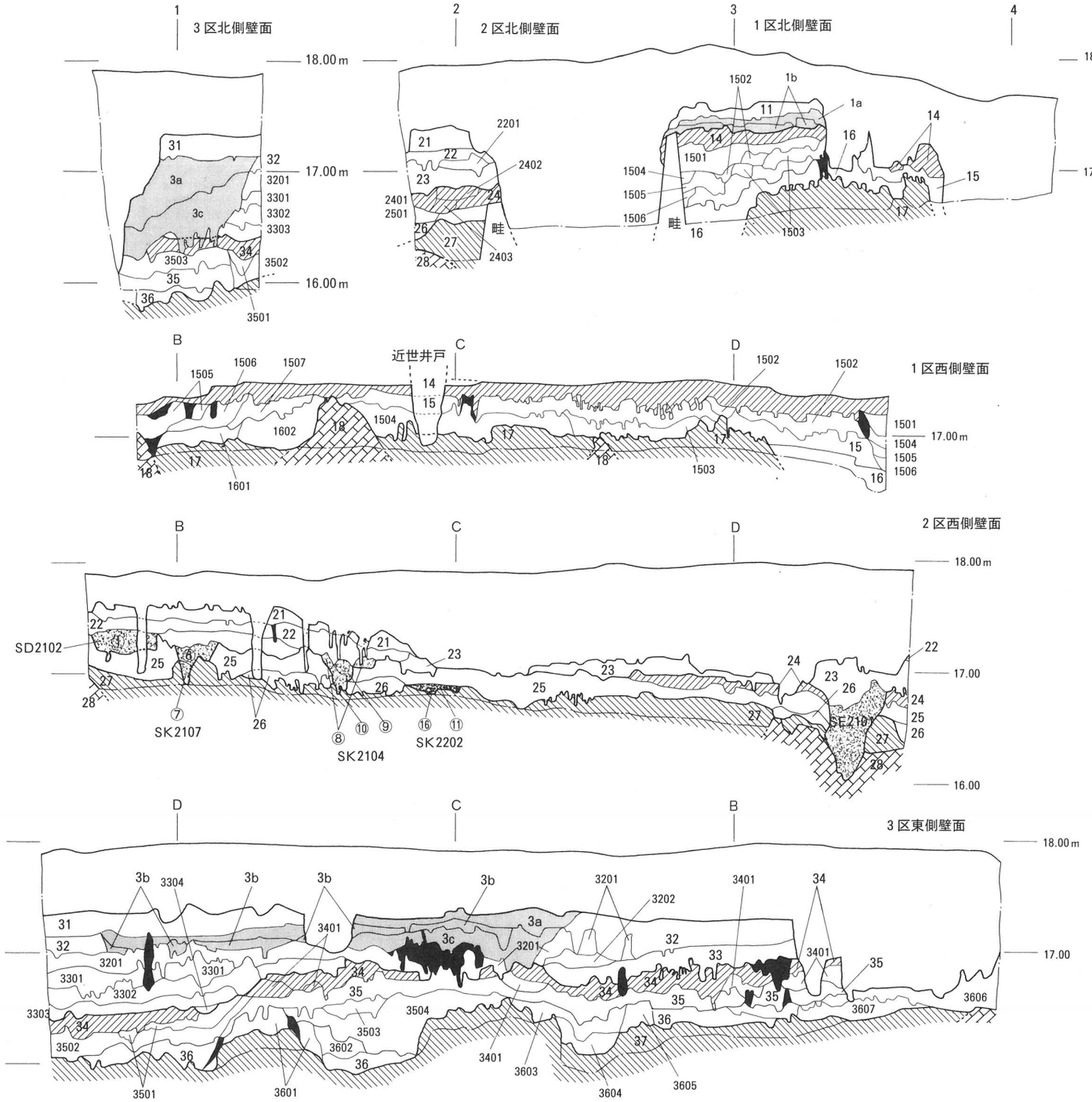
遺構名	地区	法量(m) 長径	短径	深さ	方向 (長軸)	内部堆積土 備　　考
ＳＫ1101	１区 ３Ｄ～４Ｄ	3.3	1.4	0.18	東－西	①にぶい褐色礫混シルト　② 灰色礫混シルトのブロック層 ①層から弥生土器片、ナイフ形石器(７)出土
ＳＫ1102	１区 ３Ｄ～４Ｄ	3.2	1.35	0.27	東－西	③明褐色礫混シルト　④淡褐色礫混シルト　⑤灰色粘質シルト
ＳＫ1103	１区 ３Ｃ～４Ｃ	4.2	0.8	0.25	東－西	①にぶい褐色礫混シルト　④淡褐色礫混シルト　⑤灰色粘質シルト
ＳＫ1104	１区 ３Ｃ～４Ｃ	3.85	1.2	0.65	東－西	上層　①にぶい褐色礫混シルト 中層（⑥～⑧層） 灰緑シルト・茶褐色シルトのブロック層 下層（⑨～⑪層） 茶灰色粘質シルト・淡茶灰色粘質シルト・灰色粘土のブロック層 最下層（⑫・⑬） 灰色粘質シルト、紫褐色粘質シルトと明褐色シルトの互層
ＳＫ1105	１区 ３Ｃ	1.6以上	0.9	0.1	東－西	①にぶい褐色礫混シルト
ＳＥ2101	２区 ２Ｄ	2.0		0.75	－	上層（ａ～ｇ層） 茶褐色・灰褐色・紫褐色礫混シルト主体のブロック層 中層（ｈ・ｉ層） 灰色微砂～中砂 下層（ｊ～ｌ層） 暗灰色・暗紫褐色粘質シルト主体のブロック層 ｂ層から弥生土器片、ｋ層から縄文土器片(１)が出土
ＳＫ2101	２区 ３Ｄ	0.7		0.1	－	①にぶい褐色礫混シルト
ＳＫ2102	２区 ２Ｃ～３Ｃ	1.4以上	0.85	0.05	東－西	①にぶい褐色礫混シルト
ＳＫ2103	２区 ２Ｃ～３Ｃ	2.0以上	1.2	0.18	東－西	①にぶい褐色礫混シルト
ＳＫ2104	２区 ２Ｂ	1.7		0.15	－	⑧明褐色礫混粘質シルト ⑨茶褐色礫混粘質シルト ⑩黄灰色礫混粘質シルト
ＳＫ2105	２区 ３Ｂ	0.9以上	0.7	0.18	－	①にぶい褐色礫混シルト ⑦灰色粘質シルト
ＳＫ2106	２区 ２Ｂ～３Ｂ	1.4以上	0.85	0.05	東－西	①にぶい褐色礫混シルト
ＳＫ2107	２区 ２Ｂ～３Ｂ	1.9以上	1.15	0.1	－	⑥にぶい褐色シルトと灰色粘質シルトのブロック層 ⑦灰色粘質シルト
ＳＤ2101	２区 ２Ｂ～３Ｂ ２Ｃ～３Ｃ	(検出長) 4.0	(幅) 0.6～1.2	(深さ) 0.15	(流路) 北東－南西	⑧明褐色礫混粘質シルト 楔形石器(９)が出土
ＳＤ2102	２区 ２Ａ～３Ａ	(検出長) 2.5	(幅) 2.2～2.5	(深さ) 0.15	(流路) 北東－南西	① にぶい褐色礫混シルト
ＳＰ3101	３区 １Ｄ～２Ｄ	(径) 0.5		(深さ) 0.25	－	①にぶい褐色礫混シルト ⑥灰色粘土と茶褐色シルトのブロック層 ①層から土師器片

付表２　検出遺構一覧表（第２面）

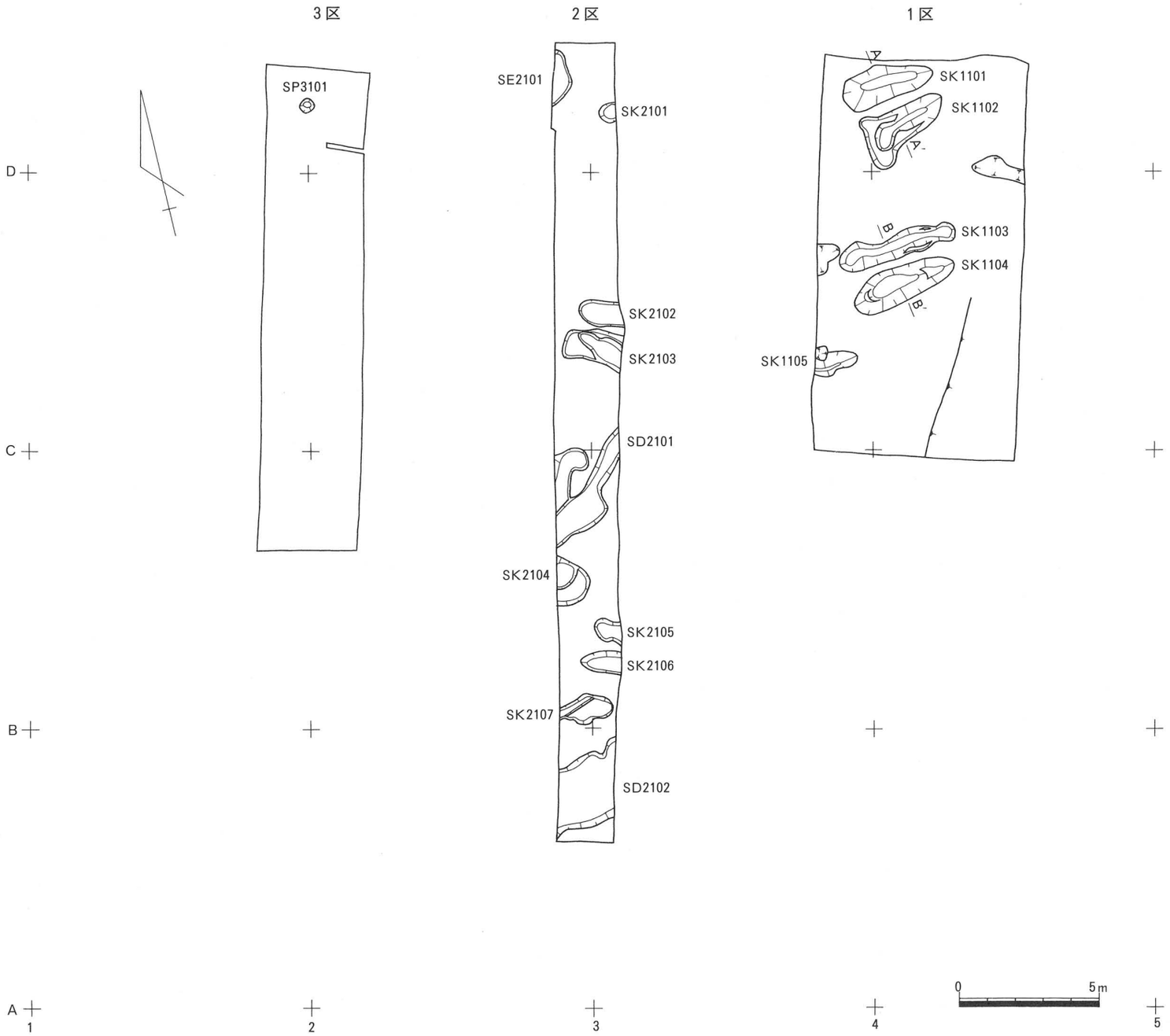
遺構名	地区	法量(m) 長径	短径	深さ	方向 (長軸)	内部堆積土 備　　考
ＳＫ1201	１区 ３Ｄ～４Ｄ	3.0	1.65	0.3	東－西	⑪茶褐色礫混シルト ⑫紫褐色礫混粘質シルト ⑬灰青色粘質シルト ⑪層から弥生土器片、楔形石器(10)出土
ＳＫ1202	１区 ３Ｃ～４Ｃ	4.9	2.25	0.6	東－西	⑫紫褐色礫混粘質シルト ⑭茶褐色巨礫混シルト（炭を含む） ⑮紫褐色礫混粘質シルトと茶褐色巨礫混シルトのブロック層
ＳＫ2201	２区 ３Ｃ	1.0前後		0.05	－	⑪紫褐色礫混シルト
ＳＫ2202	２区 ２Ｂ～３Ｂ ２Ｃ～３Ｃ	1.5	1.3	0.18	東－西	⑪紫褐色礫混シルト ⑯青灰色粘質シルト
ＳＰ2201	２区 ２Ｃ	0.45	0.25	0.18	東－西	⑪紫褐色礫混シルト
ＳＤ2201	２区 ２Ｂ～３Ｂ	(検出長) 2.0前後	(幅) 0.4～ 0.65	0.05	(流路) 北東－南西	⑪紫褐色礫混シルト

付表４　出土遺物一覧表

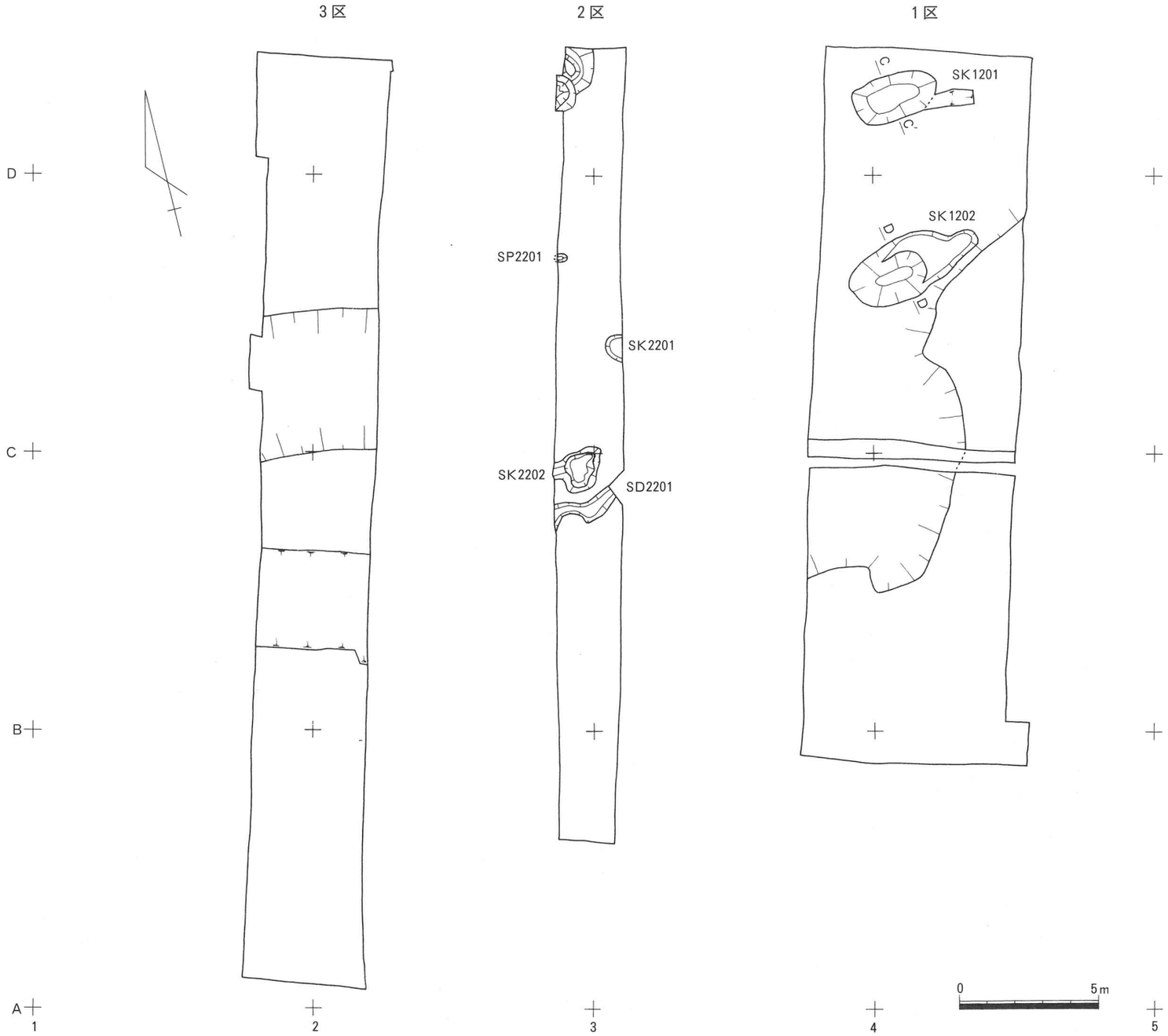
番号	器種	出土地	法量(cm)	色調・胎土・焼成	特　　徴	備　　考
1	縄文土器片？ (鉢)	２区 ＳＥ2101 ｋ層	－	赤褐色 やや粗 良好	ナデ、ヨコナデ。 外面に押圧文あり。	
2	弥生土器片 (壺)	中央トレンチ 撹乱中	－	暗褐色 やや粗 良好	ナデ、ヨコナデ。 口縁部外端面に櫛描き簾状文を施す。	
3	砥石	１区 (第３層対応)	現存幅　3.7 現存長　4.9 最大厚　1.9	－	平面台形を呈する。上端は折損する。上端の折損面以外の５面に使用痕あり。	
4	土師器 羽釜	３区 (第３層対応)	口　径 26.2 鍔　径 27.8	赤褐色 やや粗 良好	ナデ、ヨコナデ。 口縁部は外傾し、鍔は水平に伸びる。	口縁部外面・鍔裏面に煤付着
5	備前焼 すり鉢	１区 (第２層対応)	口　径 24.8	暗紅色 密 良好	口縁部外端面に２条の凹線 すり目は密(６／cm)	
6	土製品 伏見人形？	中央トレンチ 撹乱中	最大幅　4.7 現存高　4.1 最大厚　2.2	淡褐色 密 良好	座像を表すものと考えられる。 上端は欠損、底面中央左よりに１孔を穿つ。 型作り。	
7	ナイフ形石器	１区 ＳＫ1101	最大幅　5.0 最大長　3.6 最大厚　0.7	－	上端は自然面、刃部は他の３方につく。	
8	ナイフ形石器	３区 第７層直上	最大幅　7.4 最大長　4.4 最大厚　1.3	－	平面は三角形を呈する。刃部は下端左寄りにつく。	
9	楔形石器	２区 ＳＤ2101	最大幅　5.3 最大長　5.0 最大厚　1.3	－	平面は正方形を呈する。左右端は折り取る。上端右寄りに打撃点あり。	
10	楔形石器	１区 ＳＫ1201	最大幅　3.9 最大長　2.8 最大厚　0.8	－	平面は長方形、裏面は凹面を呈する。左右端は折り取る。上端中央に打撃点あり。	
11	楔形石器？	３区 第３層	最大幅　5.2 最大長　2.7 最大厚　0.9	－	平面は三角形を呈する。上端中央に打撃点あり。	
12	石核	３区 第７層直上	最大幅 12.9 最大長　4.3 最大厚　2.1	－	平面は三日月形を呈する。周縁に剥離あり。裏面はやや凹面をなす自然面。	


3 区北側壁面
2 区北側壁面
1 区北側壁面
18.00 m
17.00 m
16.00 m
17.00
畦
1 区西側壁面
近世井戸
17.00 m
2 区西側壁面
SD2102
SK2107
SK2104
SK2202
SE2101
16.00
3 区東側壁面
18.00 m
17.00

第10図　壁面図


3区
2区
1区
SP3101
SE2101
SK2101
SK2102
SK2103
SD2101
SK2104
SK2105
SK2106
SK2107
SD2102
SK1101
SK1102
SK1103
SK1104
SK1105
A
B
D
C
B
A
1
2
3
4
5
0
5m

第11図　第１面平面図

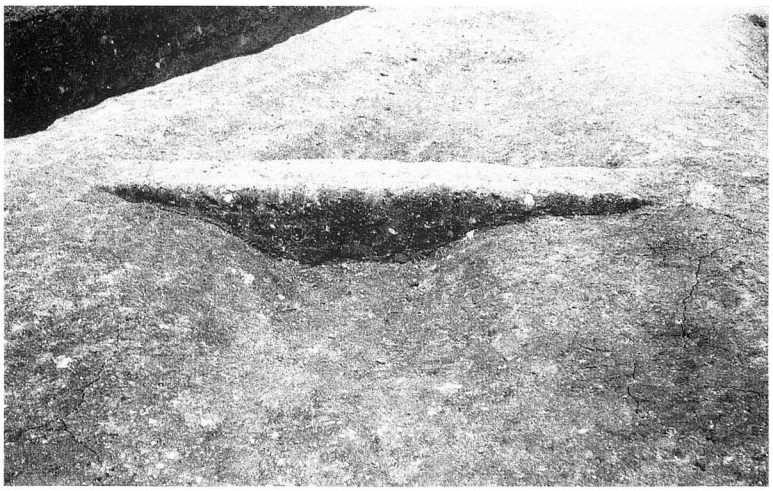

3区
2区
1区
SK1201
SK1202
SP2201
SK2201
SK2202
SD2201
D
C
B
A
1
2
3
4
5
0
5m

第12図　第２面平面図

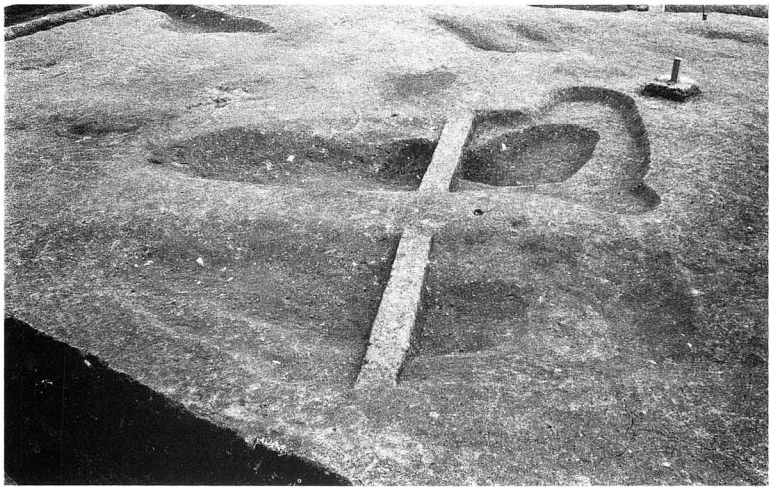
図　　版

1区第1面全景(南から)

1区第2面全景(南から)



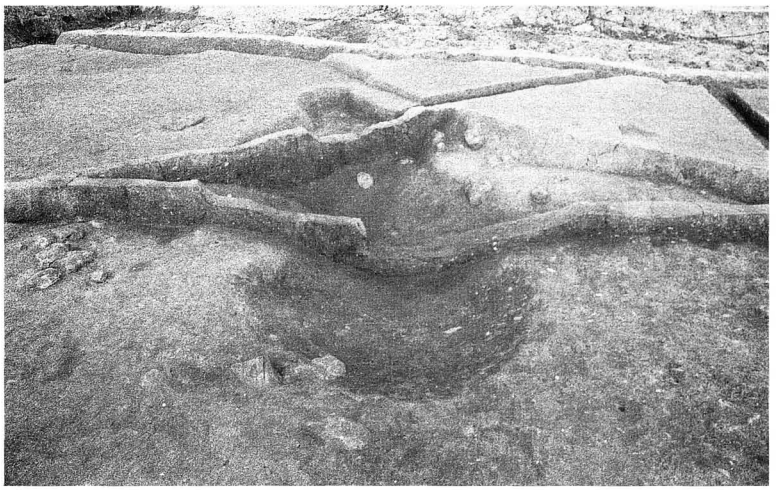
1区第1面　ＳＫ1101(西から)



1区第1面　ＳＫ1101・ＳＫ1102(北から)

1区第1面　ＳＫ1103・ＳＫ1104(西から)

1区第2面　ＳＫ1201(西から)

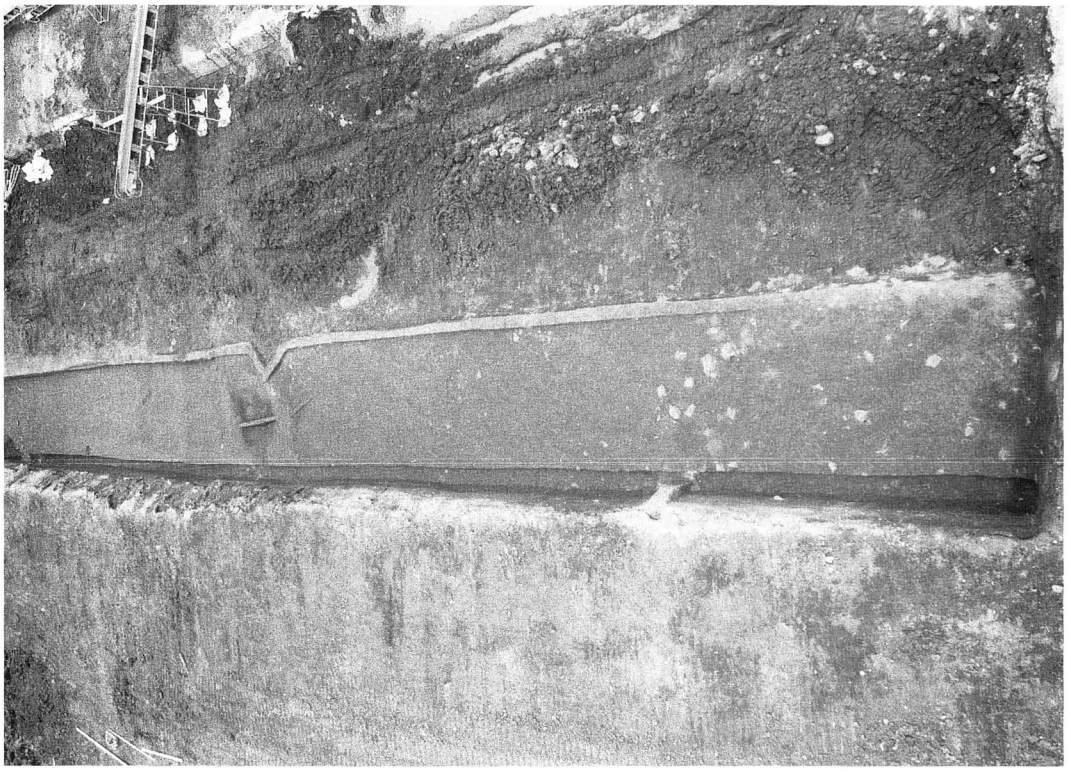


1区第2面　ＳＫ1202(西から)

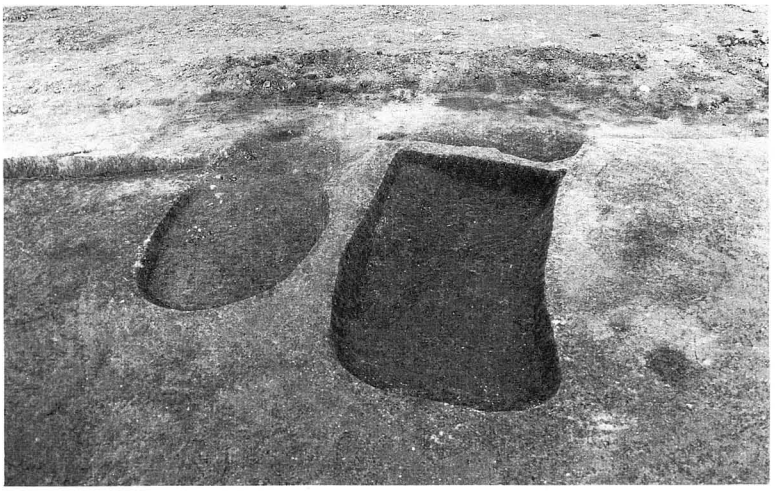
1区　下層トレンチ西側壁面

図版四

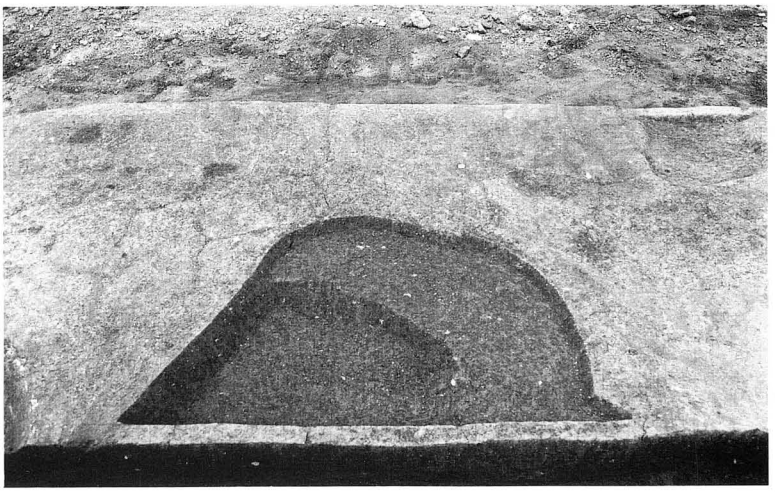
2区　第1面全景(南から)



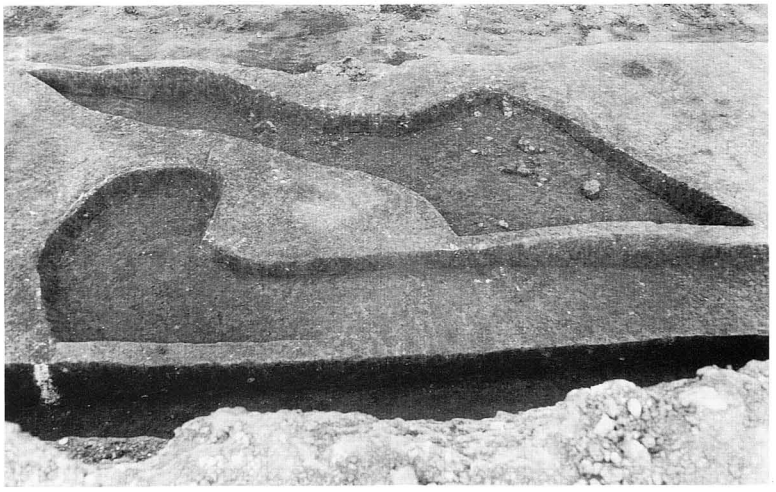
2区　第2面全景(南から)



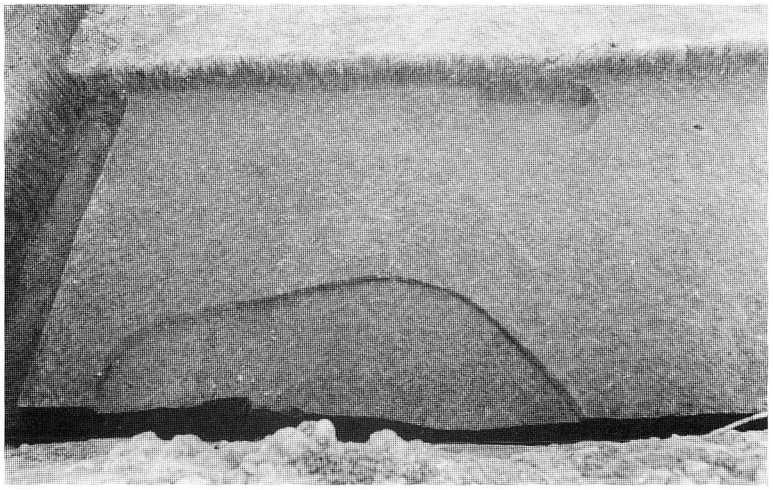
2区第1面　ＳＫ2102・ＳＫ2103(西から)



2区第1面　ＳＫ2104・ＳＫ2105(西から)



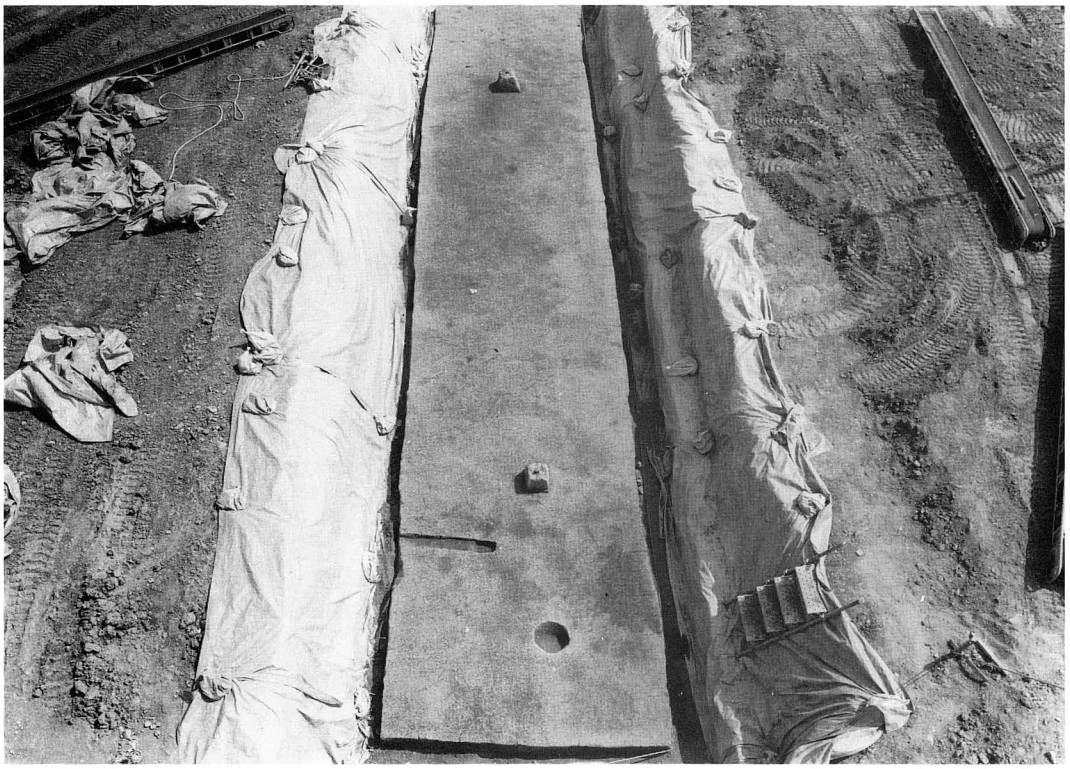
2区第1面　ＳＤ2101(西から)



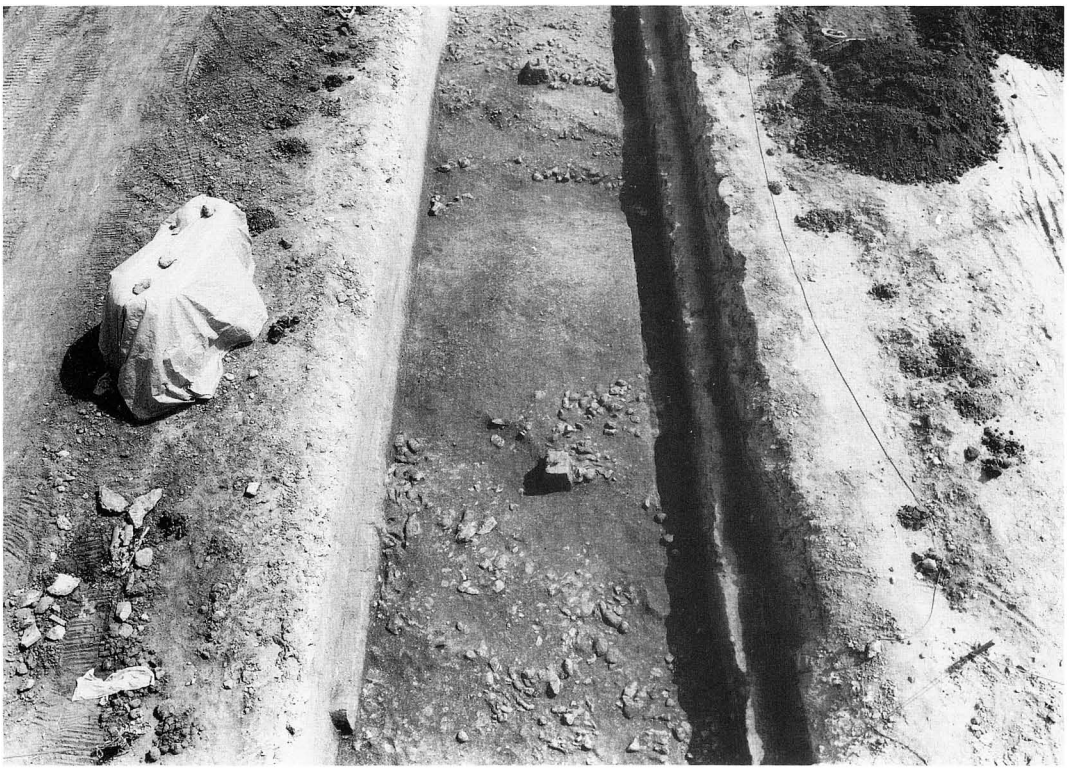
2区第1面・第2面　ＳＥ2101上層・ＳＫ2101(西から)

2区第2面　ＳＥ2101下層(西から)

2区第2面　ＳＫ2201・ＳＫ2202（西から）

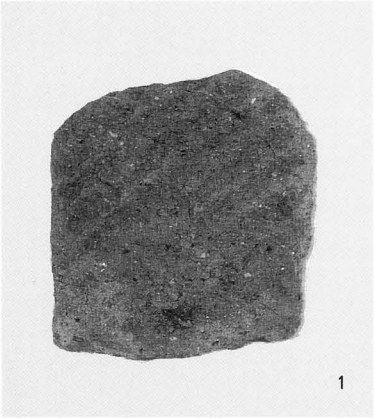


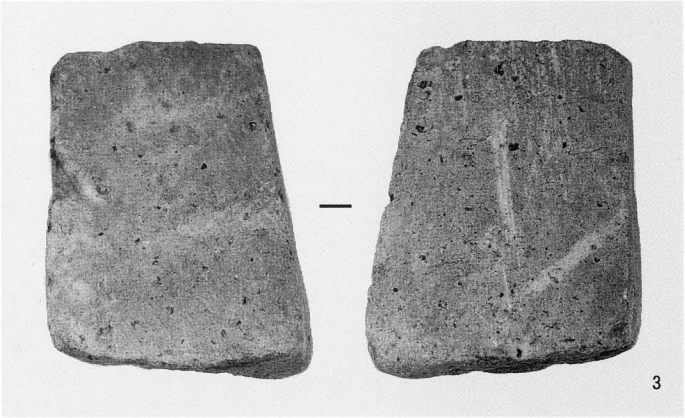
3 区第 1 面北部（北から）

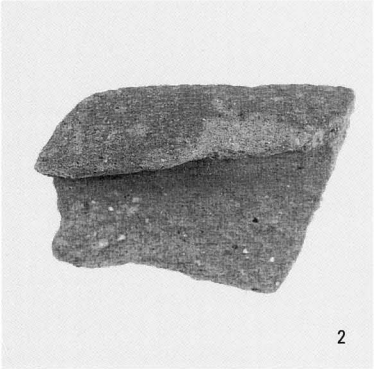


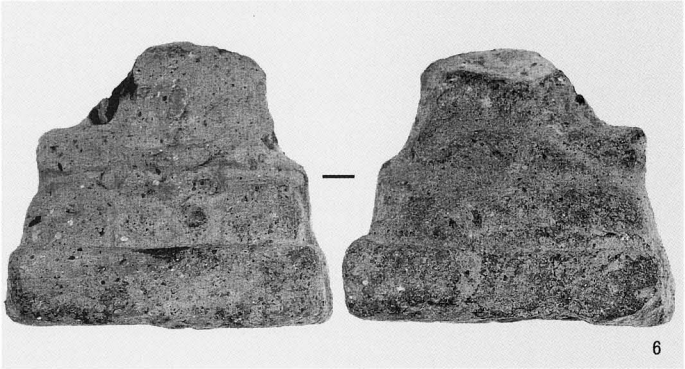
3 区第 2 面北部（北から）

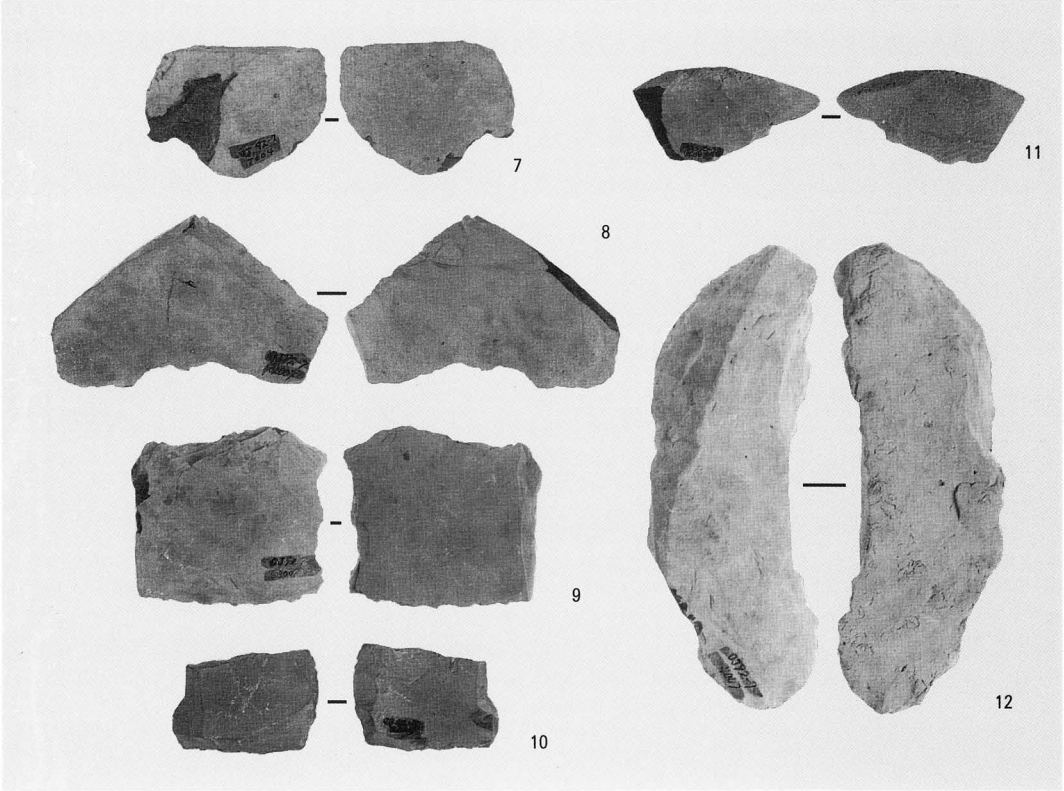
図版八











出土遺物（石器のみ　S＝1/2）

Ⅱ　郡川遺跡第１次調査（ＫＲ89－１）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市黒谷474番地先で実施した河川堤体築造工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する郡川遺跡第１次調査（ＫＲ89－１）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋134号　平成２年１月22日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成２年２月６日から２月13日（実働６日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は60㎡を測る。調査においては正木洋二・八元聡志が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成９年３月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・別所秀高（現（財）東大阪市文化財協会）・真柄　竜、図面トレース－北原、遺物観察表－北原・原田、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……29

第２章　調査概要……30

　第１節　調査の方法と経過……30

　第２節　基本層序……32

　第３節　検出遺構と出土遺物の概要……32

　　１）検出遺構・出土遺物……32

　　２）遺構に伴わない遺物……34

　第４節　出土遺物観察表……36

第３章　まとめ……40

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……29
第２図　調査地設定図……30
第３図　検出遺構平断面図……31
第４図　ＳＤ－１出土遺物実測図……33
第５図　包含層出土遺物実測図……35

写　真　目　次

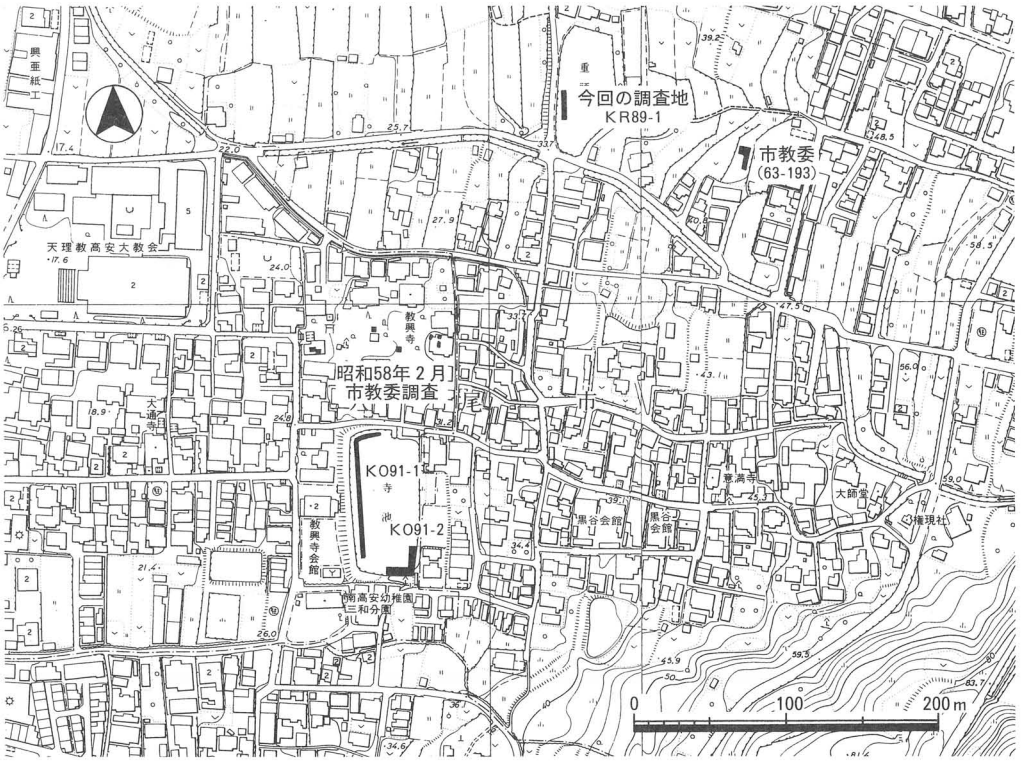
写真１　調査風景（南から）……40

図　版　目　次

図版一　調査地全景（北から）
図版二　ＳＤ－１（東から）
　　ＳＤ－２（東から）
図版三　ＳＤ－１出土遺物
図版四　包含層出土遺物

第１章　はじめに

郡川遺跡は八尾市東部の生駒山西麓部から平野部にかけての標高35～10ｍに広がる縄文時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、郡川１～５丁目、教興寺、教興寺３～７丁目、垣内１～５丁目、黒谷１～４丁目の東西約1.1km、南北1.2kmが遺跡の範囲とされている。ただ、遺跡の大半が市街化調整区域に指定されている関係で開発に伴う調査件数も少なく、一部を除き遺跡の実態は不明であった。ところが、昭和63年に八尾市黒谷439－１で宅地造成に伴う遺構確認調査（63－193）が八尾市教育委員会により実施された結果、古墳時代中期～後期の集落が検出された。これらの調査成果は郡川遺跡内における当該期の集落の存在を明らかにしたに留まらず、生駒山西麓部一帯に形成された高安古墳群の造営を推進した氏族集団の集落が古墳群に近接する位置に存在したことが明らかにされた点で注目された。このような情勢下、八尾市下水道部河川課から前記調査地の西約80ｍ地点に位置する重頭池で改修工事をする旨の届出書が八尾市教育委員会に提出された。工事が計画された地点は前記調査地に近接し



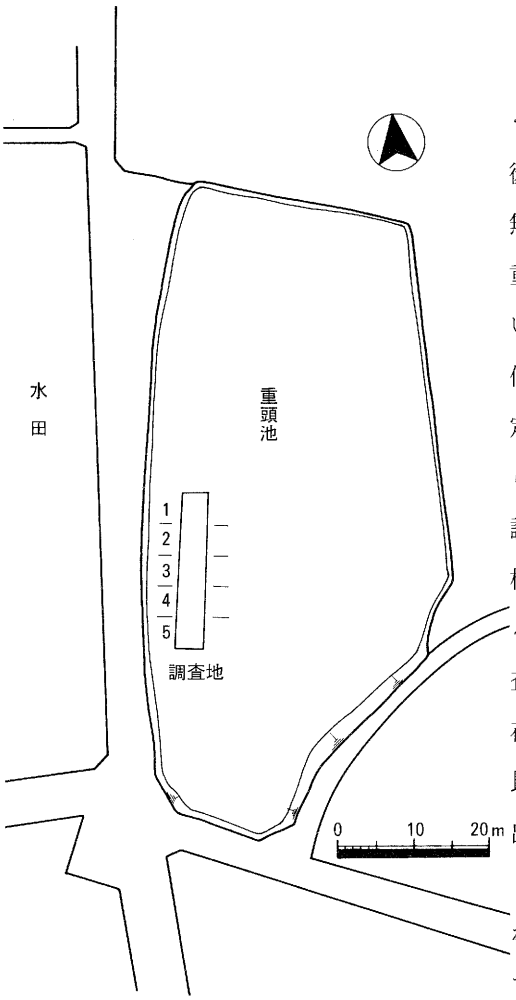
第１図　調査地周辺図

ていることから、八尾市教育委員会により遺構・遺物の有無を確認する目的で平成２年１月16日に遺構確認調査が実施された。施工予定地内に５ケ所のグリット（２×２ｍ）を設定して調査が実施された結果、古墳時代中期後半から後期初頭に比定される遺物が検出された。これらの経過を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査は八尾市・八尾市教育委員会・当調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき、当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施した。現地での発掘調査期間は、平成２年２月６日～２月13日までの６日間である。調査面積は60㎡を測る。内業整理および本書作成にかかわる業務は、調査終了後平成９年３月まで随時実施した。

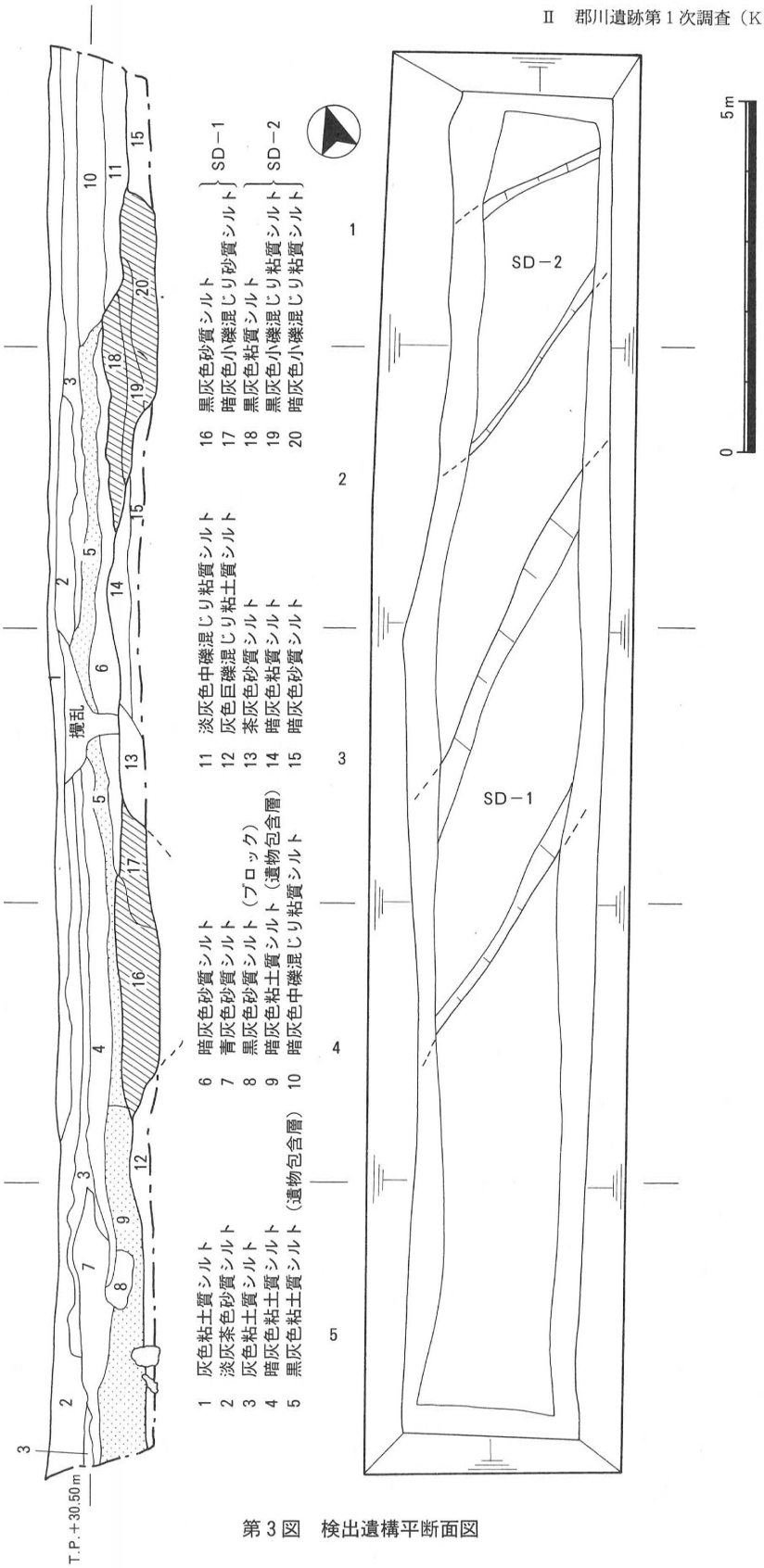
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は重頭池西部の堤体築造工事に伴うもので、試掘調査で確認された古墳時代中期後半から後期初頭の包含層の広がりや遺構の有無を確認することを主目的とした。調査地点は重頭池南西部の池底にあたり、西が高く東に低い緩斜面を呈していた。この部分に南北方向に伸びる調査区（南北長20ｍ、東西幅３ｍ）を設定した。地区割りについては、調査区の北端から４ｍ毎に５区（１地区～５地区）に区画した。調査に際しては、現地表下0.6ｍ前後までは機械より掘削した後、以下0.4ｍ前後は人力による掘削を実施し遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、地表下１ｍ前後（標高30ｍ前後）に存在する第12層～第15層上面で古墳時代中期に比定される溝２条（ＳＤ－１・ＳＤ－２）を検出した。遺物は遺構および包含層である５層・９層から古墳時代中期後半～後期後半に比定される土器類、土製品がコンテナ２箱程度出土している。



第２図　調査地設定図



第３図　検出遺構平断面図

第２節　基本層序

調査地点が池底であるため、上面にはヘドロの堆積が認められたほか、池構築時における掘削等により部分的に改変された部分が認められた。また、試掘調査では調査区の南部付近で谷状地形が確認されており、調査においてもこれと符合して南に向かって傾斜する土層堆積が確認された。第１層が池底の堆積土層である灰色粘土質シルト。第２層は淡灰茶色砂質シルトである。第３層・第４層は灰色～暗灰色の色調の粘土質シルトで、無遺物層である。第５層の黒灰色粘土質シルトおよび第９層の暗灰色粘土質シルトが古墳時代中期から後期の遺物を含む包含層である。遺構を検出した地表下0.8～1.3ｍ以下の土層の堆積状況は複雑であり、検出面の土層は一定しておらず、南から第12層灰色巨礫混じり粘土質シルト、第13層茶灰色砂質シルト、第14層暗灰色粘質シルト、第15層暗灰色砂質シルトに区別される。なお、調査地南部で検出された第12層からは0.2～0.5ｍ大の花崗岩が多数検出されている。

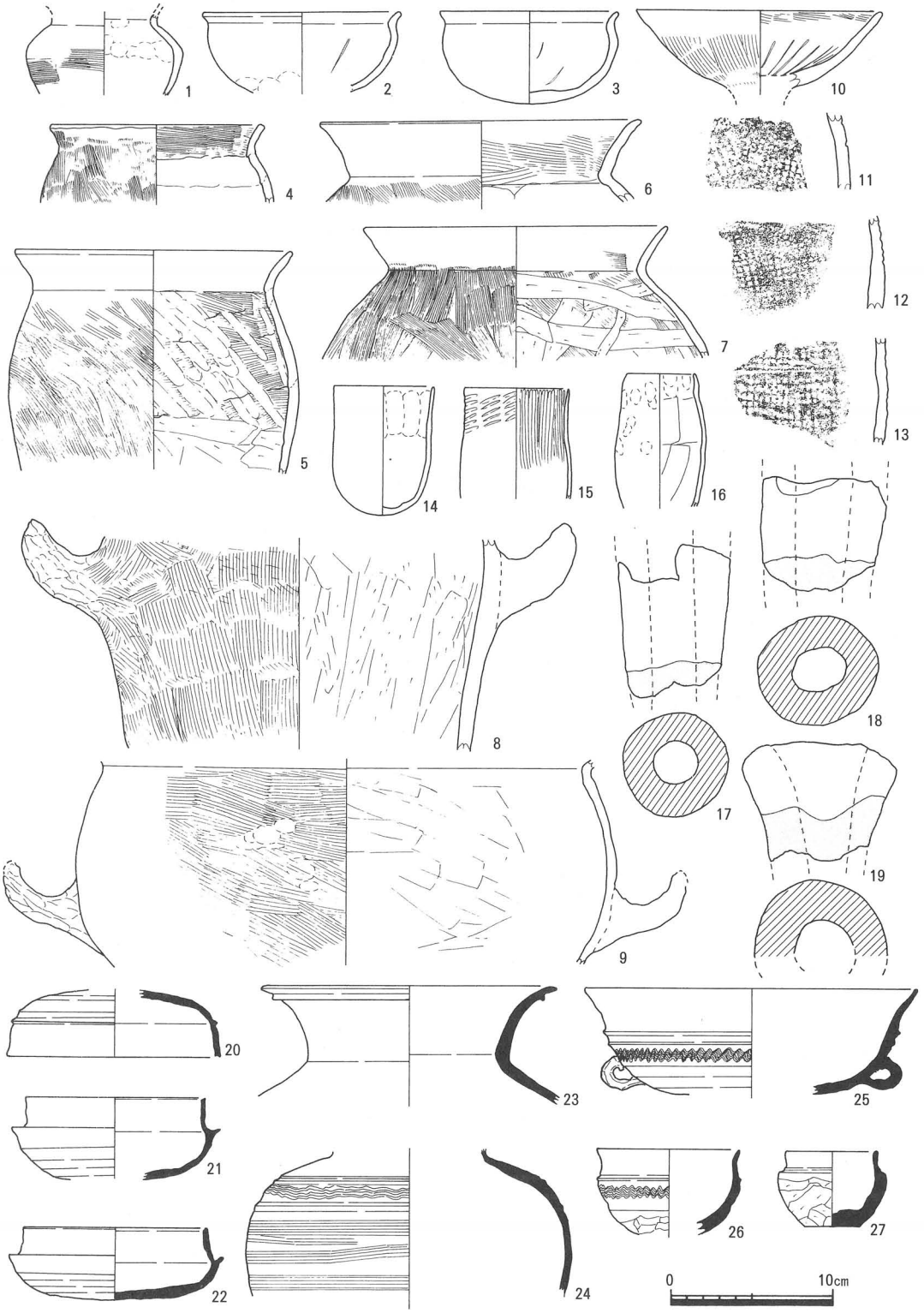
第３節　検出遺構と出土遺物の概要

１）検出遺構・出土遺物

ＳＤ－１

南西－北東方向に伸びるもので、検出長4.5ｍ、幅2.3ｍ前後、深さ0.6ｍ前後を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は第16層黒灰色砂質シルトと第17層暗灰色小礫混じり砂質シルトの２層である。遺物は第１層から古墳時代中期に比定される土師器壺・甕・鍋・鉢・高杯・甑、須恵器杯身・杯蓋・壺・鉢・高杯・瓮のほか、韓式系土器、製塩土器、鞴羽口、管玉、馬歯等の多岐に及ぶ遺物がコンテナ１箱程度出土している。そのうち、図化したものは27点（１～27）である。内訳は土師器－壺１点（１）・鉢２点（２・３）・甕４点（４～７）・甑１点（８）・鍋１点（９）・高杯１点（10）、韓式系土器３点（11～13）、製塩土器３点（14～16）、鞴羽口３点（17～19）、須恵器－杯蓋１点（20）、杯身２点（21・22）、甕１点（23）、瓮１点（24）、無蓋高杯１点（25）、鉢２点（26・27）である。

（１）は小型壺である。口縁部が欠損しているが体部の上位に最大径を持つ短頸壺と推定される。体部中位以下に横位のハケナデが行われている。（２・３）は半球形の体部に小さく外反する口縁部が付く鉢である。甕は４点（４～７）図化した。（４）が小型品で他は大型品である。（４）は口縁部外面の中位以下に縦位のハケナデ調整が認められる。大型品の（５～７）はいずれも「く」字に屈曲する口縁部を有するもので、体部外面が左上りのハケナデ、内面がハケナデ調整後、ヘラケズリが行われている。（８）は甑の把手付近の資料である。把手は太い根元から内湾して上外方に伸びるもので、先端は尖っている。（９）は鍋と推定されるものである。把手部分の形状は、根元部分から幅を僅かに減じて上外方に伸びるもので、先端は尖



第４図　ＳＤ－１出土遺物実測図

らず幅広で終っている。体部外面は斜め方向のハケナデ調整、内面は板ナデ調整が行われている。(10) は高杯の杯部で約⅓が遺存している。杯部内面は横位のハケナデの後放射状暗文、外面はハケナデが行われている。(11～13) は外面に格子タタキを施す韓式系土器の小破片である。器種的には甑・鍋等が想定されるが限定はできない。製塩土器は3点 (14～16) 図化した。所謂、薄手丸底式に分類されるもので、(15) は体部上半にタタキ、内面に貝ケズリが認められた。色調は (14・16) が乳灰色系、(15) が淡褐色である。鞴羽口は3点図化した。形態的には基部から先端部分に向かって幅を減じる円筒状を呈している。(17・18) が先端部、(19) が基部付近の資料である。先端部分に溶融金属が付着した (19) のほか、(17・18) は熱変のために先端部分が灰色に変色している。胎土はいずれも中粒砂から小礫を含む粗いものである。須恵器類は8点(20～27)を図化した。(20) は杯蓋で全体の約½が遺存している。須恵器杯身は (21・22) の2点で、立ち上がりが直上に伸びる (21) と内傾する (22) がある。(22) の底部外面に「－」のヘラ記号が認められる。田辺編年のＴＫ23型式に対比されよう。(23) は甕で口縁部直下に断面三角形の凸帯が1条回る。(24) は形状や文様構成から大型の甕と推定される。扁球形の体部を持つもので、肩部上半には2条の凸帯間に波状文が施文されている。(25) は無蓋高杯で約½が遺存している。全体に丁寧な造りで、体部中位に2条の凸帯と波状文で構成される文様帯と小さな把手が付く。(26・27) は平底を有する小型鉢である。(27) は手づくね品である。共に体部下半に静止ヘラケズリが認められる。

ＳＤ－2

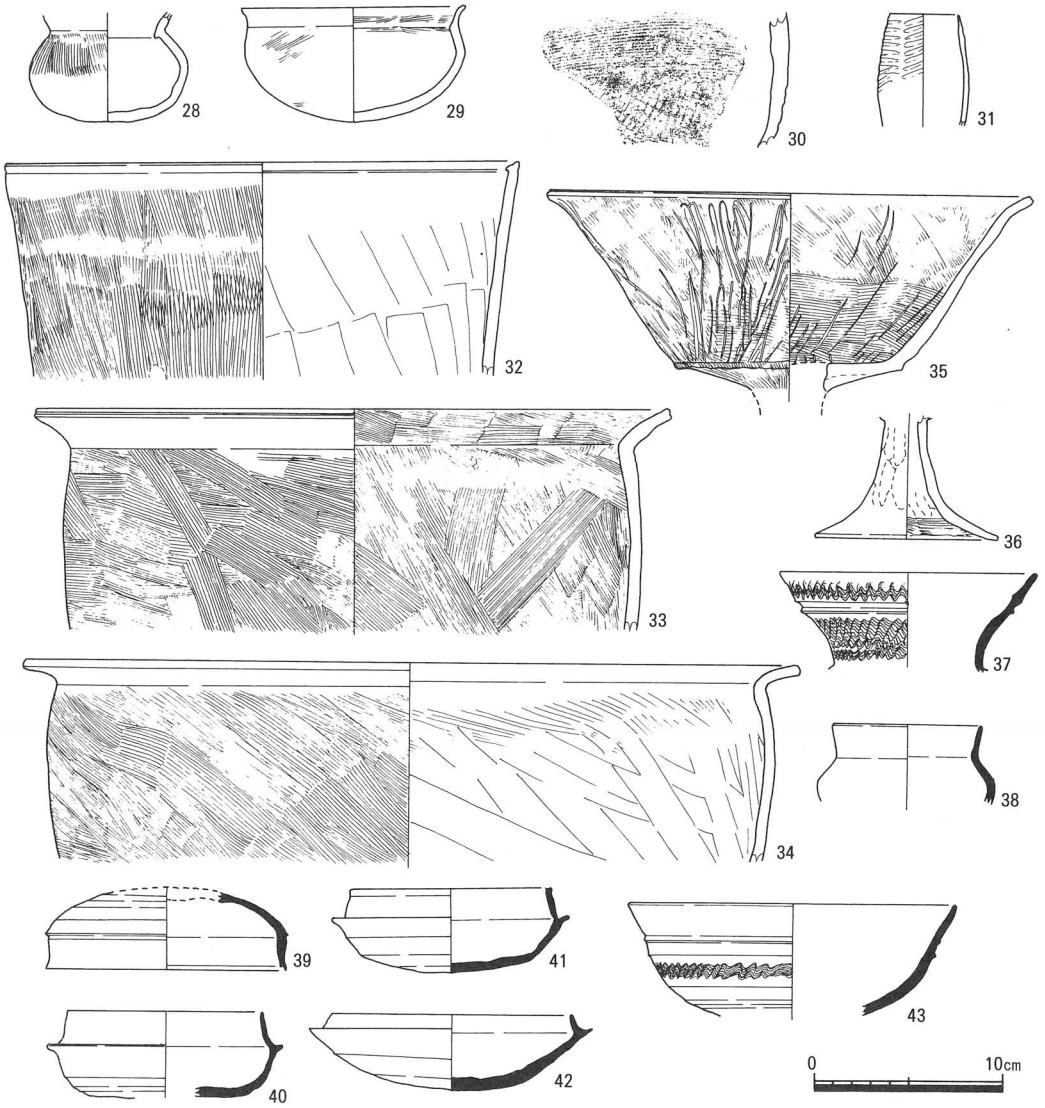
ＳＤ－1の北で検出した。ＳＤ－1と同様、南西－北東方向に伸びるもので、検出長3ｍ、幅2ｍ、深さ0.2ｍを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は遺構の断面形状に沿って、3層が堆積している。遺物は出土していない。

2）遺構に伴わない遺物

第5層および第9層から古墳時代中期後半～後期前半の土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器が出土している。図化し得たものは16点 (28～43) である。その内訳は土師器－壺1点 (28)、鉢1点 (29)、韓式系土器1点 (30)、製塩土器1点 (31)、甑1点 (32)、甕2点 (33・34)、高杯2点 (35・36)、須恵器－壺1点 (38)、甕1点 (37)、杯蓋1点 (39)、杯身3点 (40～42)、無蓋高杯1点 (43) である。

土師器類は9点 (28～36) 図化した。(28) は扁球の体部を有する小型壺である。体部が完存するものの口縁部は欠損している。(29) は椀形の体部に小さく外反する口縁部が付く小型鉢である。(30) は韓式系土器の小片で斜格子状のタタキが施されている。器種は甑・鍋等が推定されるが限定できない。

(31) は薄手丸底式の製塩土器である。体部外面上半にタタキ調整が行われている。(32) は



第５図　包含層出土遺物実測図

甑の口縁部の小片である。口縁部は内傾する水平な面を有しており端部は内側に肥厚している。（33・34）は大型の甕である。共に口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、体部外面は左上りのハケナデ調整、内面は（33）がハケナデ、（34）がハケナデとナデを多用している。（35）は斜上方に大きく立ち上がる深目の杯部を有する大型の高杯である。杯部内面が横方向にハケナデ、外面が斜め方向のハケナデの後、ヘラミガキによる放射状暗文を施す。（36）は小型高杯の脚部である。須恵器類は７点（37～43）図化した。（37）は瓮の小片である。口縁部および頸部外面に波状文が施文されている。（38）は直口の口縁部を有する小型の壺である。口縁部から肩部外面に灰かぶりが認められる。（39）は杯蓋で約¼が遺存している。（40・41）は杯

身で共に¼程度が遺存している。立ち上がりは内傾して伸びるが端部が丸く終る（40）と内傾する面を有する（41）がある。ともに、ＴＫ23型式に対比される。（42）は全体の約½程度が遺存する杯身である。半還元焼成のため色調は赤褐色を呈している。掲載した須恵器のなかで最も新しい型式のＴＫ209型式に対応される。（43）は無蓋高杯の杯部である。全体に丁寧な造りで、体部中位に２条の凸帯と波状文で構成される文様帯がある。掲載した須恵器類は（42）がＴＫ209型式（６世紀末）に比定される以外は、おおむねＴＫ23型式前後（５世紀末）を中心とした時期に比定されるものである。

参考文献
・田辺昭三　1966『陶邑古窯址郡Ｉ』平安学園考古学クラブ
・韓式系土器については、1991「韓式系土器研究Ⅲ」韓式系土器研究会　P128に掲載している。

第４節　出土遺物観察表

・凡例　粒径－Ｌ１㎜以上　M0.5～１㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　※赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復原値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
1		土師器 短頸壺	－ － 体部 最大径(9.6)	外面：体部中位以下ハケナデ。他ヨコナデ。 内面：ナデ。	淡赤褐色 〃	良好	△M－L	△M				赤▲M	良好	体部1/4	ＳＤ－１
2		土師器 鉢	(12.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部指頭圧痕。 内面：口縁部から体部上半ヨコナデ。底部ナデ。	赤褐色 〃	精良	▲S						良好	口縁部1/6	ＳＤ－１
3		土師器 鉢	(10.8) 6.7 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部および底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部および底部ナデ。	赤褐色 〃	精良	▲S					赤▲S	良好	口縁部1/12	ＳＤ－１
4	三	土師器 甕	(13.0) － －	外面：口縁部中位以下、タテ方向のハケナデ。口縁部上位ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコ方向のハケナデ。体部ナデ。	淡赤褐色 〃	良好	△S－M	△M－L					良好	口縁部1/4	ＳＤ－１
5	三	土師器 甕	(16.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部左上がりのハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のハケナデの後、指ナデ。	淡赤褐色 〃	良好	△S	△M－L					良好	口縁部1/6	ＳＤ－１
6	三	土師器 甕	19.7 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコ方向のハケナデ。体部ヘラケズリの後ナデ。	茶褐色 〃	良好	△S		○S				良好	口縁部1/2	ＳＤ－１
7	三	土師器 甕	(18.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タテ方向のハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデの後、ヘラケズリ。	淡茶褐色 〃	良好	△S	△M－L					良好	口縁部1/6	ＳＤ－１
8		土師器 甑	－ － －	外面：把手部分指ナデ。体部粗いハケナデ。 内面：ヘラケズリ。	赤褐色 〃	精良	△S						良好	把手完存	ＳＤ－１
9		土師器 鍋	－ － －	外面：把手部分指ナデ。体部粗いハケナデ。 内面：板ナデ。	赤褐色 〃	良好	○S	▲L					良好	把手完存	ＳＤ－１
10		土師器 高杯	(15.0) － － 杯部高 4.0	外面：口縁部ヨコナデ。杯部中位以下、ハケナデ。 内面：ハケナデの後、ヨコナデ。杯底部に放射状ヘラミガキ。	赤褐色 〃	良好	△S		▲S				良好	杯部1/3	ＳＤ－１

・凡例　粒径－Ｌ１㎜以上　M0.5～１㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　※赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復原値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
11	三	韓式系土器	－ － －	外面：格子状タタキ。 内面：ナデ。	淡赤褐色 灰色	やや粗	○S	▲S	▲S－M	○S		赤○M	良好	体部小片	SD－1
12	三	韓式系土器	－ － －	外面：格子状タタキ。 内面：ナデ。	淡赤褐色 灰色	やや粗	○S	▲S	▲S－M	○S		赤○M	良好	体部小片	11と同一個体の可能性が高い。SD－1
13	三	韓式系土器	－ － －	外面：格子状タタキ。 内面：ナデ。	淡赤褐色 〃	やや粗	○S	▲S	△S			赤△S	良好	体部小片	SD－1
14	三	製塩土器	6.2 8.0 －	外面：ナデ。 内面：指頭圧痕。ナデ。	淡灰褐色～赤茶色 乳褐色	良好	△S	▲S					良好	1/2	SD－1
15	三	製塩土器	(6.5) － －	外面：口縁部から体部上半タタキ、以下ナデ。 内面：口縁部から体部上半貝ケズリ、以下ナデ。	淡褐色 〃	精良							良好	口縁部1/4	SD－1
16	三	製塩土器	4.2 － －	外面：ナデ。 内面：口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。	乳灰色 〃	精良	▲L						良好	口縁部2/3	SD－1
17		鞴羽口	－ － －	外面：ナデ。 内面：ナデ。	灰白色 淡赤褐色	粗	◎S－L	○M					良好先端部熱変	先端部分	SD－1
18	三	鞴羽口	－ － －	外面：ナデ。 内面：ナデ。	淡褐色～灰色 灰色	粗	◎S－L	○M－L	○S				やや不良先端部熱変	先端部分	SD－1
19	三	鞴羽口	－ － － 基部径 9.5	外面：ナデ。 内面：ナデ。	淡茶灰色～灰色 淡茶灰色～灰白色	やや粗	◎S－L	△M	◎S			赤○S	良好先端部熱変	基部1/2	SD－1
20	三	須恵器杯蓋	(14.2) － － 稜径 (12.7)	外面：天井部3/4回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：天井部ナデ。口縁部回転ナデ。	暗灰色～紫灰色 青灰色	精良	▲M						堅緻	1/2	SD－1
21	三	須恵器杯身	(12.1) － － 受部径 (14.1)	外面：底体部3/4回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：底部ナデ、他回転ナデ。	青灰色 〃	精良	△S－M						堅緻	1/2	SD－1
22	三	須恵器杯身	11.2 4.5 － 受部径(13.4)	外面：底体部3/4回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：底部ナデ、他回転ナデ。	灰色 〃	精良	△S－L						堅緻	1/2	底部外面に「－」ヘラ記号 SD－1
23		須恵器甕	(17.2) － －	外面：口縁部回転ナデ。体部灰かぶり。 内面：口縁部灰かぶりのため調整不明。体部ナデ。	淡灰色 〃	精良	▲M－L						堅緻	口縁部～体部小片	SD－1
24		須恵器壺	－ － － 体部径 (20.0)	外面：体部上位２条の凸帯間に波状文。体部中位以下、直線文。 内面：体部上半回転ナデ、以下ナデ。	淡灰色 〃	良好	○S－L						堅緻	体部1/2	体部灰かぶり SD－1
25		須恵器無蓋高杯	(20.2) － －	外面：口縁部回転ナデ。体部中位２条の凸帯下に波状文（10本/単）。 内面：灰かぶりのため調整不明。	暗灰色 〃	良好	○S－L						堅緻	杯部1/3	杯部灰かぶり SD－1
26	三	須恵器鉢	(8.8) － －	外面：口縁部回転ナデ。体部中位２条の凸帯間に波状文（５本/単）。体部下位静止ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡紫灰色 〃	精良	▲M						堅緻	口縁部1/4	口縁部内外面・底部内面灰かぶり SD－1

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　※赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復原値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
27	三	須恵器 鉢	6.6 4.7 3.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：ナデ。	灰青色 〃	良好	○S						堅緻	1/2	手づくね品 SD－1
28	四	土師器 壺	－ 体部高 4.7 体部 最大径 8.4	外面：体部上位から中位タテ方向のハケナデ、以下ナデ。 内面：体部ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	△S－L	△S	○S－L				良好	体底部完存	体部外面黒班 3区第5層
29	四	土師器 鉢	11.8 6.1 体部 最大径11.7	外面：口縁部ヨコナデ、他はナデ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ナデ。	赤褐色 〃	やや粗	△S	△S	○S	○S－L			良好	1/2	2区第5層
30	四	韓式系 土器	－ － －	外面：ヨコ方向のハケナデ。斜格子状タタキ。 内面：ハケナデの後ナデ。	赤褐色 〃	良好	△S－L	△S－L	△S				良好	体部小片	1区第5層
31	四	製塩土器	(3.6) － －	外面：口縁部～体部中位タタキ、以下ナデ。 内面：ナデ。	乳白色 〃	良好	▲M	▲L	△S				良好	口縁部 1/2	3区第5層
32	四	土師器 甑	(27.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タテ方向のハケナデ。 内面：ナデ。	赤褐色 〃	精良	▲S						良好	口縁部 1/8	2区第5層
33	四	土師器 甕	(33.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部乱方向のハケナデ。 内面：口縁部横方向のハケナデ。体部乱方向のハケナデ。	淡赤褐色 赤褐色	精良	▲L				▲L		良好	口縁部 1/10	3区第5層
34	四	土師器 甕	(40.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部左上がりのハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部上半左上がりのハケナデ、以下板ナデ。	淡茶灰色～赤褐色 褐灰色～赤褐色	精良	△S						良好	口縁部 1/4	4区第5・9層
35	四	土師器 高杯	25.0 － － 杯部高 8.8	外面：口縁部タテ方向のハケナデの後、放射状ヘラミガキ。 内面：口縁部上半ナナメ、中位以下ヨコ方向のハケナデ。杯底部～口縁部放射状ヘラミガキ。	褐灰色～黒色 褐灰色～淡赤褐色	良好	○S－M	△L			▲M		良 一部器壁剥離	杯部 1/4	2区第5層
36	四	土師器 高杯	－ － － 裾部径 5.3	外面：柱状部タテ方向の板ナデ後、ナデ。裾部ナデ。柱状部シボリメ。 内面：裾部ハケナデ。	淡赤褐色 〃	やや粗	○S－M	△L	△M		▲L		良	裾部ほぼ完存	2区第5層
37	四	須恵器 壺	(13.4) － －	外面：口縁部波状文（5本/単)。頸部3段の波状文（9本/単)。 内面：口頸部回転ナデ。	青灰色 〃	精良	△S－L						堅緻	口縁部 1/4	口頸部内面灰かぶり 3区第5層
38		須恵器 壺	(8.8) － －	外面：口縁部～体部回転ナデ。 内面：口縁部～体部回転ナデ。	淡灰色 〃	精良							堅緻	口縁部 1/4	口縁部～体部上半灰かぶり 3区第5層
39		須恵器 杯蓋	(12.6) (4.3) －	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	良好	△S－L						堅緻	口縁部 1/4	3区第5層
40	四	須恵器 杯身	(11.3) (4.5) － 受部径（12.5)	外面：底体部1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	良好	△S－L						堅緻	口縁部 1/4	2区第5層
41	四	須恵器 杯身	10.5 4.4 － 受部径12.3	外面：底体部2/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 内面：底部ナデ、他回転ナデ。	灰色 〃	良好	○S						堅緻	口縁部 1/4	3区第5層
42		須恵器 杯身	12.6 15.0 － 受部径15.0	外面：底体部1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 内面：回転ナデ。	赤灰色 〃	良好	○S－L	△S－M					酸化炎焼成 良好	1/2	底部外面ヘラ記号 1区第5層

・凡例　粒径－Ｌ１㎜以上　M0.5～１㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　※赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復原値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
43	四	須恵器 無蓋高杯	(17.2) － －	**外面**：口縁部～杯部中位回転ナデ、以下回転ヘラケズリ。杯部中位、２条の凸帯と波状文（10本/単）。 **内面**：自然釉付着。	灰色 淡灰色	精良	△ S						堅緻	杯部 1/3	２区第５層

第3章 まとめ

今回の調査は、比較的小規模な調査であったにも拘わらず古墳時代中期～後期に比定される遺構・遺物を検出した。調査地周辺では、本調査地の東約50m地点の八尾市黒谷439－1で昭和63年に八尾市教育委員会より実施された発掘調査（63－193）で古墳時代中期後半から後期に至る集落の存在が確認されている。[註1] 今回の調査で、古墳時代中期後半から後期の集落範囲がさらに西部に広がることをが明らかにされたが、遺物の出土密度においては既往調査地のほうが陵駕する関係であり、集落の中心はそれらの地点にあったようである。また、既往調査では、本調査と同様、鉄滓・鞴羽口・製塩土器・馬歯と言った製鉄に関連した遺物が出土しており、集団の職掌の一端が推定されるほか、本調査出土の韓式系土器の存在は集落を形成した集団の出自を推定するうえで示唆的である。一方、調査地の東方の生駒山西麓部においては、古墳時代中期～後期を中心に築造された群集墳である高安古墳群が存在している。今回の調査で検出された集落に関わる墓域については、信貴鋼索線（信貴山ケーブル）より南部の山麓裾部に分布する郡川支群・黒谷支群との関りが強いものと考えられる。今回の調査で検出された、古墳時代中期～後期の集落は生駒山西麓部で確認された数少ない例で、高安古墳群の形成に関わりを持つこれら集団の性格や出自を考えるうえで貴重な資料と言えよう。

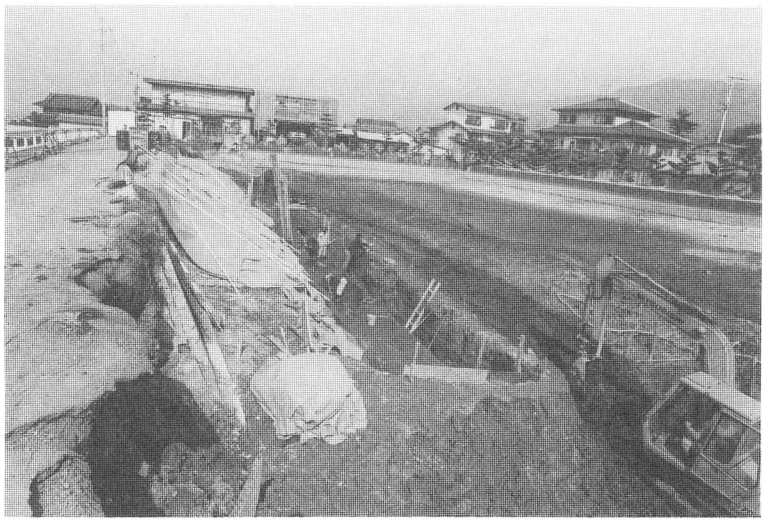


写真1 調査風景（南から）

註

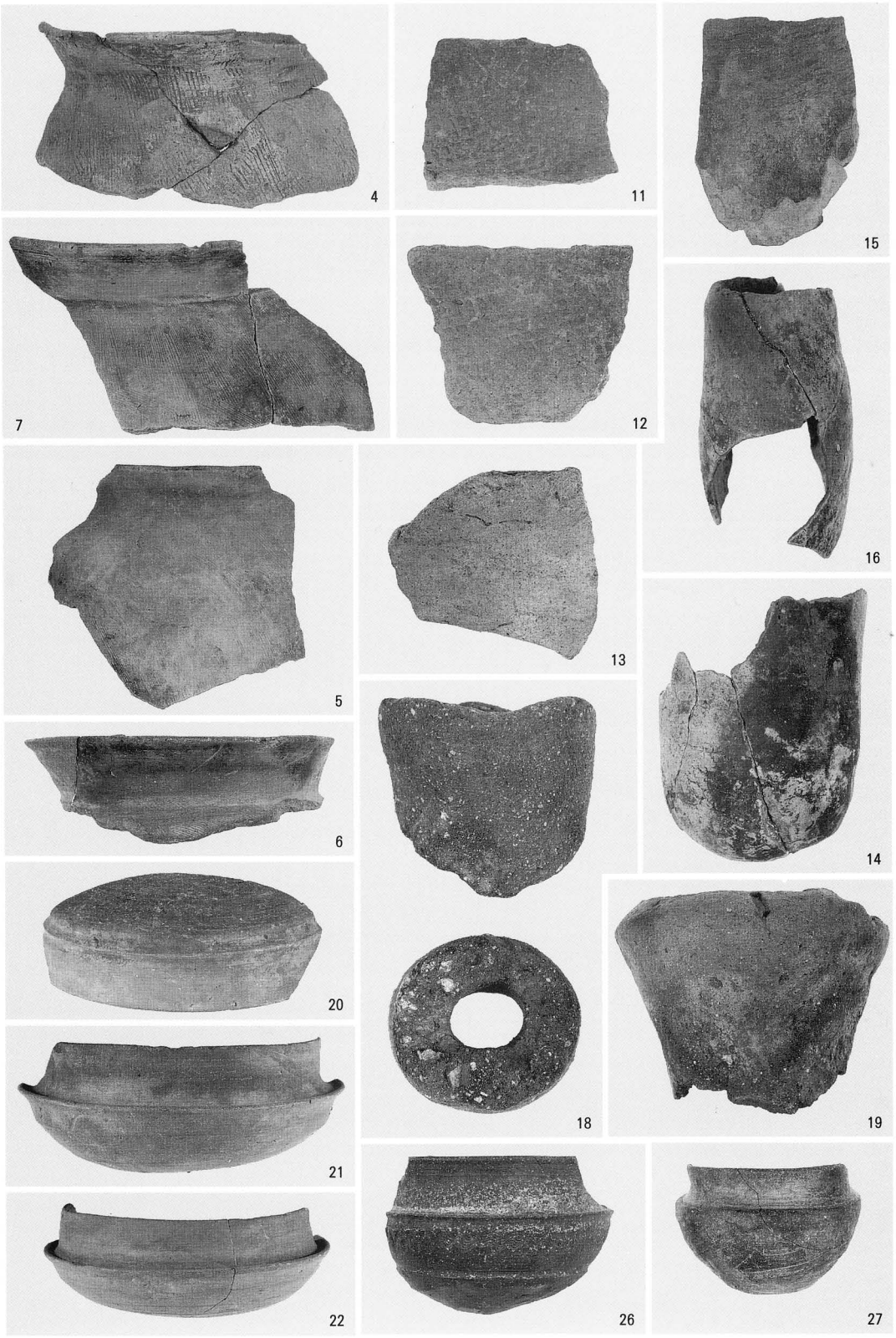
註1 近江俊秀 1989 「15. 郡川遺跡（63－193）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告19 八尾市教育委員会

図　　版

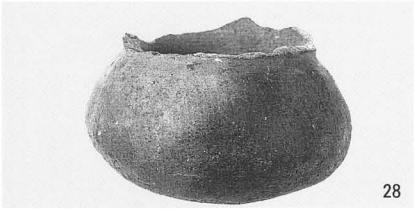
調査地全景（北から）

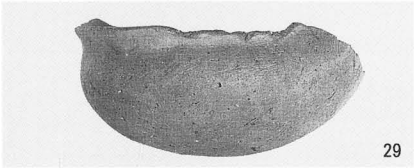
ＳＤ－１（東から）

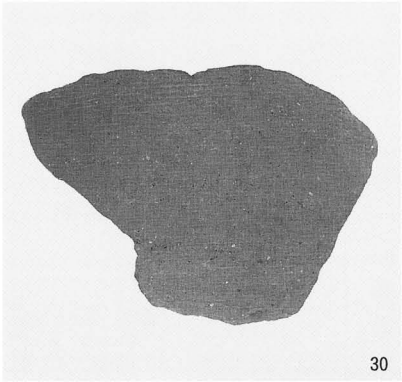
ＳＤ－２（東から）



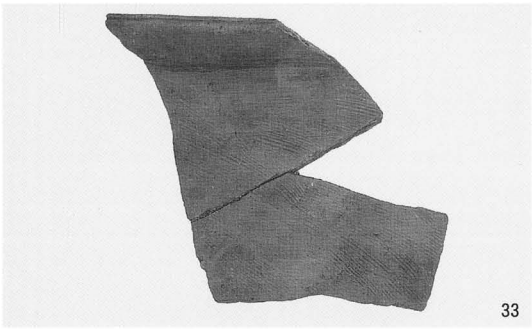
ＳＤ－１出土遺物

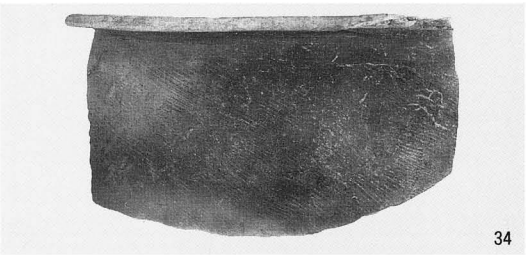

28

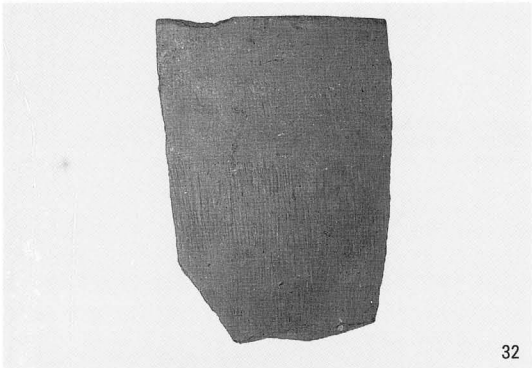

29

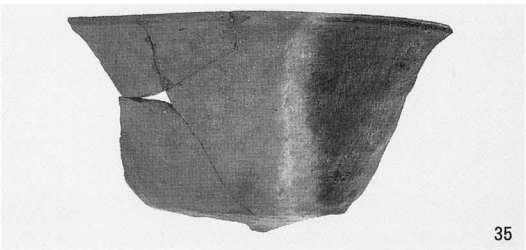

30

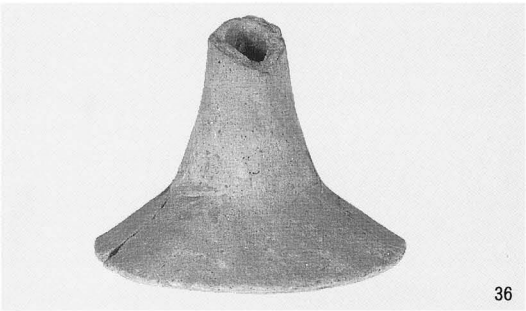
31


33


34


32

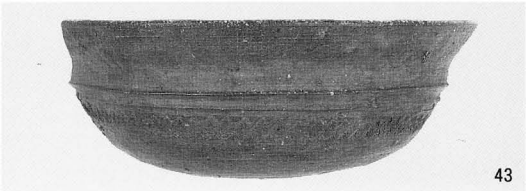

35


36

37

40

41


43

包含層出土遺物

Ⅲ　神宮寺遺跡第１次調査（ＺＧ93－１）

例　言

1．本書は、八尾市神宮寺５丁目179の一部・180で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する神宮寺遺跡第1次調査（ＺＧ93－１）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋178号　平成５年３月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が西尾亀次氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年４月26日～平成５年５月27日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約320㎡を測る。なお、調査においては市森千恵子・清水柳吉・中谷嘉多・西岡千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－市森・西岡・内山千栄子・吉田由美恵、遺物トレース－北原清子、本文の執筆・編集・写真撮影は岡田が担当した。

今回の調査にご尽力頂いた株式会社島田組の職長であられた三国淑子さんが、平成５年７月に不慮の事故で亡くなられた。三国さんには、未熟である私の無理な指示も、いつも笑顔で「先生、何とかやってみます。」と言って、円滑に調査が進むよう助けて頂いた。お昼休みになると、時折ご自慢の長い黒髪を櫛でゆっくりと解かしておられたのを覚えている。ここに心からご冥福をお祈りする。

本　文　目　次

第１章　はじめに……41

第２章　調査概要……42

　第１節　調査の方法と経過……42

　第２節　基本層序……43

　第３節　検出遺構と出土遺物……47

　第４節　出土遺物観察表……69

第３章　まとめ……78

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……41
第２図　調査地地区割り図……42
第３図　基本層序模式図……43
第４図　北地区遺構平面図……44
第５図　北地区東壁断面図……45
第６図　南地区遺構平面図……46
第７図　南地区東壁断面図……46
第８図　ＳＥ－101平断面図 ……48
第９図　ＳＥ－101出土遺物実測図（井戸側内　１～７、掘方内　８～11） ……49
第10図　ＳＥ－101曲物実測図 ……50
第11図　ＳＰ－104柱根実測図 ……50
第12図　ＳＸ－101出土遺物実測図 ……51
第13図　ＮＲ－101出土遺物実測図 ……52
第14図　第６層出土遺物実測図……53
第15図　ＳＤ－201出土遺物実測図Ⅰ ……55
第16図　ＳＤ－201出土遺物実測図Ⅱ ……56
第17図　ＳＤ－202平断面図 ……57
第18図　ＳＤ－202出土遺物実測図 ……58
第19図　ＳＤ－206出土遺物実測図 ……59
第20図　ＳＤ－204～ＳＤ－206出土遺物実測図……59
第21図　ＳＯ－201・ＳＤ－201平断面図……61
第22図　ＳＯ－201出土遺物実測図 ……61
第23図　ＳＯ－201出土遺物実測図 ……62
第24図　ＳＯ－201出土土器・石器実測図 ……63
第25図　土器棺墓１平断面図……64
第26図　土器棺墓２平断面図……64
第27図　土器棺（土器棺墓１）実測図……65
第28図　土器棺（土器棺墓２）実測図……66
第29図　第７層出土遺物実測図Ⅰ……67

第30図　第７層出土遺物実測図Ⅱ……68

写　真　目　次

写真１　ＳＥ－101掘削状況（東から）……52
写真２　調査地〈左下〉と常世岐姫神社〈右上〉（南西から）……79

図　版　目　次

図版一　北地区　第１遺構面全景（南から）　北地区　第２遺構面全景（南から）
図版二　南地区　遺構面全景（北から）　ＳＥ－101断ち割り（東から）
図版三　ＳＥ－101完掘状況（東から）　北地区　第２遺構面北部（西から）
図版四　北地区　第２遺構面中央部（西から）　ＳＤ－202西部　土器集積（西から）
図版五　土器棺墓１検出状況（東から）　土器棺墓２検出状況（北から）
図版六　出土遺物　ＳＥ－101　３・７・８、ＮＲ－101　19、第６層　23・24・25・27・28・29、ＳＤ－201　43
図版七　出土遺物　ＳＤ－201　44・51・57・63・67、ＳＤ－202　69・73・74・76
図版八　出土遺物　ＳＤ－202　77・78・80・84・85、ＳＤ－204　86、ＳＤ－206　96、ＳＯ－201　103
図版九　出土遺物　ＳＯ－201　101・105・110・117、ＳＯ－202　119・120、第７層　126・131
図版一〇　出土遺物　土器棺墓１　122・123
図版一一　出土遺物　土器棺墓２　124・125
図版一二　出土遺物　第７層　132・147・152・168・173・175、第６層　32～39、ＳＥ－101　11
図版一三　出土遺物　ＳＤ－206　99、ＳＯ－201　118、ＳＯ－202　121、第７層　178、ＳＥ－101　４・５
図版一四　出土遺物　ＳＥ－101　６・12・13、ＳＰ－104　14

第１章　はじめに

神宮寺遺跡は、八尾市域の東南端に位置する遺跡で、現在の行政区画では神宮寺４・５丁目付近に拡がる弥生時代～古墳時代以降の複合遺跡である。地理的には東に生駒山地の西麓に拡がる扇状地の末端部と沖積地（河内平野）との交わる地点に位置する。当調査地周辺の遺跡では、北に恩智遺跡が隣接し、南部の柏原市域の山ノ井・法善寺一帯にも遺跡は拡がると考えられる。本調査地の西側には、古くから山麓沿いに通じる道として東高野街道（旧170号線）が伸びており、明確な街道の創設時期は不明であるが、平安遷都後は京都から河内国府、和泉国

第１図　調査地位置図

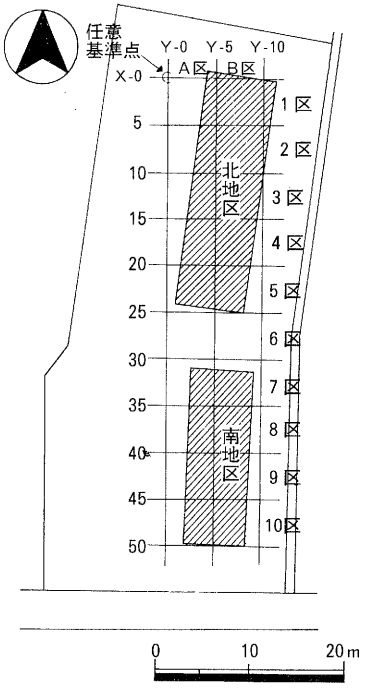
府を結ぶ古代の計画道路であった可能性が強い。街道名はいつごろからか高野山信仰に伴い多くの人々が往来した由縁から生まれたものであろう。この東高野街道から東へ約200ｍの山裾には、神宮寺、恩智、法善寺付近一帯の共同墓地となっている神宮寺墓地がある。入り口には、鎌倉時代に比定される大五輪塔や石塔、仏碑が破損しつつも残存しており、当該期における多くの土豪の住地であったことを明示している。

現在まで当遺跡については、文献資料や八尾市教育委員会が実施した小規模な遺構確認調査をはじめ、隣接する周辺遺跡の調査結果から弥生時代～古墳時代に至る集落遺跡として周知されている。しかし、当地においては近年まで際立った開発事業が実施されておらず、発掘調査等による詳細な遺構・遺物の考古学的検証がなく、遺跡の実態において判然としないところが多かった。今回の調査は当遺跡内における最初の本格的な発掘調査であり、結果、弥生時代中期の墓域をはじめ、同時代後期の集落域、室町時代の井戸を検出することができ、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認され、先人達の生活の一端を解明することができた。また、当地から南西に約60m地点において、平成６年２月に大阪府教育委員会によって実施された一般国道170号線歩道設置工事に伴う調査では、奈良時代の遺構をはじめ弥生時代から近代に比定される多量の遺物が検出されている。[註1]

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、既述したように当調査研究会が神宮寺遺跡内で実施する第１次調査となる。調査区は、開発区域内における基礎工事部分を対象に、北地区と南地区の２箇所の調査区を設定することとなった。規模は北地区が南北長25ｍ×東西幅７ｍ、南地区が南北長20ｍ×東西幅７ｍの総面積約320㎡を測る。調査区内の地区割りについては、北地区の北西隅に任意の基準点を設け、５ｍ区画で東西方向を西からＡ区・Ｂ区、南北方向を北から１区～10区で示し、各地区をそれぞれ１Ａ区～10Ｂ区と呼称した。



第２図　調査地地区割り図

掘削については八尾市教育委員会が実施した遺構確認調査資料を参考に、現地表下0.4ｍ前後の土層を機械により除去した後、以下0.5ｍ前後については人力による掘削・

精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、現地の両地区の標高（T.P.値）は北地区が16.6ｍ前後、南地区が16.2ｍ前後で南地区が北地区より0.4ｍ前後低くなっている。

第２節　基本層序

当地は、今回の開発事業が実施される最近までは、南北両地区とも畑作として利用されていた。模式図で南地区の方が0.4ｍ前後表土が低くなっている要因として、北地区でいう古墳時代から中世に相当する堆積層が、近世期に何らかの人為的営力によって削平された可能性が強い。よって南地区では古墳時代から中世に至る生活面は存在しない。

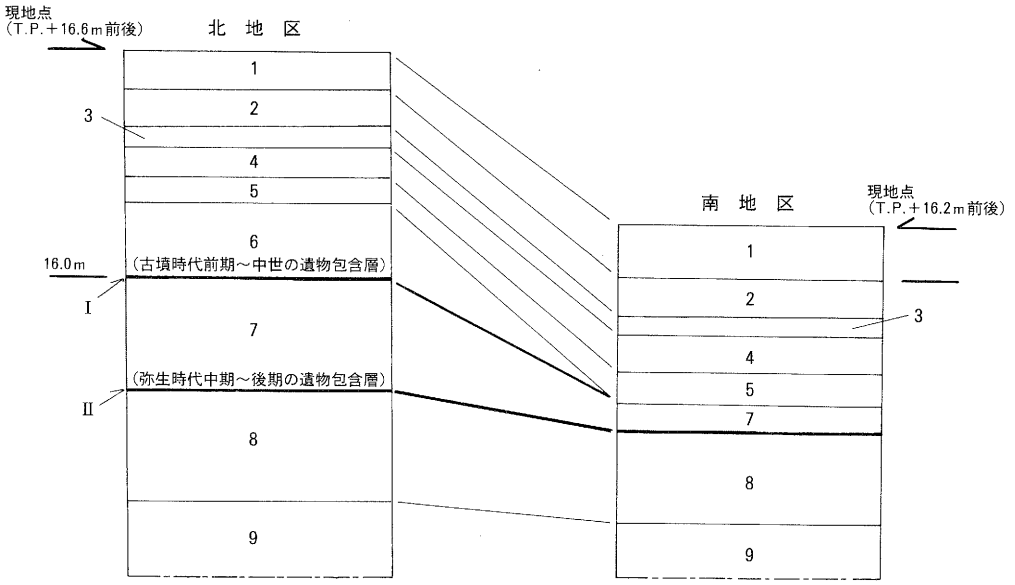
以下、調査区内で摘出した普遍的に堆積する９層について概説する。

第１層：現代の耕作土（層厚10～20cm）。

第２層：旧耕作土（層厚10cm前後）。

第３層：暗緑灰色粘土質シルト（層厚５cm前後）。旧耕作土に付随する床土にあたる土層と思われる。

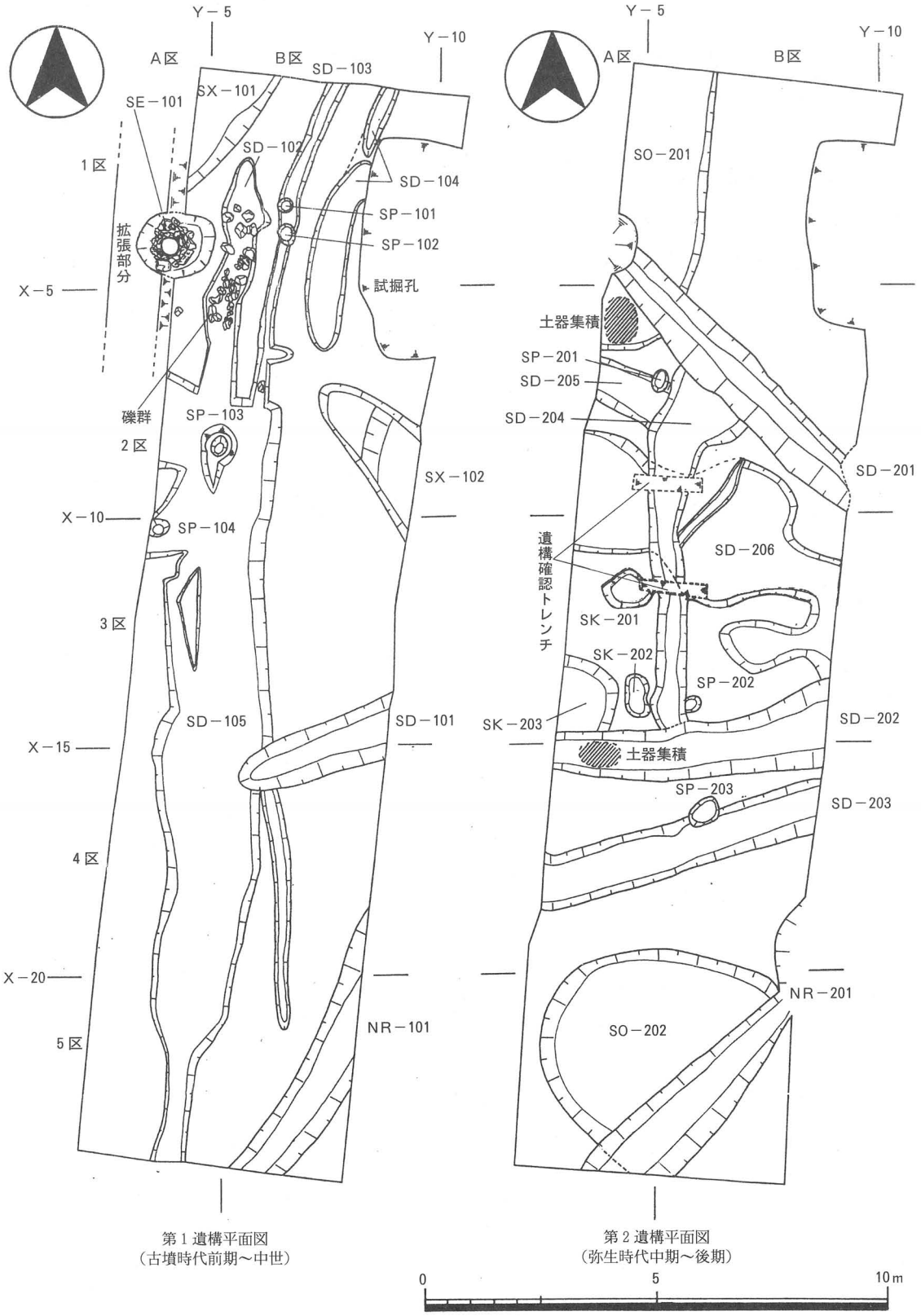
第４層：茶褐色細礫混じりシルト（層厚５～15cm）。国産陶磁器の小破片等、近世の遺物を若干含む。



１．現代の耕作土
２．旧耕作土
３．暗緑灰色粘土質シルト
４．茶褐色細礫混じりシルト
５．黄褐色細礫混じりシルト
６．灰褐色粗粒砂混じりシルト
７．暗褐色細砂混じりシルト
８．茶灰色粗粒砂混じり粘土質シルト
９．青灰色細粒混じりシルト質粘土

Ⅰ→第１遺構検出面（古墳時代前期～中世）
Ⅱ→第２遺構検出面（弥生時代中期～後期）

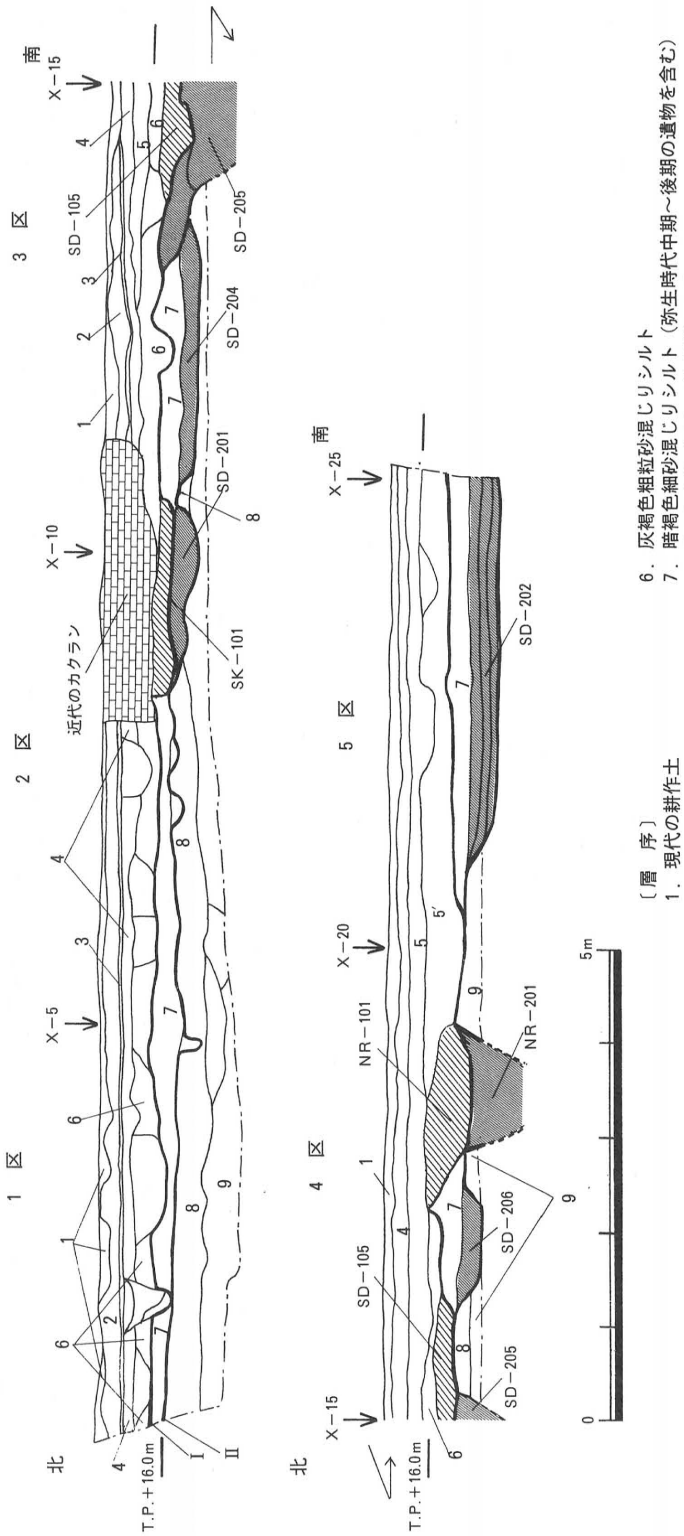
第３図　基本層序模式図



第1遺構平面図
（古墳時代前期～中世）

第2遺構平面図
（弥生時代中期～後期）

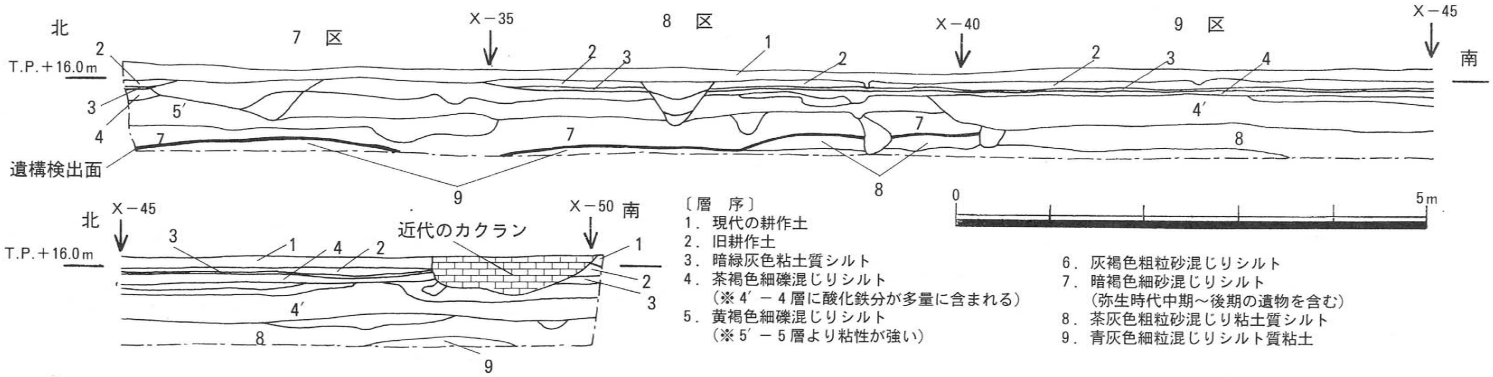
第4図　北地区遺構平面図



〔層　序〕
1．現代の耕作土
2．旧耕作土
3．暗緑灰色粘土質シルト
4．茶褐色細礫混じりシルト
5．黄褐色細礫混じりシルト
（※5′－5層より粘性が強い）
6．灰褐色粗粒砂混じりシルト
7．暗褐色細砂混じりシルト（弥生時代中期～後期の遺物を含む）
8．茶灰色粗粒砂混じり粘土質シルト
9．青灰色細粒混じりシルト質粘土

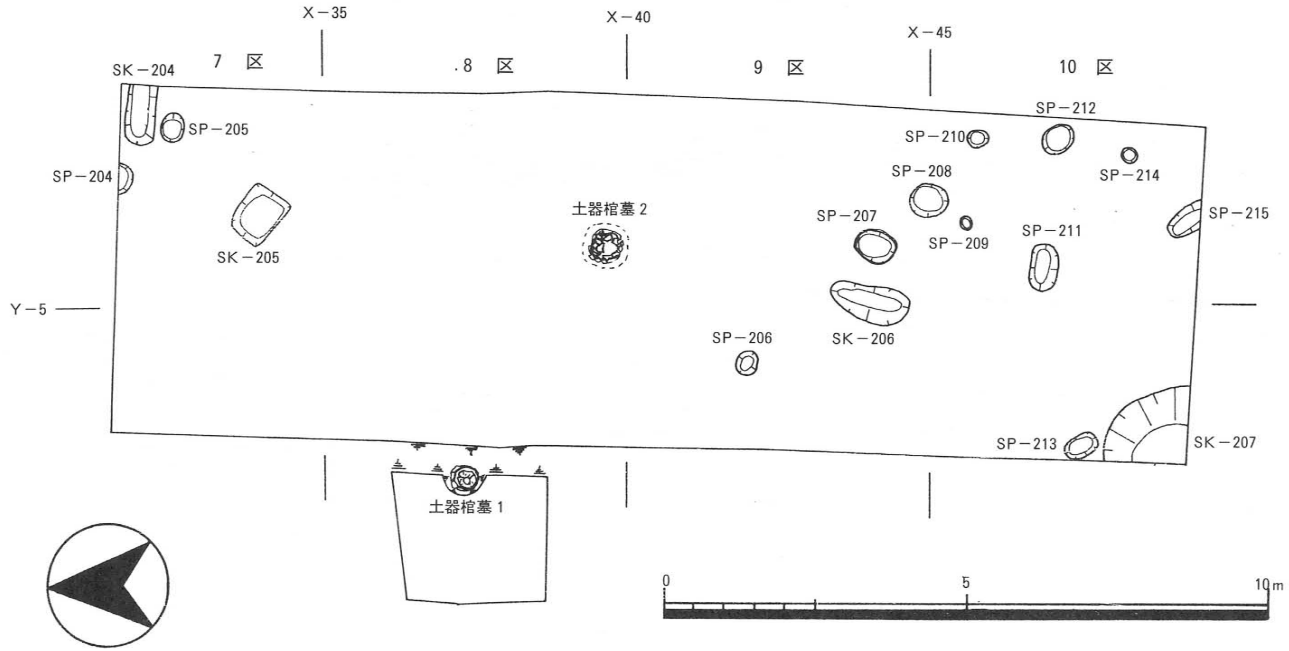
Ⅰ．第１遺構検出面（古墳時代前期～中世）
Ⅱ．第２遺構検出面（弥生時代中期～後期）

第５図　北地区東壁断面図



〔層　序〕
1．現代の耕作土
2．旧耕作土
3．暗緑灰色粘土質シルト
4．茶褐色細礫混じりシルト
（※4′－4層に酸化鉄分が多量に含まれる）
5．黄褐色細礫混じりシルト
（※5′－5層より粘性が強い）
6．灰褐色粗粒砂混じりシルト
7．暗褐色細砂混じりシルト
（弥生時代中期～後期の遺物を含む）
8．茶灰色粗粒砂混じり粘土質シルト
9．青灰色細粒混じりシルト質粘土

第7図　南地区東壁断面図



第6図　南地区遺構平面図

第５層：黄褐色細礫混じりシルト（層厚10～30㎝）。瓦器椀や土師器の破片が少量含まれる。

第６層：灰褐色粗粒砂混じりシルト（層厚15～25㎝）。古墳時代前期～中世の遺物が含まれる。南地区には存在しない。

第７層：暗褐色細砂混じりシルト（層厚30㎝前後）。弥生時代中期～後期の遺物を含む。北地区では本層の上面（標高16.0ｍ前後）で、古墳時代前期～中世の遺構面を検出した（第１遺構検出面）。

第８層：茶灰色粗粒砂混じり粘土質シルト（層厚15～30㎝）。本層の上面において、南北両地区では弥生時代後期の遺構面（標高15.7ｍ前後）、さらに南地区では同一面（標高15.5ｍ前後）において中期の土器棺墓２基を検出した（第２遺構検出面）。

第９層：青灰色細粒砂混じりシルト質粘土（層厚20㎝以上）。

第３節　検出遺構と出土遺物

北地区では、第７層上面において古墳時代前期～中世にかけての遺構面を検出した。遺構検出内容は、室町時代の井戸１基（ＳＥ－101）・溝１条（ＳＤ－101）・小穴６個（ＳＰ－101～106）、鎌倉時代の溝４条（ＳＤ－102～105）、古墳時代後期の不明遺構２箇所（ＳＸ－101・102）、古墳時代前期初頭の自然河道１条（ＮＲ－101）である。さらに北地区および南地区では下層の第８層上面において、弥生時代後期の土坑７基（ＳＫ－201～207）、溝６条（ＳＤ－201～206）、落ち込み２箇所（ＳＯ－201・202）、小穴15個（ＳＰ－201～215）を検出した。また南地区では同一面上で、弥生時代中期の土器棺墓２基（**土器棺墓１・２**）を検出した。以下、時期別に記述する。

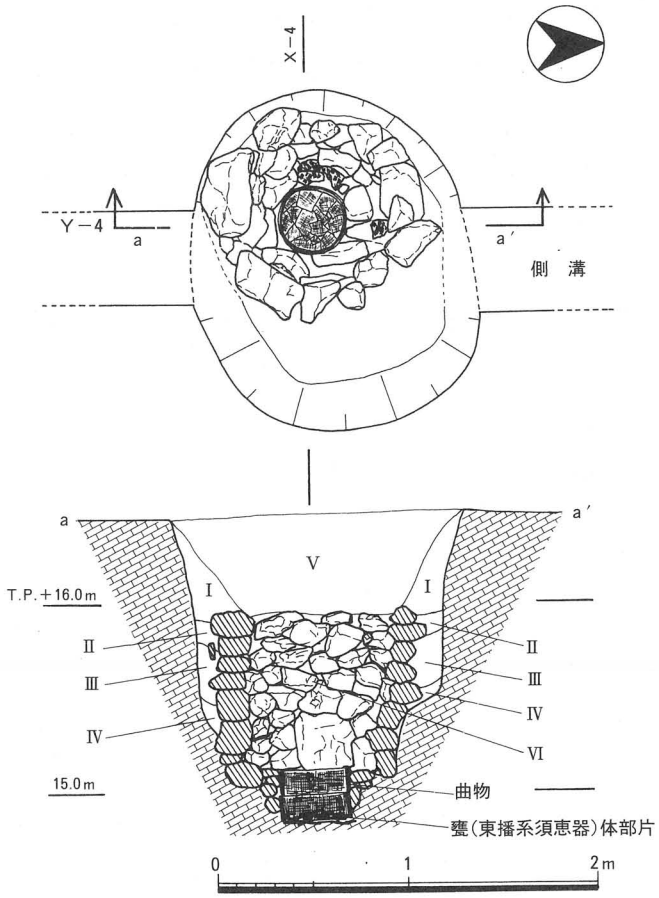
＜室町時代＞

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－101

北地区南西１Ａ区～１Ｂ区・２Ａ区～２Ｂ区で検出した。曲物を伴う石組の井戸である。井戸中央の一部を側溝によって削平してしまったが、平面の形状は検出状況から、やや東西が長い楕円形を呈するとみられる。掘方の規模は東西径1.9ｍ・南北径1.4ｍ・深さ2.0ｍを測る。石組に用いられている礫は径20～40㎝ほどのものである。石組が確認できたのは掘方上面より0.7ｍ下であったが、本来は井戸側として幾分か上位に組まれていたものと考える。石組の上位部分は井戸廃絶の際に崩されたとみられ、井戸の東で検出した鎌倉時代の溝（ＳＤ－106）内にその一部と思われる30個前後の礫が投棄されていた。さらに井戸底中央には径36㎝前後・高さ14㎝前後の曲物（第10図）が２段積み重ねられ、その最深部には瓦質大甕の体部片が幾枚も積み重なるように敷かれている。これらからは、曲物内の水溜場に絶えず清水が保たれるよ

う創意工夫をこらした当時の人々による生活の知恵が窺われる。掘方断面の形状は逆凸状を呈する。掘方埋土は上から第Ⅰ層暗灰色砂礫混じり粘土質シルト・第Ⅱ層青灰色極細粒砂質シルト・第Ⅲ層褐灰色細粒砂混じりシルト・第Ⅳ層灰色砂礫混じり粘土質シルトの4層に分層できる。井戸側内埋土は上から第Ⅴ層暗茶褐色粘土質シルト・第Ⅵ層黒灰色シルト質粘土の2層に分層できる。遺物は、井戸側内から瓦器椀（1・2）、瓦質三足釜（3）、砥石（4・5）、曲物底板（6）が出土した。瓦器椀2点は成形・調整の粗い小型の終末期のものである。砥石は刃物の当たり痕が明瞭に残っており、特に（4）の方は使用による磨り減りが著しい。（6）は容器又は柄杓の底板とおもわれるが、円周部に小孔は認められない。法量は、径14cm前後・厚さ1cm前後の円形を呈する。柾目材を使用し、材は針葉樹と考えられる。また、井戸側（曲物）内底に敷かれていた土器片を接合復元した結果、第9図（7）に掲載したように13世紀代の所産と思われる東播系瓦質大甕の体部下半部であることがわかった。法量は底径14cm前後を測るもので、調整は外面タタキ（5本／cm）・内面ヘラナデが施される。[註2] 一方井戸掘方内からは、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物が検出され、そのうち図化できたものは、弥生時代後期の器台（8）・甕（9）・小型台付き鉢（10）、古墳時代後期の円筒埴輪胴部片（11）である。器台（8）の下半部は不明であるが残存する形態から、受部と裾部が結合した鼓形を呈する畿内第Ⅴ様式のなかでも新段階に位置付けられるものと思われる。円筒埴輪（11）は、1次調整のみのタテハケが顕著にみられる川西編年でいう第Ⅴ期に比定されよう。[註3]



〔埋土内層序〕

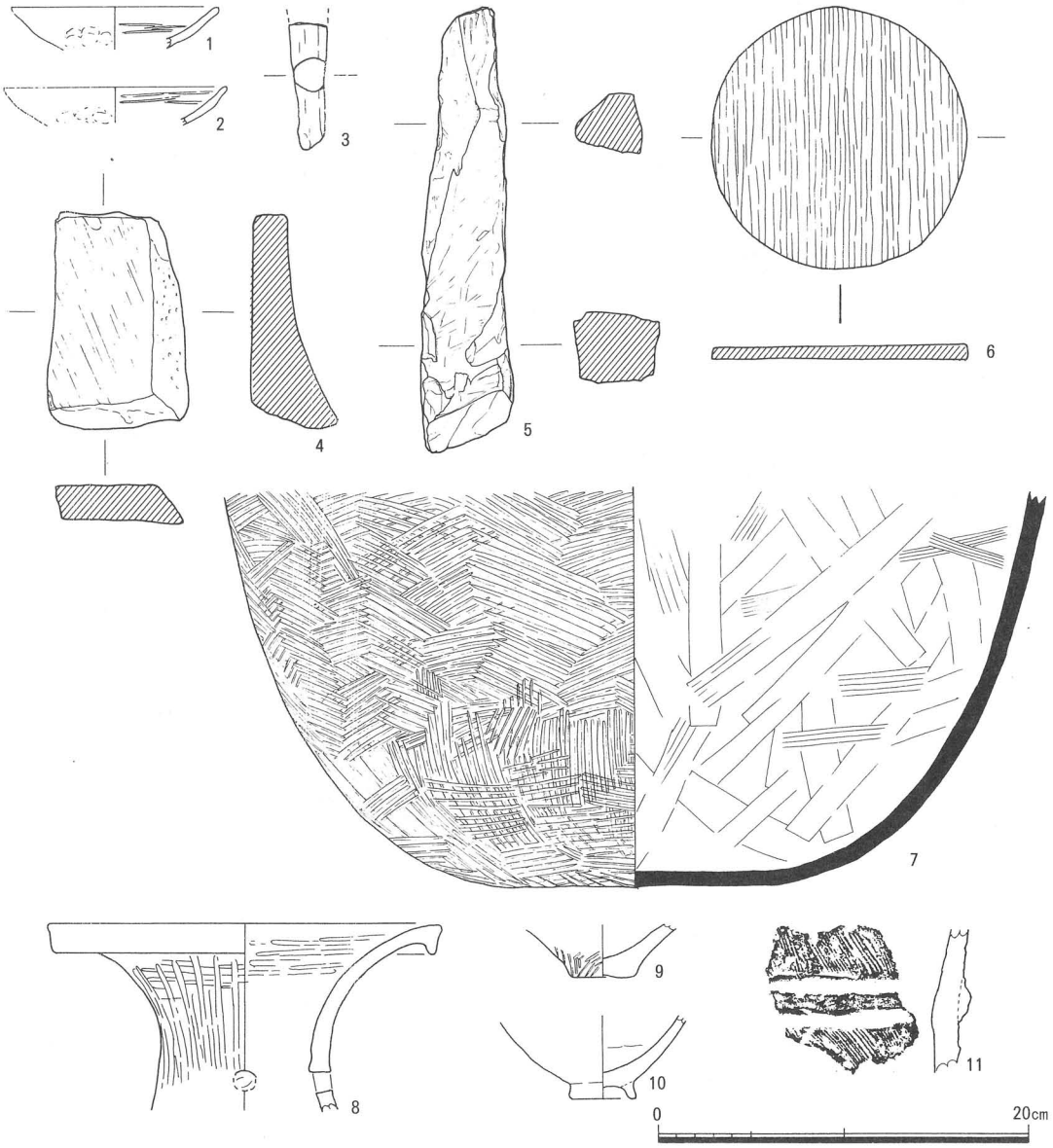
掘方

Ⅰ．暗灰色砂礫混じり粘土質シルト
Ⅱ．青灰色極細粒砂質シルト
Ⅲ．褐灰色細粒砂混じりシルト
Ⅳ．灰色砂礫混じり粘土質シルト

井戸側

Ⅴ．暗茶褐色粘土質シルト
Ⅵ．黒灰色シルト質粘土

第8図　ＳＥ－101平断面図

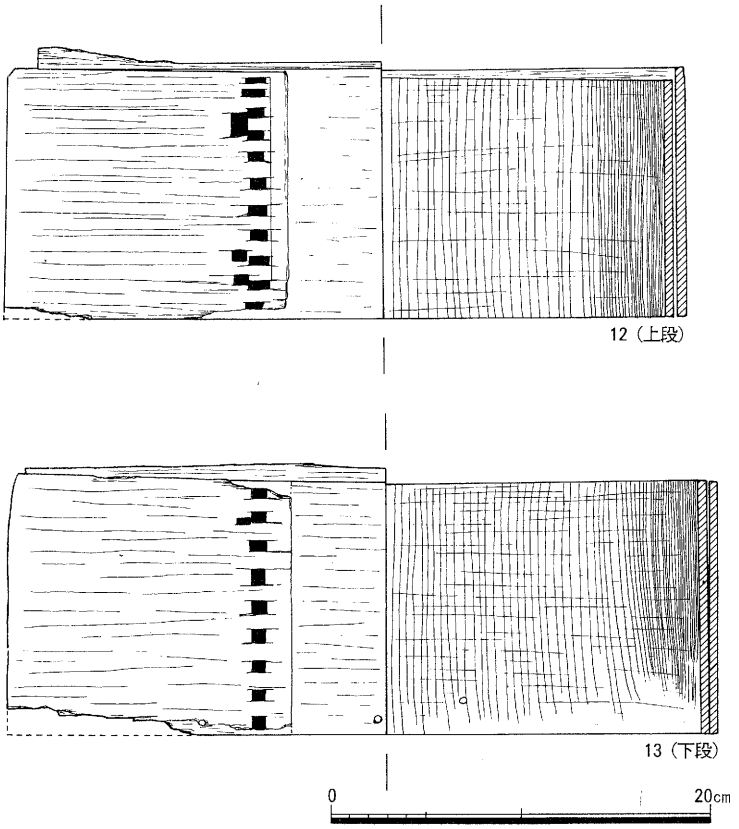


第９図　ＳＥ－101出土遺物実測図（井戸側内　１～７、掘方内　８～11）

溝（ＳＤ）

ＳＤ－101

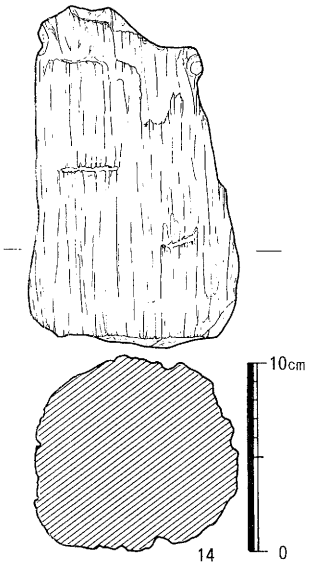
３Ｂ区～４Ｂ区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明であるが、北東－南西方向に伸びる溝と思われる。規模は検出部で検出長3.5ｍ・幅1.2ｍ・深さ0.3ｍ前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は暗青灰色粘土質シルトで、炭化物が少量混入する。遺物は土師器の小破片が出土した。



第10図　ＳＥ－101曲物実測図

小穴（ＳＰ）

１Ｂ区でＳＰ－101・102、２Ｂ区でＳＰ－103、３Ａ区でＳＰ－104の４個を検出した。これら小穴の規模は径0.3～0.5ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。上面の形状は、ＳＰ－101が円形、ＳＰ－102・103が楕円形、ＳＰ－104が隅丸方形を呈する。断面の形状は、全て浅い半円形を呈する。遺構内埋土は全て暗灰色極細粒砂混じりシルト質粘土の単一層で、各小穴内からは土師器および須恵器の小破片が僅かに出土した。また、ＳＰ－104には径10㎝前後・残存高18㎝前後の柱根（第11図　14）が遺存していた。他の小穴についても柱穴である可能性が高く、面的な制約もあって建物跡を復元することはできなかったが、これらの小穴は住居の一端を暗示させる。さらに層位関係や検出レベルおよび出土遺物片から、井戸（ＳＥ－101）とも時期的に並行するものと判断され、居住域を想定した場合、井戸との有機的なつながりに興味がもたれる。



第11図　ＳＰ－104柱根実測図

＜鎌倉時代＞

溝（ＳＤ）

ＳＤ－102～105

ＳＤ－102～104の３条ははぼ南北に並行して伸びる溝で、各溝の規模は幅0.3～0.8ｍ・深さ0.2～0.3ｍを測る。断面の形状は浅い皿形を呈する。ＳＤ－105については１条の溝として捉えたが、

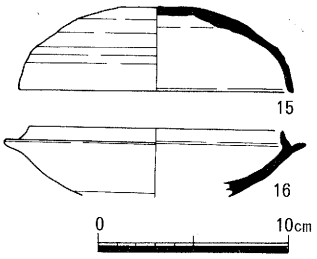
その検出状況からみて、ＳＤ－102・103の溝が合流する他、別の数条の溝が交差および重複し、ＳＤ－105に併合する。規模は検出長17ｍ・幅0.6～2.5ｍ・深さ0.2ｍ前後を測る。これらの溝は畠地にみられる耕作溝あるいは水田に伴う集排水溝と判断される。各溝内埋土は全て茶灰色細礫混じり粘土質シルトの単一層である。各溝内からは図化できなかったが14世紀頃の所産と考えられる瓦器椀の破片や土師器片が出土した。

＜古墳時代後期＞

不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ－101

北地区北西隅１Ａ区～１Ｂ区で検出した。遺構の北側および西側が調査区外に至っているため、性格的なことは不明である。埋土は淡灰色砂質シルトである。内部から土師器や須恵器の破片が出土したが、そのうち図化できたのは須恵器蓋杯で、田辺氏編年のＴＫ209型式の所産とみられる杯蓋（15）および・杯身（16）の２点である。[註4]



第12図　ＳＸ－101
出土遺物実測図

ＳＸ－102

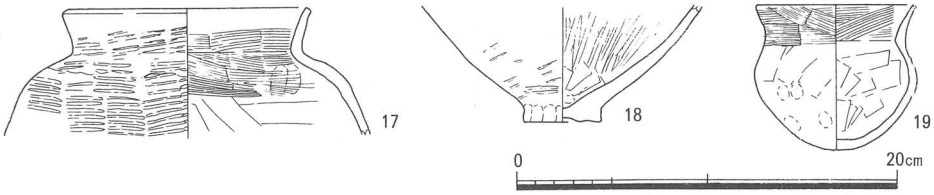
北地区２Ｂ区～３Ｂ区で検出した。東部が調査区外に至っているためＳＸ－101と同様、性格的なことは不明である。規模は検出部で最大長2.8ｍ、底部は東半部が一段深くなっており、西部で0.1ｍ・東部で0.3ｍを測る。埋土は暗青灰色シルト質粘土で、炭化物が一部に混入する。内部からは土師器の破片とともに円筒埴輪の破片が数点出土した。いずれの遺物も図化不能であるが、埴輪に残存するタガの形状から第Ⅴ期の範疇に納まるものと思われる。

＜古墳時代前期＞

自然河道（ＮＲ）

ＮＲ－101

北地区南東隅４Ｂ区～５Ｂ区で検出した。北東－南西に流路方向をもつ河道である。検出規模は幅1.2ｍ前後・深さ0.6ｍ前後を測る。断面の形状は逆凸状を呈する。埋土は上層が灰褐色系シルト～細粒砂、下層が灰白色系極粗粒砂～細礫である。遺物は上層から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭にかけての壺・甕・鉢が出土した。そのほとんどがローリングを受けた磨滅の著しいものや原形を止めない破片で、辛うじて図化できたものは弥生時代後期末の所産である甕２点（17・18）、庄内式古段階[註5]に比定される小型壺（19）の３点である。（17）は肩の張る体部から比較的短い口縁部が付き、外面のタタキ整形が口縁部下位までみられる。小型壺（19）は、球形の体部からやや短めに外反気味に伸びる口縁部が付く。

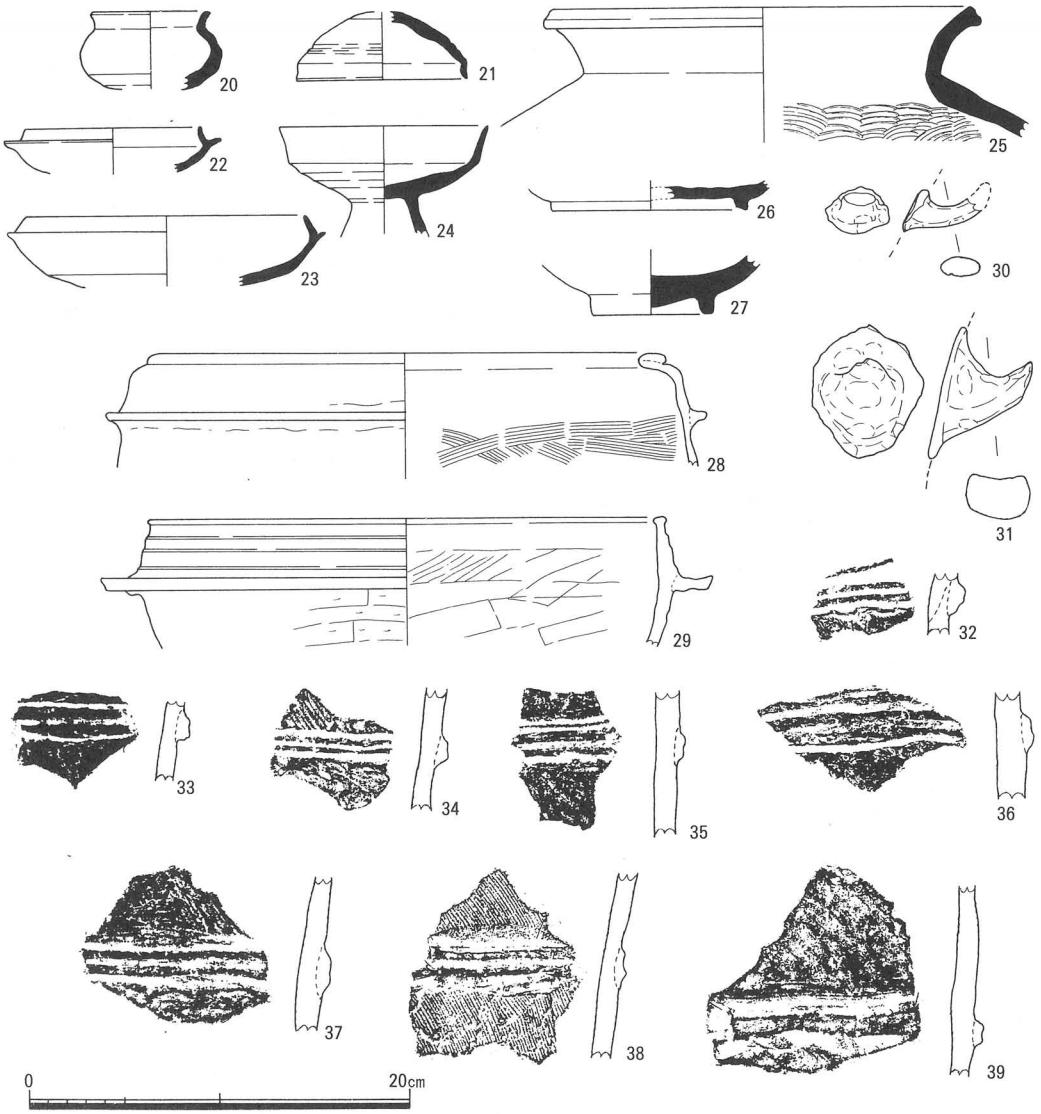


第13図　ＮＲ－101出土遺物実測図

［遺構に伴わない出土遺物　－第６層内－］

第６層内から遺構に伴わない遺物として図化できたものは、須恵器の小型壺（20）・杯蓋１点（21）・杯身２点（22・23）・高杯（24）・甕（25）・杯（26）、青磁碗（27）、羽釜２点（28・29）、甑の把手２点（30・31）、円筒埴輪の胴部片８点（32～39）である。須恵器（20～25）の年代については、ＴＫ43型式～ＴＫ209型式の範疇に納まるもので、６世紀末葉に比定されるであろう。高台付き杯（26）の高台は内傾する面を呈するもので、佐藤編年の平安時代Ｉ期に相当すると思われる。青磁碗（27）は14世紀以降に出現する龍泉窯系の輸入青磁[註6]とも推察されるが、残存状況から詳細な評価を欠く。羽釜のうち（28）は口縁端部を外側に短く折り返して丸く納める大和産、（29）は口縁部外面に段を有する河内産で、いずれも14世紀代の所産とおもわれる。埴輪については、全てタガは突出度が低く、断面が不整形を呈する。また、外面の調整はタテハケの１次調整がほとんどで、なかでも（38）はそれが顕著に窺われる。また（39）はハケナデをみないナデ調整で終わる。以上の特徴からこれらの埴輪は、川西編年の第Ｖ期に相当するものといえる。[註7]

写真１　ＳＥ－101掘削状況（東から）



第14図　第６層出土遺物実測図

第２遺構面

＜弥生時代後期＞

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－201

北地区３Ａ区で検出した。平面の形状は不定形で、断面は逆台形を呈する。検出規模は長径1.2ｍ・短径0.8ｍ・深さ0.2ｍを測る。埋土は上層が暗茶褐色細粒砂混じりシルト質粘土、下層が炭化物を含む灰黒色砂質シルトの２層からなる。遺物は下層から、甕口縁の破片とサヌカイト剥片が１点出土した。

ＳＫ－202

ＳＫ－201の南で検出した。平面の形状は南北にやや長い楕円形を呈する。断面の形状は逆台形を呈する。検出規模は長径0.9ｍ・短径0.6ｍ・深さ0.1ｍを測る。埋土は茶褐色細砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－203

北地区３Ａ区で検出した。遺構の南側はＳＤ－205によって切られ、西側は調査区外に至るといった状況で全容は不明である。検出部の規模は最大径1.4ｍ・深さ0.26ｍを測る。埋土は茶褐色細砂混じりシルトで、内部からは甕の体部片とサヌカイト剥片が１点出土した。

ＳＫ－204

南地区北東隅の７Ｂ区で検出した。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。規模は検出部で東西長1.0ｍ・南北幅0.5ｍ・深さ0.1ｍを測る。埋土は茶褐色砂礫混じり砂質シルトで、内部からは弥生土器の小破片が僅かに出土した。

ＳＫ－205

ＳＫ－204の南東部の７Ｂ区で検出した。平面の形状は北西－南東方向に長い隅丸長方形を呈し、断面は浅い半円形を呈する。規模は長径1.0ｍ・短径0.7ｍ・深さ0.2ｍを測る。埋土は茶褐色砂礫混じり砂質シルトで、内部からは土器の小破片が僅かに出土した。

ＳＫ－206

南地区９Ａ区～９Ｂ区で検出した。南北に長い楕円形を呈し、断面は浅い半円形を呈する。規模は長径1.3ｍ・短径0.6ｍ・深さ0.1ｍを測る。埋土は茶褐色砂礫混じり砂質シルトで、遺物は出土しなかった。

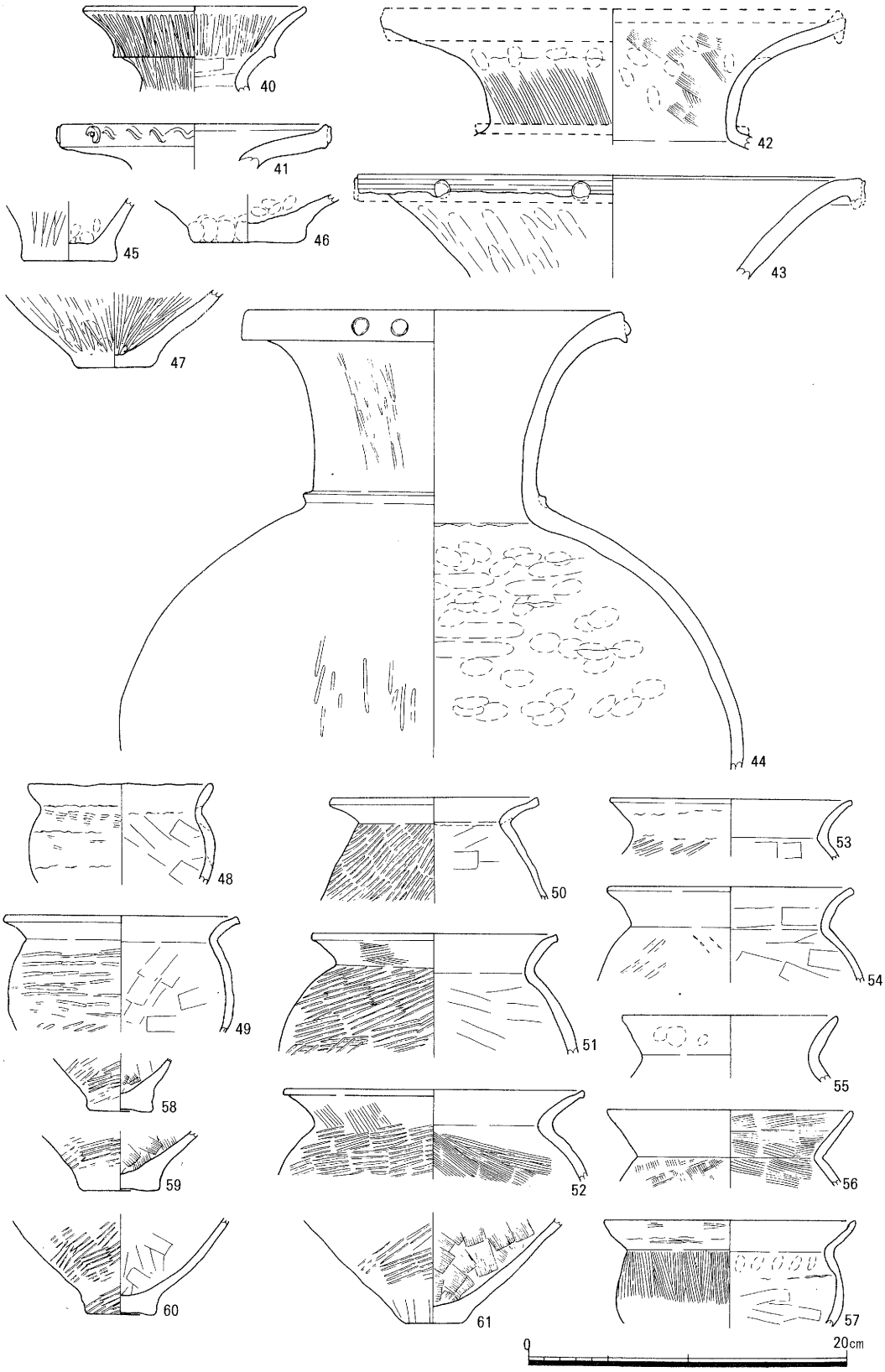
ＳＫ－207

南地区南西隅の10Ａ区で検出した。西部および南部は調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部で最大径1.5ｍ・深さ0.2ｍを測る。埋土は暗褐色砂礫混じり砂質シルトで、遺物は出土しなかった。

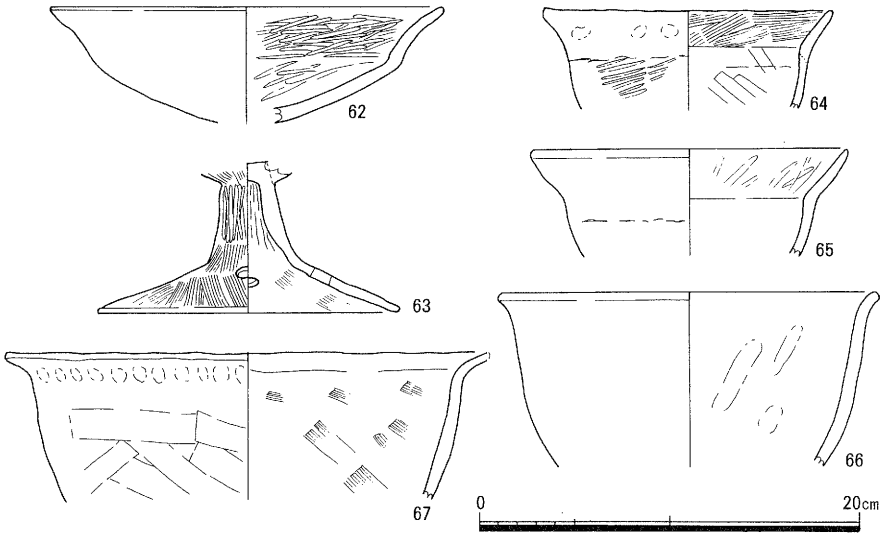
溝（ＳＤ）

ＳＤ－201

北地区１Ａ区～２Ｂ区で検出した。南東－北西方向に伸びる溝で、規模は幅1.3ｍ・深さ0.6ｍを測る。断面の形状は摺鉢状を呈する。埋土は上から灰色細粒砂～細礫・茶褐色極細粒砂・灰青灰色極細粒砂の３層がレンズ状に堆積する。埋土内からは壺・甕・高杯をはじめとする多量の遺物が出土した。そのうち図化できたものは壺が８点（40～47）、甕が14点（48～61）、高杯が２点（62・63）、鉢が４点（64～67）である。（40）の複合口縁壺は、擬口縁の発達が従来のものより一段と進むタイプで、弥生時代後期のなかではもっとも新しい段階に位置付けられ



第15図　ＳＤ－201出土遺物実測図Ⅰ



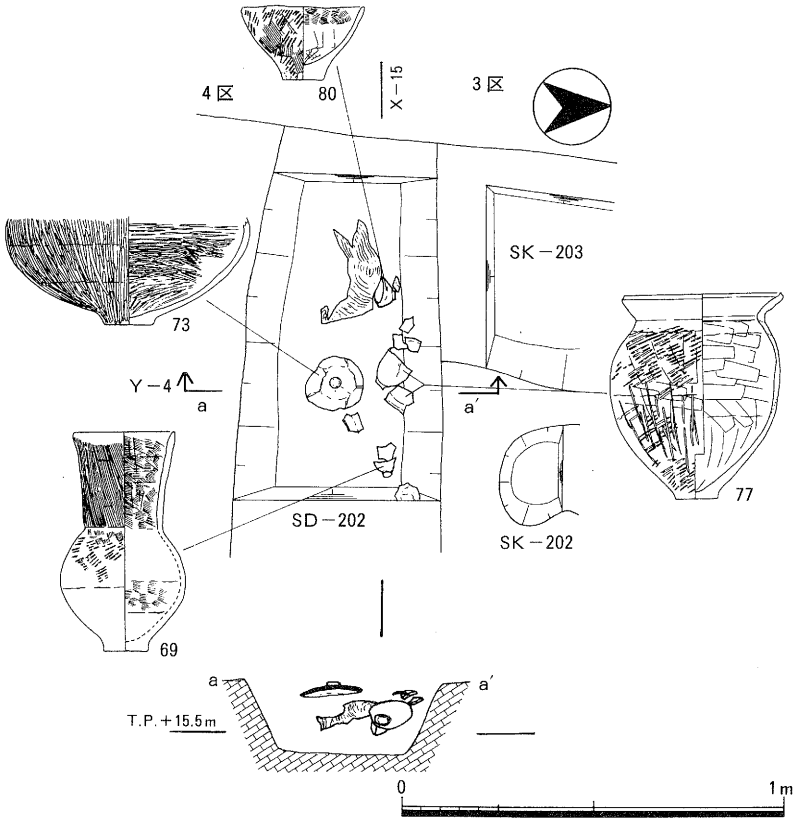
第16図　ＳＤ－201出土遺物実測図Ⅱ

る。複合口縁壺（41）および広口壺（43・44）は、いずれも口縁端部がそのまま面をもって終わり、端面には円形浮文や波状文などによって装飾が施される。加えて（44）の肩部の突帯は、円形竹管浮文を含めて畿内第Ｖ様式の文様上の特色を表す。甕については、口縁端部の形態上の分類として面をもつもの（49・50・51・52・54）と丸く納まるもの（48・53・55・56・57）の２種類をみる。また、甕については当該期には（48・49・57）にみられる小型品が登場するのが特色の一つともいえよう。さらに当該期には（48）のように「分割成形技法」が顕著にみられる甕が盛行する。高杯（62・63）は、口縁部と脚台裾部の発達したもので、畿内第Ｖ様式のなかでも比較的新しい段階に位置付けられる。鉢については（64・65）のような小型品が当該期から甕に倣って登場し、大型品から小型品への移行を窺わせる。

ＳＤ－202

北地区３Ａ区～３Ｂ区・４Ａ区～４Ｂ区で検出した。東西方向に伸びる溝で、幅1.2～2.0m・深さ0.6m前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上から明褐色細礫・灰色細砂混じりシルト質粘土・明青灰色砂質シルトの３層に分層できる。溝内の西部では、当該期の一括資料とも言えるべき遺物の集積が確認された。そのうち図化できたのは、壺６点（68～73）・甕６点（74～79）・鉢３点（80～82）・高杯３点（83～85）である。広口壺（68）は口縁端部がやや肥厚し面をもつ。長頸壺（69）は、口頸部長と胴部高がほぼ等しく、突出した底部を有する。（70～73）の壺の底部は全て突出した平底をもち、（72）を除いて外面には縦方向の密なヘラミガキが認められる。（73）の胴部が扁球形を呈する壺は、当該期のなかでも新様相の段階で数を増す。甕は（75・76）にみるような小型品が目立ち、畿内第Ⅳ様式までの大型品はみ

られない。さらにこの時期には（77・78）にみるような外面のタタキ痕を、ハケナデ調整またはヘラ状工具によって消去しようとする気風が窺える。鉢は小型鉢（80・81）と大型鉢（82）で、体部からそのまま口縁部に至るもの（80）と、外反して受口状の口縁部をもつもの（81・82）がある。高杯（83・85）は口縁部及び脚部が発達したもので、



第17図　ＳＤ－202平断面図

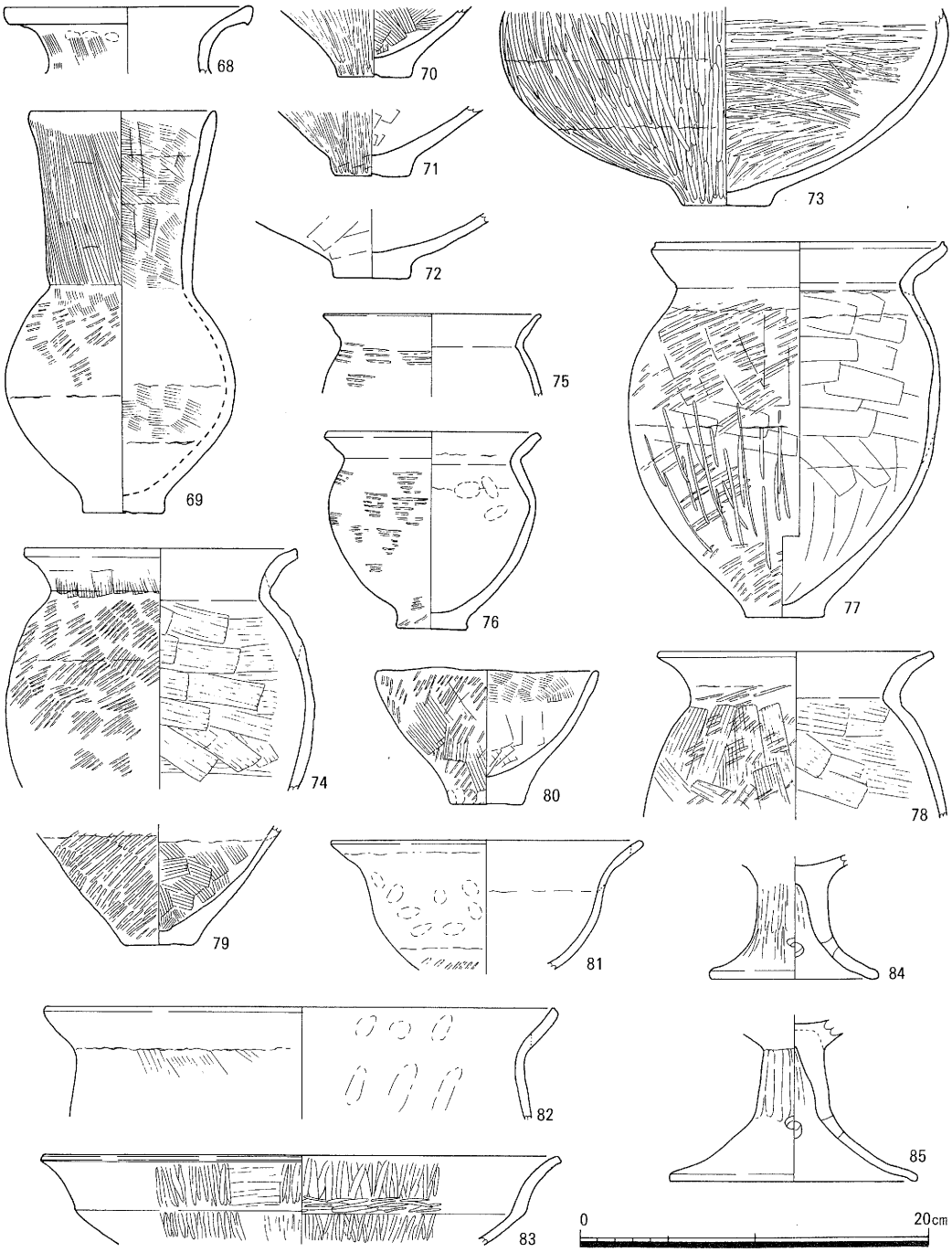
（83）の口縁部外面には丁寧なヘラミガキが施される。（84）は小型の高杯である。

ＳＤ－203

ＳＤ－202の南側でやや並行して伸びる溝である。検出規模は幅1.1ｍ・深さ0.5ｍを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上から茶褐色砂質シルト・黄褐色砂質シルト・明青灰色シルト・赤褐色粗粒砂混じりシルトの４層に分層できる。遺物は壺・甕の破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＤ－204

北地区のほぼ中央にあたる２Ｂ区～３Ｂ区で検出した。南北方向に伸びる溝であるが、北端をＳＤ－201、南端をＳＤ－206によって切られ、途絶える。規模は検出長7.5ｍ・幅0.7～2.0ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。断面の形状は、浅い半円形を呈する。埋土は暗青灰色細礫混じり砂質シルトの単一層である。内部からの出土遺物で図化できたものは、壺４点（86～89）・甕（90）・小型台付き鉢（91）である。広口壺（86）は、肥厚して垂下する口縁端部外面に竹管浮文で加飾される。（87）の広口壺の口縁部外面には放射状にヘラミガキが施される。小型台付き鉢



第18図　ＳＤ－202出土遺物実測図

(91) の台部は上げ底状で、ユビオサエの整形が粗い。

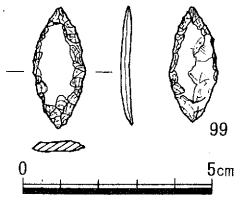
ＳＤ－205

北地区２Ａ区～２Ｂ区で検出した。やや東西方向に伸びる溝と思われるが、東部はＳＤ－

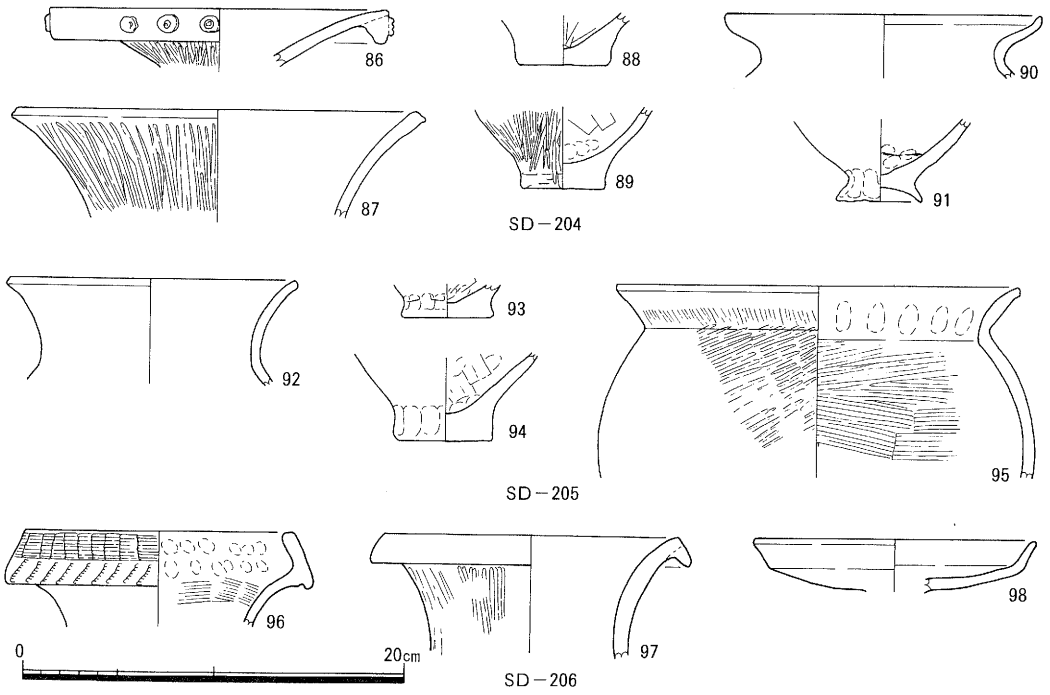
204によって切られる。検出規模は幅1.0ｍ・深さ0.1ｍを測る。断面の形状は浅い半円形を呈する。埋土は上から灰黄色微砂混じり粘土質シルト・灰青色砂質シルトの２層に分層できる。出土遺物のうち図化できたものは、壺３点（92～94）と甕（95）がある。広口壺（92）は外反する口頸部をもつ。肩の張る甕（95）の口頸部外面には接合後の調整と思われるハケナデがみられる。

ＳＤ－206

北地区２Ａ区～２Ｂ区・３Ａ区～３Ｂ区で検出した。東西方向にやや蛇行気味に伸びる溝である。溝の中央はＳＤ－204によって分断される。検出規模は幅2.5～3.0ｍ・深さ0.2ｍ前後を測る。断面の形状は浅い半円形を呈し、埋土は暗褐色礫混じり粘土質シルトが堆積する。内部からの遺物で図化できたものは、壺２点（96・97）・高杯（98）・サヌカイト製石鏃（99）がある。畿内第Ⅳ様式前半の所産とみられる広口壺（96）の口縁端部外面には、櫛描簾状文と列点文が加飾される。もう一方の広口壺（97）も垂下して面を有する口縁部であるが、装飾は施されない。（98）の杯部が浅い椀状を呈する高杯は、畿内Ⅳ様式から第Ｖ様式への過渡期に位置するものと推察する。石鏃（99）は尖基式である。



第19図　ＳＤ－206
出土遺物実測図



第20図　ＳＤ－204～ＳＤ－206出土遺物実測図

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－201

北地区２Ｂ区で検出した。平面の形状は楕円形、断面は逆台形を呈する。規模は長径0.5ｍ・短径0.3ｍ・深さ0.1ｍを測る。埋土は暗茶褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＰ－202

北地区３Ｂ区で検出した。平面の形状は円形、断面は半円形を呈する。規模は径0.4ｍ・深さ0.1ｍを測る。埋土は茶褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＰ－203

北地区４Ｂ区で検出した。平面の形状は楕円形、断面は逆台形を呈する。規模は長径0.8ｍ・短径0.6ｍ・深さ0.1ｍを測る。埋土は暗茶褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

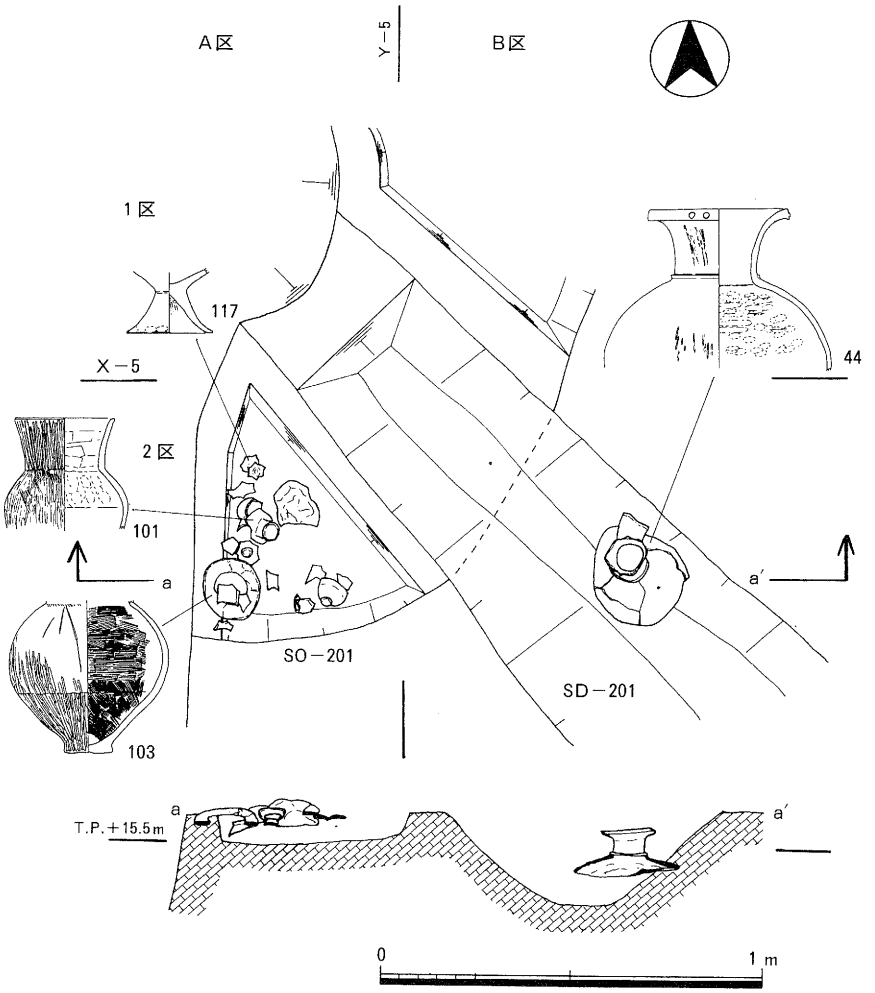
ＳＰ－204～215

南地区北部で２個（ＳＰ－204・205）・中央で1個（ＳＰ－206）・南部で９個（ＳＰ－207～215）の総数12個を検出した。これらの小穴を平面の形状で分類すると、円形５個（ＳＰ－205・206・208・209・214）・楕円形５個（ＳＰ－207・210・211・212・213）・不明２個（ＳＰ－204・215）になる。断面の形状は概ね逆台形を呈する。規模は径0.3～0.6ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土はすべて暗灰色砂礫混じり砂質シルトで、各小穴内からは図化不能な土器の小破片が僅かに出土した。これらの小穴は、調査区内でみる限りにおいて住居を構成するような規則性をもつ柱穴は確認できないが、土坑も含めて北地区からつづく居住域の広がりを示唆する。

落ち込み（ＳＯ）

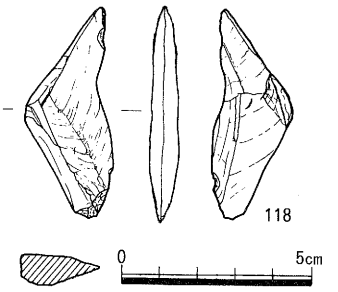
ＳＯ－201

北地区北西隅１Ａ区～１Ｂ区・２Ａ区～２Ｂ区で検出した。北部および西部は調査区外に至り、南部はＳＤ－201によって一部切られる。最大検出長6.4ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土は灰黒色粘土質シルトで、遺構内の中央付近では、径0.5ｍ前後の範囲で炭化物を含む焼土層が確認された。焼土層内に遺物は含まれていなかった。焼土層以外で遺存度の良い図化可能な遺物は、遺構内南端部で検出した土器集積からのものである。内容は、壺10点（100～109）・甕６点（110～115）・高杯２点（116・117）・サヌカイト製の削器（118）である。（100～103）は当該期から主流を占める長頸壺である。口頸部の外面調整にはヨコナデ（100）・ヘラミガキ（101）・ヘラナデ（102）の３種類がみられる。（103）の肩部外面には「⋔」のヘラ記号ような工具痕がみられる。広口壺の口縁端部外面には３条の凹線文を施すもの（104）と円形竹管浮文で加飾されるもの（105）がある。また、（105）の広口壺は胴部が長胴化から球形化に移行する兆しの窺えるものである。受口状の口縁部をもつ甕には、端部をつまみ上げるもの（110）

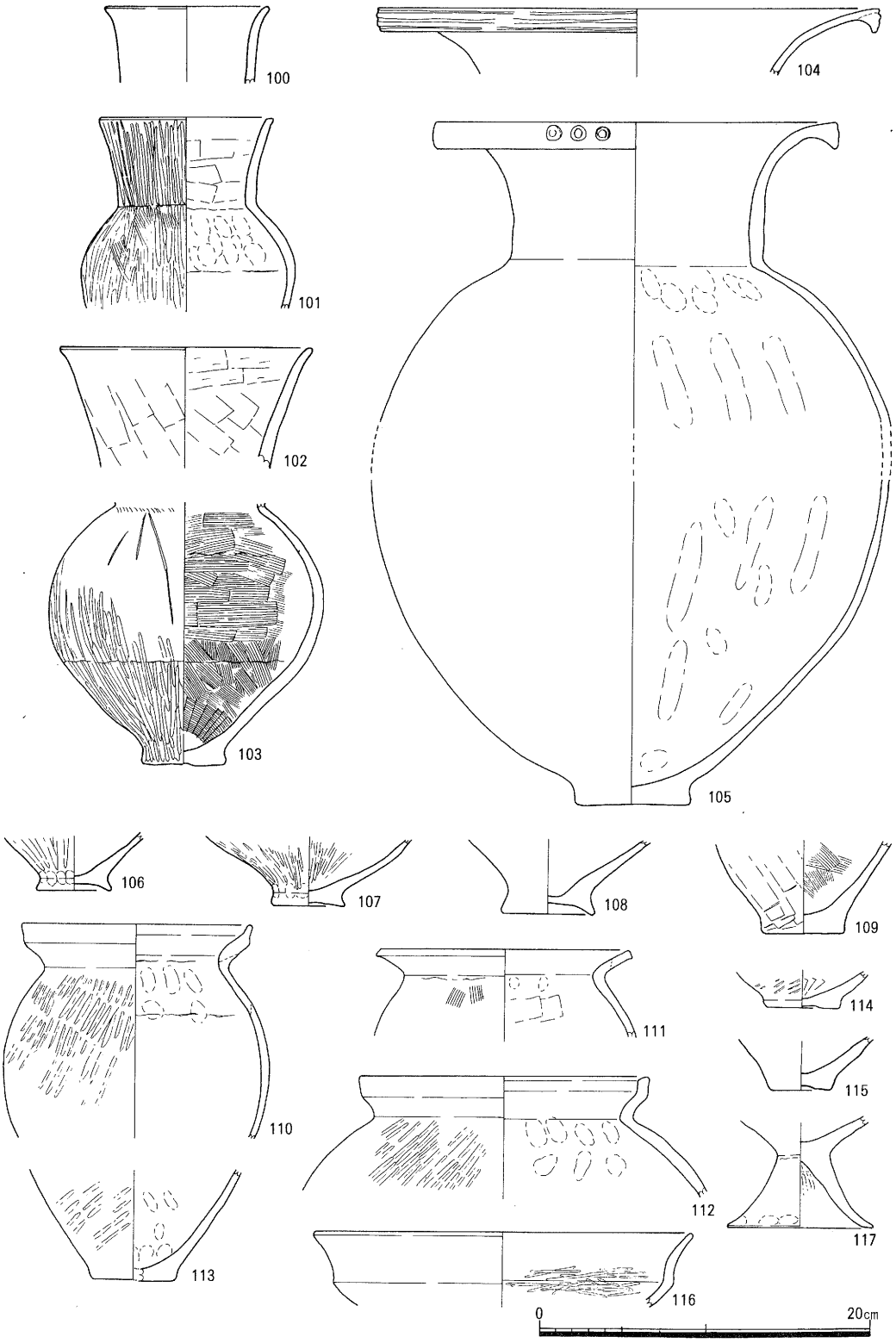


第21図　ＳＯ－201・ＳＤ－201平断面図

と肥厚するもの（112）がある。（111）の甕は大きく屈曲する口縁部で端部に面をもつ。高杯は口縁部の外反度と長さが進行する（116）がみられる一方で、円錐台形脚台をもつ小型のもの（117）が出現する。削器（118）は、素材剥片の縁辺の一部をえぐるようにして細部調整が施されている。



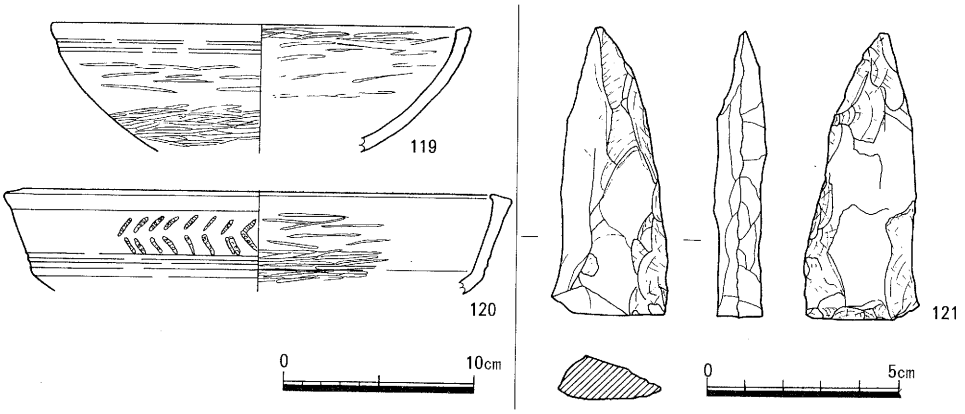
第22図　ＳＯ－201出土遺物実測図



第23図　ＳＯ－201出土遺物実測図

ＳＯ－202

北地区南部５Ａ区～５Ｂ区で検出した。遺構の南東部はＮＲ－201によって切られ、さらに調査区外に至っているものと思われる。検出規模は最大径5.0ｍ・深さ0.1～0.3ｍを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトである。内部からは壺・甕の破片が少量出土し、そのなかで図化できた遺物は、鉢（119）・高杯（120）・サヌカイト製石槍（121）である。高杯（120）は畿内第Ⅳ様式に相当するもので、内側にやや肥厚する口縁端部を有し、口縁部外面には「くの字状」の列点文と２条の凹線文を施す。（119）の椀型の鉢は、畿内第Ｖ様式に入って盛行をみるものである。（121）は細身で肉厚なことや側縁に刃潰しがみられないなどのことから石槍と考えられる。



第24図　ＳＯ－201出土土器・石器実測図

自然河道（ＮＲ）

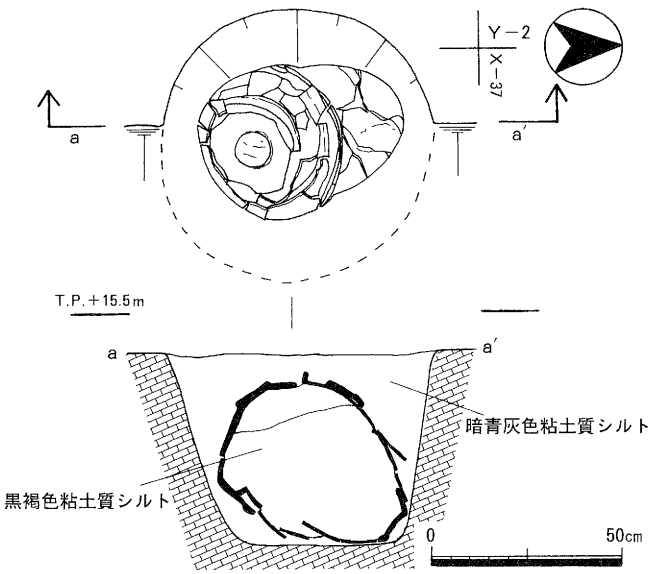
ＮＲ－201

北地区南端５Ａ区～５Ｂ区で検出した。本河道は上層の古墳時代初頭の河道（ＮＲ－101）とほぼ重複するものである。検出規模は幅0.7～1.6ｍ・深さ0.6ｍを測る。断面の形状は逆凸形を呈する。埋土は灰白色粗粒砂～細粒砂で、内部からはローリングを受けた小型甕の破片が出土した。

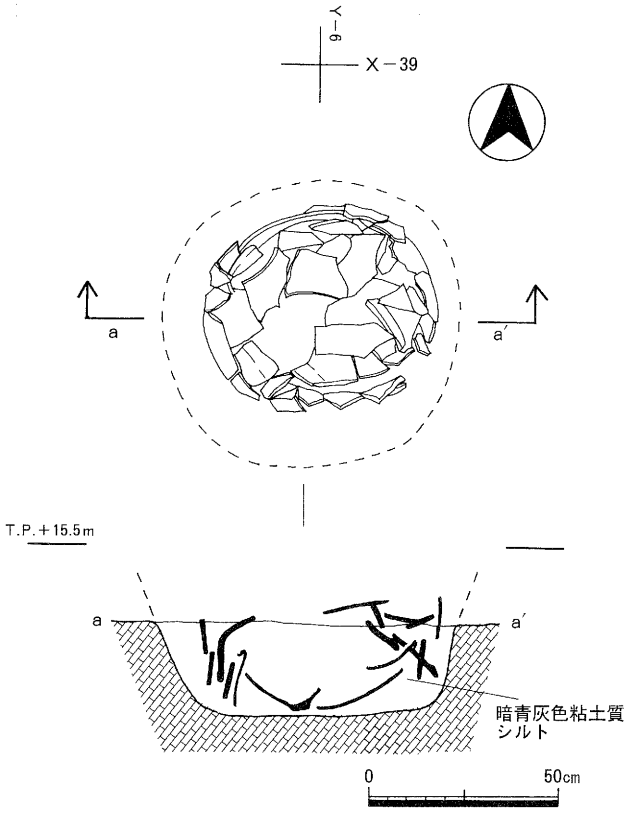
＜弥生時代中期＞

土器棺墓１

南地区８Ａ区の西側溝内で検出した。大型鉢（122）を棺蓋、大型甕（123）を棺身としたものである。掘方の東肩を側溝によって削平してしまったが、規模について西肩から推定復元すると径0.7ｍ前後・深さ0.5ｍ前後を測るものと思われる。土器棺は南東に約40度前後傾いている。蓋である大型鉢は土圧によって体部と底部は分断される。棺内には遺骸の腐蝕分解に伴って有気質が供給されたとみられる黒褐色粘土質シルトが堆積していた。掘方内には暗青灰色粘



第25図　土器棺墓１平断面図



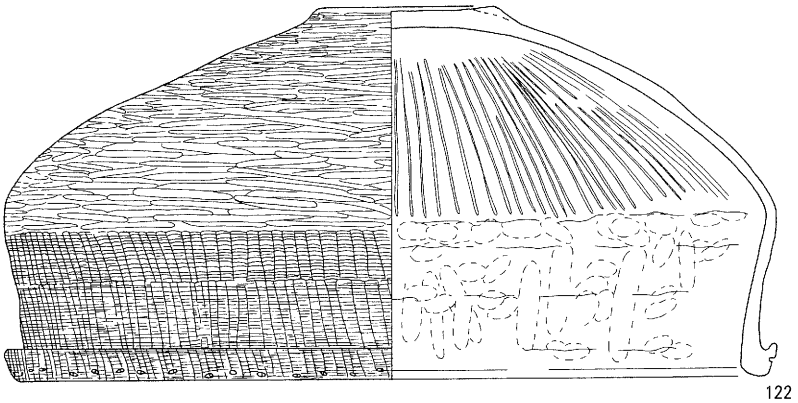
第26図　土器棺墓２平断面図

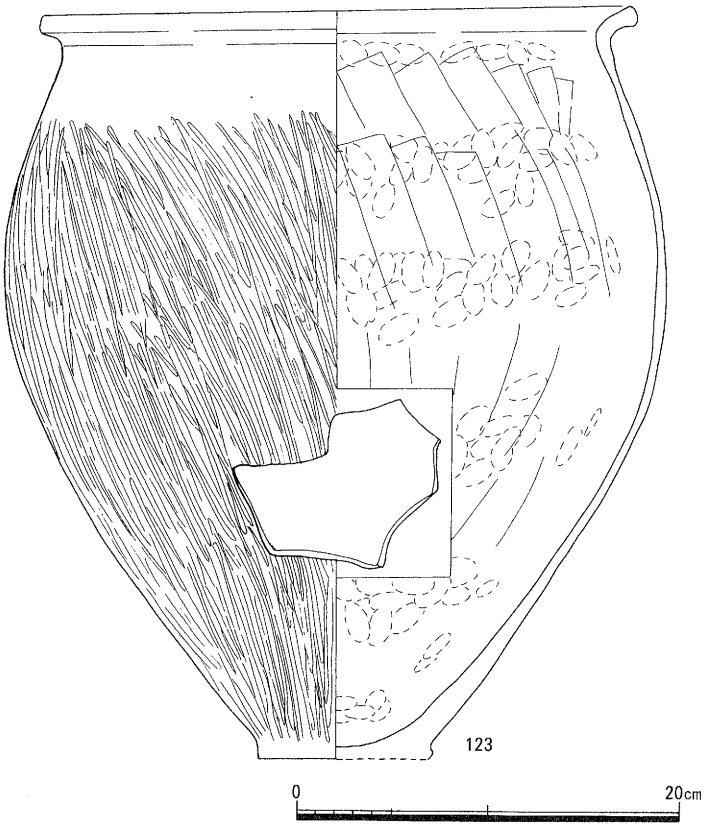
土質シルトが埋積する。土器棺の身として使用されている大型甕の法量は、口径30.6cm・器高39.6cmを測る。形態は、平底で最大径を上位にもつ体部から端部がやや肥厚する短めの口縁部が付く。調整は、内面ユビオサエ後ヘラナデ・外面斜め方向のヘラミガキが施される。また、体部下半部には径８～10cmの焼成後の打ち欠き孔がみられる。一方、蓋として使用されている大型鉢の法量は、口径38.5cm・器高19.6cmを測る。形態は垂下する口縁端部を有し、底部は短めに突出する平底を呈する。調整は内面上半はユビナデ・下半は放射状のヘラミガキ、外面上半は簾状文・下半は横方向のヘラミガキが施され、口縁端部外面には刺突孔を有する。土器の形態から双方とも畿内第Ⅳ様式の後半に位置付けられる。

土器棺墓２

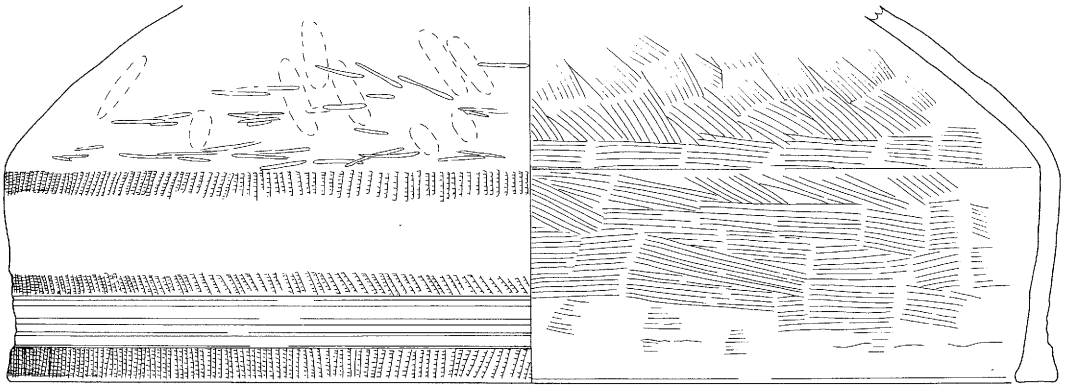
土器棺墓１から南東に約4.5m前後の地点で検出した。埋葬形態は**土器棺墓１**と同じと思われるが、墓壙は後世に削平を受けたとみられ、掘方の規模については不明である。さらに土器棺の蓋となる大型鉢（**124**）についても既に破損しており、原

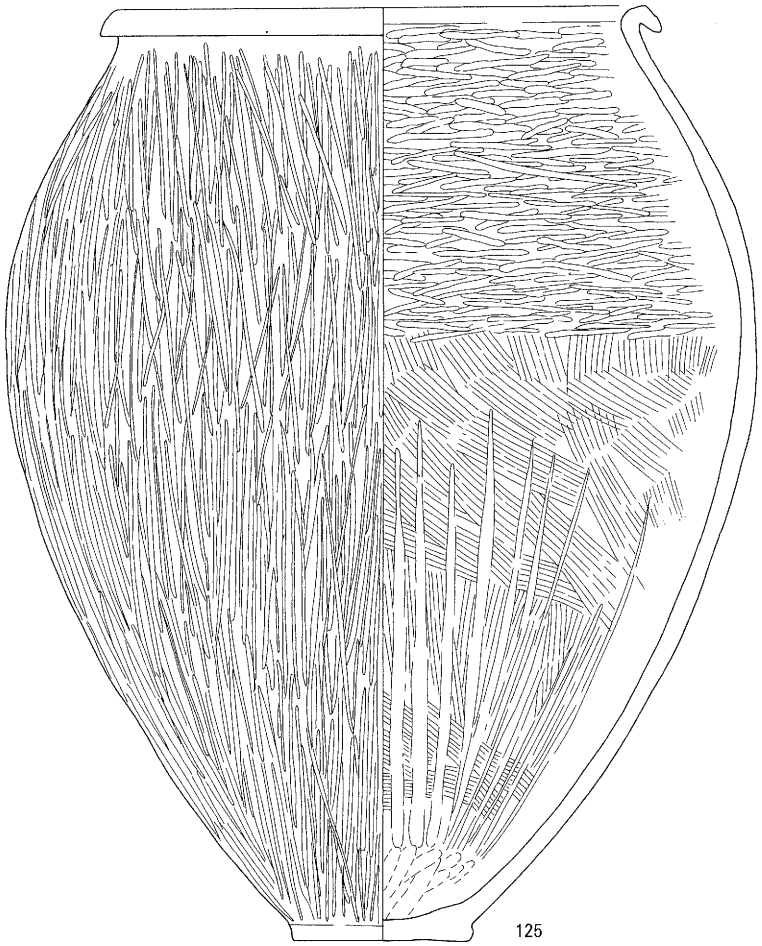
形を留めるものではなく、口縁部の約2／3のみが辛うじて残存する状況であった。棺身となる大型甕（125）についても棺本来の形状を保っていない。掘方内には暗青灰色粘土質シルトが埋積する。棺を復元した結果、土器棺の身として使用されている大型甕の法量は、口径27.4cm・器高49.3cmを測る。形態は平底で最大径を上位にもつ体部から垂下して面をもつ口縁がつく。調整は内面上半横方向のヘラミガキ・下半ハケナデのち放射状のヘラミガキ、外面縦方向のヘラミガキが施される。一方、蓋として使用されている大型鉢の法量は、復元からの推定で口径54cm前後・体部最大径55cm前後を測るものと思われる。形態の知り得るところ、口縁部は肥厚し、外面及び上方に面をもつ。調整は内面ハケナデ、外面列点文・凹線文・ヘラミガキによって構成される。時期は**土器棺墓１**と同様、畿内第Ⅳ様式の後半に位置付けられる。





第27図　土器棺（土器棺墓１）実測図

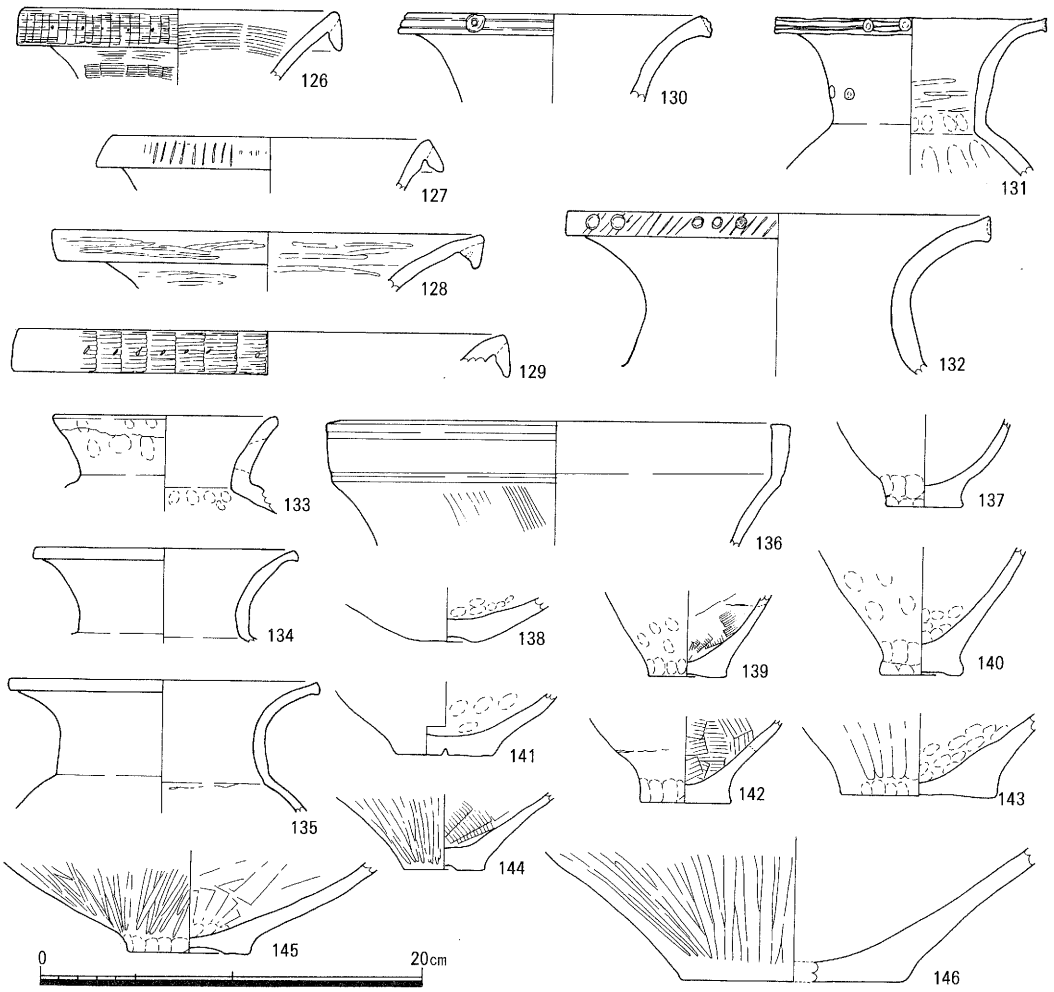




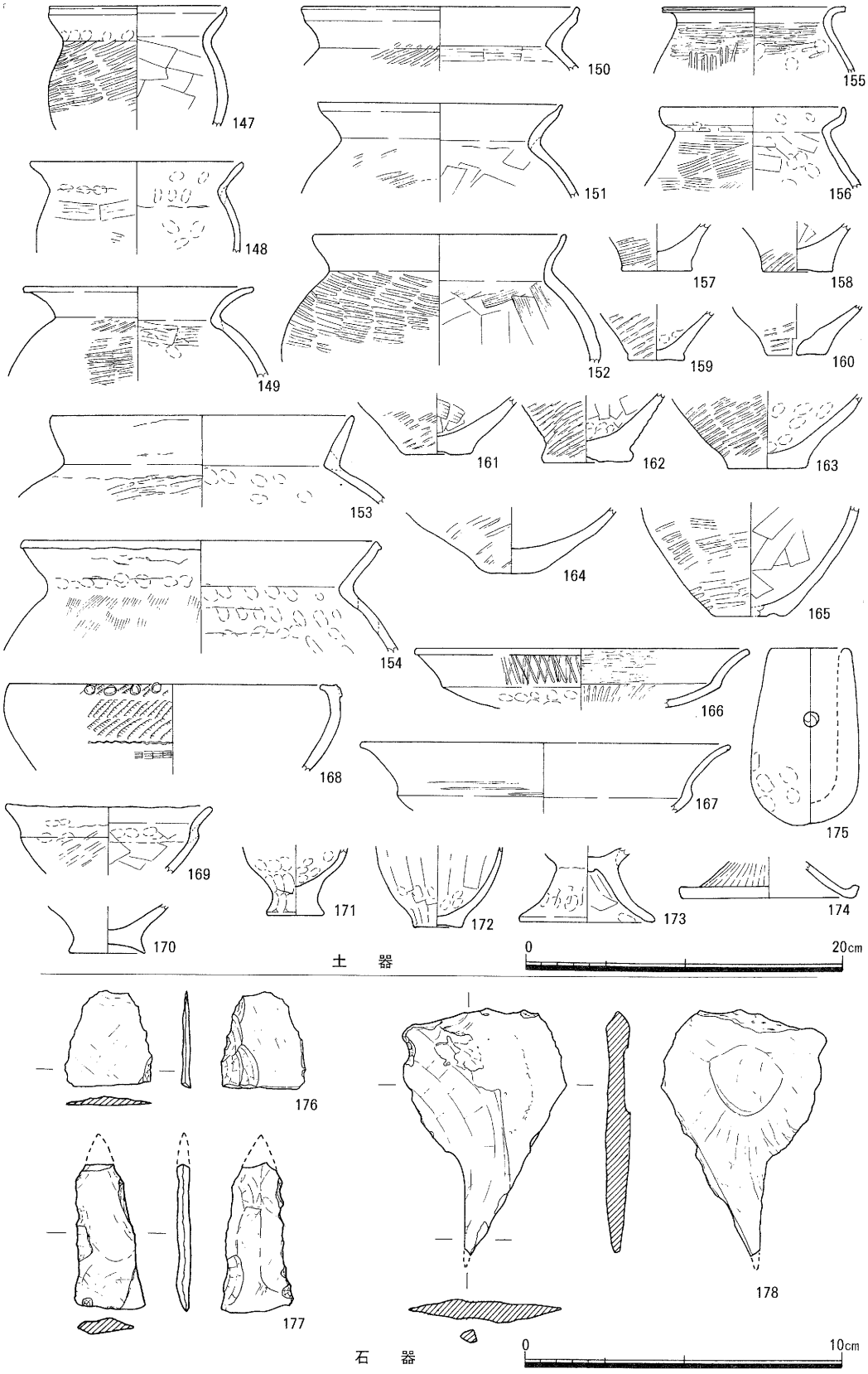
第28図　土器棺（土器棺墓２）実測図

［遺構に伴わない出土遺物　－第７層内－］

南北両地区の第７層から出土した弥生時代中期～後期の遺物で図化できたものは、壺21点（126～146）・甕19点（147～165）・高杯２点（166・167）・鉢５点（168～172）・脚台部２点（173・174）・飯蛸壺（175）・サヌカイト製石器３点（176～178）である。畿内第Ⅴ様式の所産である（126～129）の垂下する口縁部をもつ広口壺のうち（126・127・129）は、簾状文を施した口縁部端面に刺突孔を有する。広口壺（130～135）のうち（130～132）は、口縁部の端部がやや肥厚して面を有し、円形竹管浮文・凹線文・列点文によって加飾される。円形竹管浮文は、畿内第Ⅴ様式の特色の一つでもある。大型壺（136）は畿内第Ⅳ様式前半の所産で、直立する付加状の口縁部に上下２条の凹線文が施される。甕は後期に入ると（147～149）のように小型のものが目立つ。外面調整は底部も含めてほとんどタタキ痕を残すものであるが、



第29図　第７層出土遺物実測図Ⅰ



第30図　第７層出土遺物実測図Ⅱ

（148）のようにヘラナデ等によってタタキ痕が消されるものも散見される。また、（155・156）の甕については口縁部・肩部の形態、さらに胎土の様相から（155）が讃岐系、（156）が山陰系と思われる。底部の形態は平底・ドーナツ底を呈するものであるが、（160）のような穿孔を有するものもみられる。高杯（166・167）は畿内第Ⅴ様式のなかでも新相のもので、口縁部は外反して伸び、内外面の調整がヘラミガキのもの（166）とナデのもの（167）がある。鉢は（168）のように外面に円形浮文・列点文・櫛描簾状文で加飾される畿内第Ⅳ様式に類するものと、畿内第Ⅴ様式の粗製の小型台付き鉢（169・171・172）が混在する。（173・174）の脚台については台付き壺か鉢か断定し難い。飯蛸壺（175）は完形品で、色調は赤みが勝った褐色を呈する。（176）は縦長の小さい素材剥片の一部の片面に調整を施した削器と思われる。（177）は背面に自然面をもつ剥片を素材とした尖頭器で、刃部の先端を欠く。（178）の石錐は大剥離を残す頭部から徐々に尖らせるもので、錐端部を欠く。

第４節　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径 器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
1	椀 （瓦　器） SE－101井内	11.2 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	灰白色～淡灰色	1㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/8	
2	同　上	12.0 －	同　上	灰白色	密	良好	口縁部1/8	
7 六	甕 （瓦質） SE－101井内	－ － 底径　14.0	外面：タタキ（5～6本/cm） 内面：ヘラナデ	暗灰色 黒灰色	2㎜以下の砂粒を含む	良好	体部下半 2/3	東播系
8 六	器台 （弥生土器） SE－101掘内	21.0 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、腹部中央に透孔の痕跡有り。 内面：ヘラミガキ、ナデ	茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/3	
9	甕 （弥生土器） SE－101掘内	－ － 底径　3.0	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	暗灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
10	小型台付き鉢 （弥生土器） SE－101掘内	－ － 底径　3.6	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色	2㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
15	杯蓋 （須恵器） SX－101	14.4 4.5	天井部外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰色	堅緻	良好	1/3	
16	杯身 （須恵器） SX－101	13.2 －	底部外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰色	堅緻	良好	1/6	
17	甕 （土師器） NR－101	12.4 －	外面：ヨコナデ、タタキ（４本/cm） 内面：ヨコナデ、ハケナデ（10本/cm）、ヘラナデ	暗茶褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/6	内面全域に黒斑を有する
18	同　上	－ － 底径　4.0	外面：タタキ、ユビオサエ 内面：ヘラナデ	茶褐色	5㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
19 六	小型壺 （土師器） NR－101	8.2 7.7	外面：ハケナデ（10本/cm）、ヘラナデ、ユビオサエ 内面：ハケナデ（10本/cm）、ヘラナデ	暗茶色	0.5㎜以下の砂粒を含む	良好	ほぼ完形	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径 器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
20	小型壺 （須恵器） 第６層	5.8 － 体部最大径 7.3	底部外面1/4回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	淡灰色	堅緻	良好	口縁部～体部1/6	
21	杯蓋 （須恵器） 第６層	8.6 －	天井部外面1/6回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	青灰色	堅緻	良好	1/6	
22	杯身 （須恵器） 第６層	9.0 －	内外面回転ナデ（底部欠損）	灰色	堅緻	良好	1/6	
23 六	同　上	14.4 －	底部外面1/5回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰茶色	堅緻	良好	1/3	
24 六	高杯 （須恵器） 第６層	10.8 －	底部外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰青色	堅緻	良好	杯部1/6	
25 六	甕 （須恵器） 第６層	22.0 －	外面：磨滅のため調整不明 内面：回転ナデ、青海波タタキ	青灰色	堅緻	良好	口縁部～肩部1/6	
26	杯 （須恵器） 第６層	－ － 高台径 10.2 高台高　0.5	内外面回転ナデ。高台貼付け。	淡灰色	堅緻	良好	底部1/6	
27 六	椀 （青磁） 第６層	－ － 高台径　6.2 高台　1.1	高台削り出し。釉は、高台内面中心部付近を残して全面に施される。	断－白色 釉－暗緑灰色 露－乳灰色	堅緻	良好	底部のみ完存	中国磁器
28 六	羽釜 （土師器） 第６層	26.0 － 鍔径　31.8	外面：ヨコナデ、ナデ、接合痕を２条有する。 内面：ヨコナデ、ハケナデ（６本/cm）、ナデユビナデ	乳白色	３mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部～鍔部1/6	大和産
29 六	同　上	27.0 － 鍔径　32.4	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ、口縁部外面に３条の段を持つ。 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	暗灰色	密	良好	口縁部～鍔部1/6	河内産
40	複合口縁壺 （弥生土器） SD－201	13.6 －	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ヘラナデ	褐灰色	３mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部～頸部1/4	
41	同　上	16.4 －	内外面ヨコナデ、ナデ。口縁端部外面には２条の波条文を施した後、竹管円形浮文が貼付けられる。	乳灰茶色	３mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
42	同　上	28.7 －	外面：上下に肥厚する口縁端部は欠損。ハケナデ（5～6本/cm）、ユビオサエ。頸部下位に貼付け突帯の痕跡有り。接合痕を１条有する。 内面：ハケナデ（11本/cm）、ユビオサエ	茶灰色	３mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	内面に黒斑を有する
43 六	広口壺 （弥生土器） SD－201	31.8 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ。口縁端部外面には２条の凹線文を施した後、円形浮文が貼付けられる。 内面：ヨコナデ、ナデ	灰褐色 褐灰色	５mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	肩部外面に黒斑を有する
44 七	同　上	23.2 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。口縁端部外面には円形浮文が貼付けられる。頸部下位に貼付け突帯を有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ。接合痕を３条有する。	淡褐灰色	９mm以下の砂粒を多量に含む	良好	1/2	
45	壺 （弥生土器） SD－201	－ － 底径　5.6	外面：ヘラミガキ 内面：ユビオサエ	暗灰茶色	３mm以下の砂粒を含む	良	底部のみ	
46	同　上	－ － 底径　7.2	内外面ユビオサエ、ナデ	灰茶色	７mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
47	同　上	－ － 底径　5.0	外面：ユビオサエ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	茶灰色	５mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 （cm）　器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
48	甕 （弥生土器） SD－201	11.4 － 体部最大径 11.5	外面：ヨコナデ、タタキ。接合痕を３条有する。 内面：ヨコナデ、ヘラナデ。接合痕を１条有する。	暗褐灰色	２㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～肩部1/4	
49	同　上	14.4 － 体部最大径 14.0	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	暗褐灰色	３㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～体部1/8	外面に煤付着
50	同　上	12.8 －	外面：ヨコナデ、タタキ（4本/cm） 内面：ヨコナデ、ヘラナデ。接合痕を１条有する。	褐灰色	６㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～体部1/8	外面に煤付着
51 七	同　上	15.2 －	外面：ヨコナデ、ハケナデ、タタキ（3～4本/cm） 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	茶灰色 褐灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良	1/2	肩部外面に煤付着
52	同　上	18.6 －	外面：ヨコナデ、ハケナデ（11本/cm）、タタキ（４本/cm） 内面：ヨコナデ、ハケナデ（10本/cm）	淡灰茶色	３㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～肩部1/5	口縁部外面に黒斑有する
53	同　上	15.0 －	外面：ヨコナデ、タタキ（3本/cm）、接合痕を２条有する。 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	茶灰色	５㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部1/4	外面に煤付着
54	同　上	15.0 －	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	茶灰色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/4	外面に煤付着
55	同　上	13.4 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ	黄褐色	５㎜以下の砂粒を多量に含む	良	口縁部1/5	
56	同　上	15.2 －	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケナデ 内面：ハケナデ（12本/cm）	褐灰色	１㎜以下の砂粒を少量含む	良	口縁部1/4	外面に煤付着
57 七	同　上	15.6 － 体部最大径 14.2	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ハケナデ（12本/cm）。接合痕を１条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ。接合痕を１条有する。	暗茶灰色 褐灰色	２㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～体部1/4	外面に煤付着
58	同　上	－ － 底径　3.8	外面：タタキ（４本/cm） 内面：ハケナデ（10本/cm）	褐灰色 茶灰色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
59	同　上	－ － 底径　4.8	外面：タタキ（３本/cm） 内面：ハケナデ（８本/cm）	茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	内面に煤付着
60	同　上	－ － 底径　4.2	外面：タタキ（４本/cm） 内面：ヘラナデ	暗茶灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良	底部のみ	内面に煤付着
61	同　上	－ － 底径　3.4	外面：タタキ（３～４本/cm）、ヘラナデ 内面：ハケナデ（10本/cm）	灰茶色	６㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	内面に煤付着
62	高杯 （弥生土器） SD－201	20.4 －	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ	茶灰色	６㎜以下の砂粒を含む	良好	杯部1/6	口縁部外面に黒斑を有する
63 七	同　上	－ － 裾径　15.6	外面：ヘラミガキ、ハケナデ（７本/cm）。透孔の痕跡有り。 内面：ハケナデ（７本/cm）	灰茶色	６㎜以下の砂粒を含む	良好	脚部1/3	裾部外面に黒斑を有する
64	鉢 （弥生土器） SD－201	15.0 －	外面：ユビオサエ、タタキ（３本/cm）。接合痕を１条有する。 内面：ハケナデ（７本/cm）、ヘラナデ。接合痕を１条有する。	暗灰褐色 茶灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～体部1/4	外面に煤付着
65	同　上	16.4 －	外面：ヨコナデ、ナデ。接合痕を１条有する。 内面：ヘラミガキ、ナデ	茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～体部1/4	肩部外面に黒斑を有する
66	同　上	19.0 －	外面：ナデ 内面：ユビナデ、ナデ	暗灰色 茶灰色	４㎜以下の砂粒を多量に含む	良	口縁部～体部1/8	外面に煤付着

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 (cm)　器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
67 七	鉢 (弥生土器) SD－201	25.2 －	外面：ユビオサエ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ハケナデ、ナデ	茶灰色	3㎜以下の砂粒を多量に含む	良	口縁部～体部1/4	体部外面に黒斑を有する
68	広口壺 (弥生土器) SD－202	14.0 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハケナデ（8本/cm） 内面：ヨコナデ	茶灰色 暗灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/4	
69 七	長頸壺 (弥生土器) SD－202	14.0 23.4 底径　4.4 体部最大径 13.0	外面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハケナデ（10本/cm）、タタキ後ハケナデ。接合痕を3条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハケナデ（10本/cm）、ハケナデ。接合痕を5条有する。	淡茶褐色	1㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部の一部欠損	体部外面上位に黒斑を有する
70	壺 (弥生土器) SD－202	－ － 底径　4.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケナデ（8本/cm）	暗茶褐色	7㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	内面に煤付着
71	同　上	－ － 底径　4.0	外面：ヘラナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラナデ	暗茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
72	同　上	－ － 底径　4.2	外面：ヘラナデ 内面：ナデ	乳褐色	2㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
73 七	同　上	－ － 底径　4.8	外面：ヘラミガキ。接合痕を2条有する。 内面：ヘラミガキ	茶褐色 茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	外面に黒斑有する
74 七	甕 (弥生土器) SD－202	15.4 －	外面：ヨコナデ後ハケナデ（6本/cm）、タタキ（5本/cm）。接合痕を3条有する。 内面：ヨコナデ、ハケナデ（6～7本/cm）	茶灰褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～体部1/7	外面に煤付着
75	同　上	12.4 －	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	茶褐色	3㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/4	
76 七	同　上	12.0 11.5 底径　4.8 体部最大径 11.8	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ。接合痕を2条有する。	暗茶褐色 茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	1/2	外面に黒斑を有する
77 八	同　上	16.4 21.8 底径　4.3 体部最大径 17.7	外面：ヨコナデ、タタキ（3本/cm）後ヘラナデ。接合痕を2条有する。 内面：ヨコナデ、ヘラナデ。接合痕を2条有する。	暗茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	3/5	体部内面下位に黒斑、外面下位に煤付着
78 八	同　上	15.4 －	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケナデ(10本/cm)。接合痕を1条有する。 内面：ヨコナデ、ハケナデ	茶灰色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部2/3	外面に煤付着
79	同　上	－ － 底径　4.0	外面：タタキ（3本/cm）。接合痕を1条有する。 内面：ハケナデ（6～10本/cm）。接合痕を1条有する。	暗茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部1/2	底部内面に黒斑を有する
80 八	小型鉢 (弥生土器) SD－202	12.7 7.8 底径　3.8	外面：タタキ（4本/cm）後ヘラナデ、ユビオサエ 内面：ハケナデ（12本/cm）、ヘラナデ	明茶褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	1/4	完形
81	同　上	17.6 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タタキ。接合痕を2条有する。 内面：ヨコナデ、ナデ。接合痕を1条有する。	淡茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部～体部1/4	
82	大型鉢 (弥生土器) SD－202	29.0 － －	外面：ヨコナデ、ハケナデ。接合痕を1条有する。 内面：ユビオサエ後ヨコナデ	明褐色 暗茶灰色	6㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～体部1/6	体部内面に黒斑を有する
83	高杯 (弥生土器) SD－202	29.6 －	外面：ヘラミガキ。2条の凹線を施す。 内面：ヘラミガキ	茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	内面全域に黒斑を有する

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径 器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
84 八	高杯 （弥生土器） SD－202	－ － 裾径　9.4	外面：ヘラミガキ。透孔を４箇所有する。 内面：シボリ目、ヘラナデ	茶褐色	２㎜以下の砂粒を含む	良好	脚部のみ	
85 八	同　上	－ － 裾径　14.0	外面：ヘラナデ、ナデ、ヨコナデ。透孔を４箇所有するとおもわれる。接合痕を１条有する。 内面：シボリ目、ナデ	明褐色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	脚部のみ	
86 八	広口壺 （弥生土器） SD－204	17.4 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。口縁端部外面に竹管浮文が貼付けられる。 内面：ヨコナデ、ナデ	褐灰色	２㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
87	同　上	20.8 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	灰茶色	１㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/6	
88	壺 （弥生土器） SD－204	－ － 底径　4.6	外面：ナデ 内面：ヘラナデ	茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
89	同　上	－ － 底径　4.2	外面：ヘラミガキ、ヘラナデ 内面：ヘラナデ、ユビオサエ	淡灰茶色	１㎜以下の砂粒を含む	良好	底部2/3	外面に黒斑を有する
90	甕 （弥生土器） SD－204	16.4 －	内外面共にヨコナデ	暗茶灰色 灰茶色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/6	
91	小型台付き鉢 （弥生土器） SD－204	－ － 底径　4.2	内外面共にナデ、ユビオサエ。内面に接合痕を１条有する。	暗灰茶色	６㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
92	広口壺 （弥生土器） SD－205	14.8 －	内外面共にヨコナデ	明茶褐色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
93	壺 （弥生土器） SD－205	－ － 底径　4.8	内外面共にユビオサエ後ヘラナデ	茶褐色 灰茶色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
94	同　上	－ － 底径　5.0	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ヘラナデ、ユビオサエ	乳褐色	４㎜以下の砂粒を含む	良	底部のみ	
95	甕 （弥生土器） SD－205	21.0 －	外面：ヨコナデ、ハケナデ（６本/cm）、タタキ（４本/cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ハケナデ（６本/cm）	茶褐色	５㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～体部上半1/4	外面に煤付着
96 八	広口壺 （弥生土器） SD－206	13.0 －	外面：口縁端部上半に簾状文、下半に列点文を施す。 内面：ユビオサエ、ハケナデ	茶褐色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
97	同　上	15.4 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ナデ	茶灰色	６㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/5	
98	高杯 （弥生土器） SD－206	14.2 －	内外面共にヨコナデ、ナデ	赤褐色	３㎜以下の砂粒を含む	良	杯部1/6	外面に黒斑を有する
100	長頸壺 （弥生土器） SO－201	9.6 －	同　上	暗灰茶色 黄褐色	２㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	
101 九	同　上	10.3 － 体部最大径 12.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ユビオサエ、ナデ。接合痕を２条有する。	暗茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	上半部のみ	
102	同　上	15.0 －	内外面共にヨコナデ、ヘラナデ	茶褐色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	
103 八	同　上	－ － 体部最大径 16.6 底径　5.0	外面：ヘラミガキ。頸部にヘラ刻目を施す。肩部にヘラ状工具によるとみられる３本の線刻を有する。接合痕を１条有する。 内面：ハケナデ（12本/cm）。接合痕を２条有する。	淡茶灰色	５㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部のみ欠損	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 (cm)　器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
104	広口壺 (弥生土器) SO－201	31.2 －	外面：ヨコナデ。口縁端部に3条の凹線文を施す。 内面：ヨコナデ	赤褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部1/6	口縁端部外面に黒斑を有する
105 九	同　上	24.4 － 底径　6.5	外面：口縁部ヨコナデ以外は、磨滅が著しいため調整不明。口縁端部に3個一組の竹管圧文を施す。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	明褐色～赤褐色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良	体部中央の一部が欠損	全体的に風化による磨滅が著しい
106	壺 (弥生土器) SO－201	－ － 底径　4.4	外面：ヘラミガキ、ユビオサエ 内面：ナデ	茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部1/2	
107	同　上	－ － 底径　4.3	外面：ヘラミガキ、ユビオサエ 内面：ヘラミガキ	茶褐色	6㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
108	同　上	－ － 底径　3.5	内外面共にナデ	淡茶褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
109	同　上	－ － 底径　4.8	外面：ヘラナデ 内面：ハケナデ（8本/cm）	淡茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
110 九	甕 (弥生土器) SO－201	13.8 － 体部最大径 16.1	外面：ヨコナデ、タタキ（3本/cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ。接合痕を2条有する。	赤褐色	5㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～体部1/2	外面に黒斑を有する
111	同　上	13.0 －	外面：ヨコナデ、ハケナデ。接合痕を1条有する。 内面：ユビオサエ、ヘラナデ	灰茶色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
112	同　上	17.8 －	外面：ヨコナデ、タタキ（3本/cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	乳褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～体部1/6	
113	同　上	－ － 底径　4.8	外面：タタキ 内面：ユビオサエ、ナデ	暗茶褐色	7㎜以下の砂粒を含む	良	底部1/2	外面に黒斑を有する
114	同　上	－ － 底径　4.3	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	暗茶褐色	6㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
115	同　上	－ － 底径　3.5	内外面共にナデ	茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	内面に黒斑を有する
116	高杯 (弥生土器) SO－201	22.8 －	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ	赤褐色 乳褐色	2㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
117 九	同　上	－ － 裾径　4.8	外面：ナデ、ユビオサエ。接合痕を1条有する。 内面：シボリ目、ナデ	茶灰色	5㎜以下の砂粒を含む	良好	脚部のみ	
119 九	鉢 (弥生土器) SO－202	21.4 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。口縁部に2条の凹線文を施す。 内面：ヘラミガキ	暗茶灰色	密。2㎜以下の砂粒を僅かに含む	良好	1/4	
120 九	高杯 (弥生土器) SO－202	14.6 －	外面：2段の列点文、2条の凹線文を施す。 内面：ヘラミガキ	暗茶褐色 茶灰色	密。0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む	良好	口縁部1/6	
122 一〇	大型鉢 (弥生土器) 土器棺墓1	38.5 19.6 体部最大径 42.0 底径　9.4	外面：上半は簾状文、下半はヘラミガキ。口縁端部に刺突孔を有す。底部は貼付け。 内面：ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ。接合痕を4条有する。	茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	4/5	
123 一〇	大型甕 (弥生土器) 土器棺墓1	30.6 39.6 体部最大径 34.4 底径　9.0	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。体部下半に径8～10cmの打ち欠き孔がみられる。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ヘラナデ	暗茶褐色～黒褐色	密。5㎜以下の砂粒を僅かに含む	良好	口縁部3/4	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 （cm）　器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
124 一一	大型鉢 （弥生土器） 土器棺墓２	54.4 － 体部最大径 55.0	外面：上半は列点文・３条の凹線文、下半はユビオサエ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ハケナデ（５本/cm）。接合痕を１条有する。	淡灰茶色	５mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部3/4	
125 一一	大型甕 （弥生土器） 土器棺墓２	27.4 49.3 体部最大径 28.2 底径　9.2	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、上半はヘラミガキ、下半はハケナデ（５本/cm）後ヘラミガキ、ユビオサエ	茶灰色～茶褐色	密。５mm以下の砂粒を含む	良好	2/3	体部内面に黒斑を有する
126 九	広口壺 （弥生土器） 第７層	16.0 －	外面：簾状文、ハケナデ。口縁端部に刺突孔を有す。 内面：ハケナデ	黒褐色	４mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/8	内面に黒斑を有する
127	同　上	16.4 －	外面：簾状文。口縁端部に刺突孔を有す。 内面：ヨコナデ	灰茶色	２mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
128	同　上	22.8 －	内外面共にヘラミガキ	茶灰色	４mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/3	
129	同　上	25.6 －	外面：簾状文。口縁端部に刺突孔を有す。 内面：ヨコナデ	茶灰色	４mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/6	口縁端部内外面に黒斑を有する
130	同　上	15.2 －	内外面共にヨコナデ。口縁端部外面には、２条の凹線文と竹管浮文を施す。	茶褐色	５mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/8	
131 九	同　上	14.2 －	外面：ヨコナデ。口縁端部外面に２条の凹線文と竹管浮文を施す。頸部には竹管圧文を施す。 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ユビオサエ	明褐色 乳褐色	６mm以下の砂粒を含む	良好	口頸部4/5	
132 一二	同　上	22.2 －	内外面共にヨコナデ。口縁端部外面には、列点文、３個一組の竹管浮文を施す。	明褐色	５mm以下の砂粒を含む	良	口頸部1/3	
133	同　上	11.4 －	内外面共にヨコナデ、ユビオサエ。口縁部外面に接合痕を１条有する。	茶褐色	３mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/3	
134	同　上	13.4 －	内外面共にヨコナデ	茶灰色	６mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	口縁部外面上位に黒斑を有する。
135	同　上	16.0 －	内外面共にヨコナデ。頸部内面に接合痕を１条有する。	明褐色	２mm以下の砂粒を含む	良	口縁部1/3	
136	大型壺 （弥生土器） 第７層	22.6 －	外面：ヨコナデ、ハケナデ。口縁端部に２条の凹線文を施す。 内面：ヨコナデ、ナデ	明褐色	２mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	
137	壺 （弥生土器） 第７層	－ － 底径　4.0	外面：ナデ、ユビオサエ。1/2剥離。 内面：ナデ	暗茶褐色	５mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
138	同　上	－ － 底径　2.8	外面：ナデ 内面：ユビオサエ、ナデ	淡茶褐色 灰茶色	７mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
139	同　上	－ － 底径　4.4	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ナデ、ハケナデ。接合痕を１条有する。	淡茶褐色	４mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
140	同　上	－ － 底径　4.2	内外面共にユビオサエ、ナデ	淡茶褐色	５mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
141	同　上	－ － 底径　5.0	外面：ナデ。底部中央に刺突孔を有する。 内面：ユビオサエ、ナデ	淡茶褐色 暗茶灰色	４mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
142	同　上	－ － 底径　4.2	外面：ユビオサエ、ナデ。接合痕を１条有する。 内面：ハケナデ（６本/cm）	淡乳灰色	３mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 (cm)　器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
143	壺 (弥生土器) 第7層	－ － 底径　8.2	内外面共にユビオサエ、ナデ	茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面全域に黒斑を有する
144	同　上	－ － 底径　4.2	外面：ヘラミガキ 内面：ハケナデ（6本/cm）	暗茶褐色 暗茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
145	同　上	－ － 底径　6.2	外面：ヘラミガキ、ユビオサエ 内面：ヘラナデ、ユビオサエ	茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
146	大型壺 (弥生土器) 第7層	－ － 底径　11.6	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	淡乳褐色	密。2㎜以下の砂粒を含む	良好	底部1/2	
147 一二	甕 (弥生土器) 第7層	11.0 － 体部最大径 11.2	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タタキ（8～10本/cm） 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	明褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/6	
148	同　上	13.2 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タタキ後ヘラナデ。接合痕を1条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ。接合痕を1条有する。	暗茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	不良	口縁部1/2	外面に煤付着
149	同　上	14.2 －	外面：ヨコナデ、タタキ（4本/cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハケナデ。接合痕を1条有する。	明褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/6	
150	同　上	17.4 －	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ハケナデ	暗茶灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/6	
151	同　上	15.4 －	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ。接合痕を1条有する。	茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/6	外面に黒斑を有する
152 一二	同　上	15.6 －	外面：ヨコナデ、タタキ（3本/cm） 内面：ヨコナデ、ハケナデ	赤褐色	2㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/4	
153	同　上	22.0 －	外面：ヨコナデ、タタキ（3本/cm）。接合痕を3条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	茶灰色	5㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/7	
154	同　上	22.0 －	外面：ヨコナデ、ハケナデ。接合痕を2条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ。接合痕を2条有する。	茶灰色 灰色	3㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部～肩部1/6	頸部内面に黒斑を有する
155	同　上	11.6 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。口縁端部に凹線文を1条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ヘラミガキ	黒褐色 茶灰色	密。2㎜以下の砂粒を僅かに含む	良好	口縁部～肩部1/4	讃岐系
156	同　上	11.4 －	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ハケナデ（8～10本/cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ユビオサエ後ヘラナデ	暗茶褐色	6㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～肩部1/7	山陰系
157	同　上	－ － 底径　4.2	外面：タタキ 内面：ナデ	暗茶褐色	5㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
158	同　上	－ － 底径　4.4	外面：タタキ（3本/cm） 内面：ヘラナデ	茶褐色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
159	同　上	－ － 底径　3.6	外面：タタキ 内面：ユビオサエ	明褐色	3㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
160	同　上	－ － 底径　3.6	外面：タタキ。底部穿孔。 内面：ナデ	茶灰色	4㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 （cm）　器高	調　整・技　法	色調　外面 内面	胎　土	焼成	遺存度	備　考
161	甕 （弥生土器） 第７層	－ － 底径　4.2	外面：タタキ 内面：ハケナデ	茶褐色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
162	同　上	－ － 底径　5.0	外面：タタキ（３本/cm） 内面：ヘラナデ	明褐色 暗茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
163	同　上	－ － 底径　5.0	外面：タタキ（３本/cm） 内面：ユビオサエ	暗茶褐色	２㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
164	同　上	－ － 底径　2.6	外面：タタキ 内面：ナデ	茶褐色	５㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
165	同　上	－ － 底径　4.4	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	茶褐色	６㎜以下の砂粒を含む	良好	底部1/4	
166	高杯 （弥生土器） 第７層	20.6 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ユビオサエ、ナデ 内面：ヘラミガキ	暗茶灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/7	
167	同　上	22.8 －	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	茶褐色	２㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	口縁部外面に黒斑を有する
168 一二	鉢 （弥生土器） 第７層	20.4 －	外面：列点文、波状文、簾状文。口縁部に円形浮文貼付け。 内面：ナデ	茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/8	内外面に黒斑を有する
169	小型台付き鉢 （弥生土器） 第７層	12.8 －	外面：ユビオサエ、ナデ、タタキ。接合痕を１条有する。 内面：ユビオサエ、ナデ、ヘラナデ。接合痕を１条有する。	暗茶褐色	密。２㎜以下の砂粒を含む	良	口縁部1/6	
170	同　上	－ － 底径　4.6	内外面共にナデ。	明褐色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
171	同　上	－ － 底径　3.4	内外面共にユビオサエ、ナデ。	茶灰色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
172	同　上	－ － 底径　3.0	内外面共にユビオサエ後ヘラナデ。内面剥離。	明褐色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
173 一二	脚台部分 （弥生土器） 第７層	－ － 底径　8.4	外面：ユビオサエ後ヘラナデ。接合痕を１条有する。 内面：シボリ目、ユビオサエ、ヘラナデ	赤褐色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	脚部1/4	
174	同　上	－ － 底径　11.0	外面：ヘラミガキ、ヨコナデ 内面：ナデ	茶褐色 茶灰色	３㎜以下の砂粒を含む	良好	脚部1/4	
175 一二	飯蛸壺 （土製品） 第７層	4.8 11.3 体部最大径 6.8	内外面共にユビオサエ、ナデ。口縁部直下に一孔を穿つ。	茶褐色	密。２㎜以下の砂粒を僅かに含む	良好	完形	

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生地代中期の墓域・後期の集落域、古墳時代前期の自然河道・後期の集落域、鎌倉時代の生産域、室町地代の集落域といった概ね4時代に渡る遺構面を検出した。以下、時代別に概観したい。

＜弥生時代＞

中期では土器棺墓2基を検出するに至ったが、遺構検出状況や土器棺の規模からその性格について「山賀遺跡」[註8]や「瓜生堂遺跡」[註9]のような方形周溝墓にみられる家族墓的な性格をもつものと考えるよりは、単独的に土壙墓として集落域から離れた地に埋葬された幼少児の墓と理解したい。さらに幼少児の生誕した集落が、後期の居住地形成の際に失われた地、つまり北地区にあったとする蓋然性が強い。それは北地区の調査状況から第7層の後期の遺物包含層内に中期の遺物が混在していることや、後期の遺構内遺物にも中期の遺物が混入し、中期の集落域を踏襲した様相が窺われるところにある。また北地区南東部において検出した自然河道ＮＲ－201は後期遺構として判断したが、埋積土内の中期の遺物片の混在からすでに中期において、北地区の集落域と南地区の墓域とを画する溝の役割を果たしていた可能性もあり得る。今回検出した土器棺については畿内周辺の調査例からみて、成人の再葬墓とは区別されるものである。土器棺には、棺身として今回の甕以外に壺が使用される例もあるが稀である。また、棺の納置は資料によると近畿地方では、直立位に据えるものと今回のように20～40度程度の斜角で横寝させる[註10]2つの型式が確認されており、後者の横寝が圧倒的に多くを占める。横寝の納置については、九州北部にみられる成人用大型甕棺からの系譜をもつものであろうか。

後期の集落については上述したように南北両地区において、中期の集落および墓地を削平して形成されたものと考えられる。遺構内容から、北地区では溝の占める割合が多いこと、落ち込みや溝内に使用不能となった土器の排斥箇所がみられること、柱穴ともなるべき要素をもつ小穴が希薄ながらも南地区にみられることなどから、本調査の段階では居住域の中枢部は調査地でいうと南部側にあり、北部側はその縁辺の地と解釈したい。また、南地区の中央部、言い換えると前時代の土器棺があった周囲は少し空閑地になっていることから、後期の人々が意識的に住居築造を避けたものかあるいは祭祀場としての広場であった感がもたれる。

＜古墳時代＞

当該期以降の生活面と判断しえる遺構は北地区にのみみられ、南地区の方では近世以降の人為的削平・整地等によって失われる。古墳時代では、初頭（庄内式期）の自然河道ＮＲ－101と後期の不明遺構ＳＸ－101・102があるが、遺構および遺物の希薄さから積極的な知見を記述

するまでには至らない。しかし、上層の鎌倉時代の耕起の際に撹拌されたとみなされる埴輪片の出土は、当地付近または近接して古墳が存在したことを明示する。

＜中世＞

鎌倉時代に比定される畠地または水田に伴う集排水溝と思われる溝状遺構を検出した。また北地区の北西部では、井戸ＳＥ－101および住居を構成する柱穴を想定させる小穴を検出した。鎌倉時代の生産域は平断面の観察状況から室町時代にはいっても踏襲されるが、一部では居住域へ移行する様相が窺える。

以上概ね４時代に渡る様相を概観したが、今回の調査で特筆すべき事項としては、南地区における弥生時代中期の墓域から後期の集落域への移行である。中期においては既述したように北地区が集落域であって、南地区が住居地としても生産域としても利用されない場所として、幼少児の墓地が形成されたと考えたい。やがて後期に入ってそれまで墓域として占有されていた土地が何等かの理由により、居住地としての変更を余儀なく迫られたことが想像できよう。同時期内において成人の墓であれ、幼少児の墓であれ、一度作られた墓が、住居域や生産の場として破壊されることは人々が墓としてその存在を意識している間はありえない。しかし、今回のように時代の変遷によって遺跡の性格が変貌することが確認できたことは、その時代画期の人々の思想及び精神構造を考える上で非常に貴重な成果が得られたと言えよう。いずれにせよ、当遺跡における調査は緒についたばかりであり、弥生時代中期から後期への社会構造の変化、平安時代初期における神宮寺跡の解明、中世における集落域と生産域の位置的関係等々、現段階においては考古学的に未知なる部分が多い。これら究明課題のひとつひとつが今後の調査によって漸次的に解明されることに期待したい。

［付記］

本調査地北東の一段小高いところに、燕の帰化族で常世連の氏族祖神を奉ったとされる式内社「常世岐姫神社」がある。常世連は応神・仁徳天皇の時代、いわゆる大和王権と朝鮮半島との交流が盛んなるころ、染色の技術集団として日本に移り住んだ赤染氏の一派である。赤染氏は河内・遠江・因幡などに居住するが、とくに河内大県群（八尾市・柏原市）は渡来人が多く移住し、当地は常世連氏の中心的居住地であったとされる。常世岐姫神社は現在「式内御産神　八王子神社」の名で、安産の神として人々から厚く信仰されている。

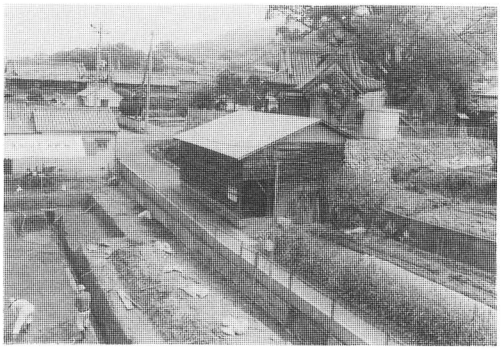


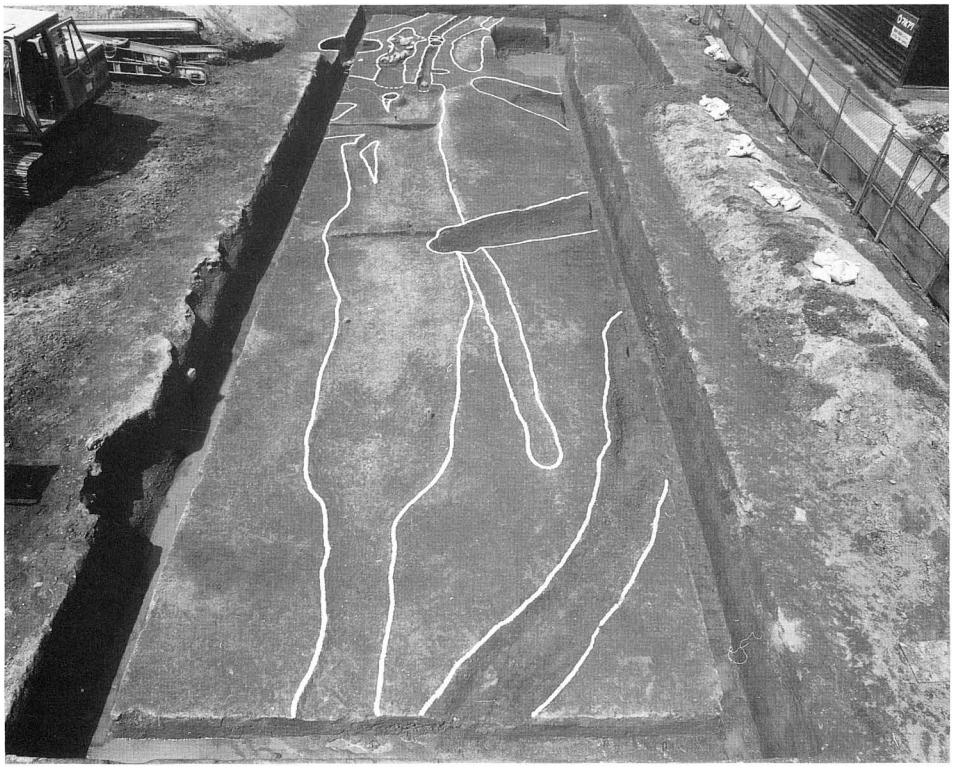
写真２　調査地〈左下〉と
常世岐姫神社〈右上〉（南西から）

註

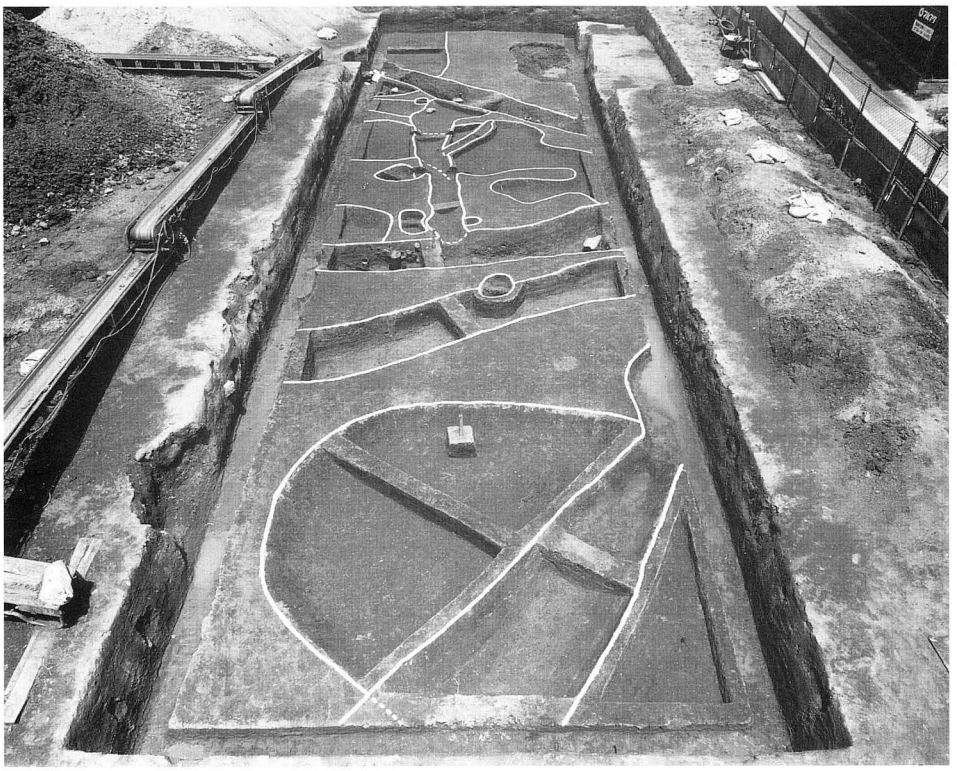
註1　山上　弘　1994.3『神宮寺遺跡発掘調査概要　－八尾市神宮寺4丁目所在－』大阪府教育委員会
註2　菅原正明　1990.12『中近世土器の基礎Ⅵ　付編　80年代の研究成果と今後の展望（「瓦器」は何を語るか）』日本中世土器研究会
註3　川西宏幸　1978『円筒埴輪総論』考古学雑誌　64－2
註4　田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
註5　原田昌則　1993「Ⅱ　久宝寺遺跡第6次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告37
註6　佐藤　隆　1992.3「第Ⅱ章　第2節　ii）長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅴ　市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書　後編』財団法人大阪市文化財協会
註7　横田賢次郎・森田勉　1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館研究論集4
註8　中西靖人　1984『山賀　（その3）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』　財団法人　大阪文化財センター
註9　中西靖人　1980『瓜生堂　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会　財団法人　大阪文化財センター
註10　金関恕／佐原眞　1987『弥生文化の研究　8　祭りと墓と装い』雄山閣

＊弥生土器の形態および時期的評価については『「弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ」木耳社　寺沢薫・森岡秀人　1989』を参考させて頂いた。また、神宮寺遺跡における地理的・歴史的事項については、『「八尾市史（前近代）本文編」　編集／八尾市史編集委員会　1988』および『「新版　八尾の史跡」編集・発行／八尾市市長公室広報課　八尾市郷土文化研究会　1987』から引用させて頂いた。

図　　版



北地区　第１遺構面全景（南から）

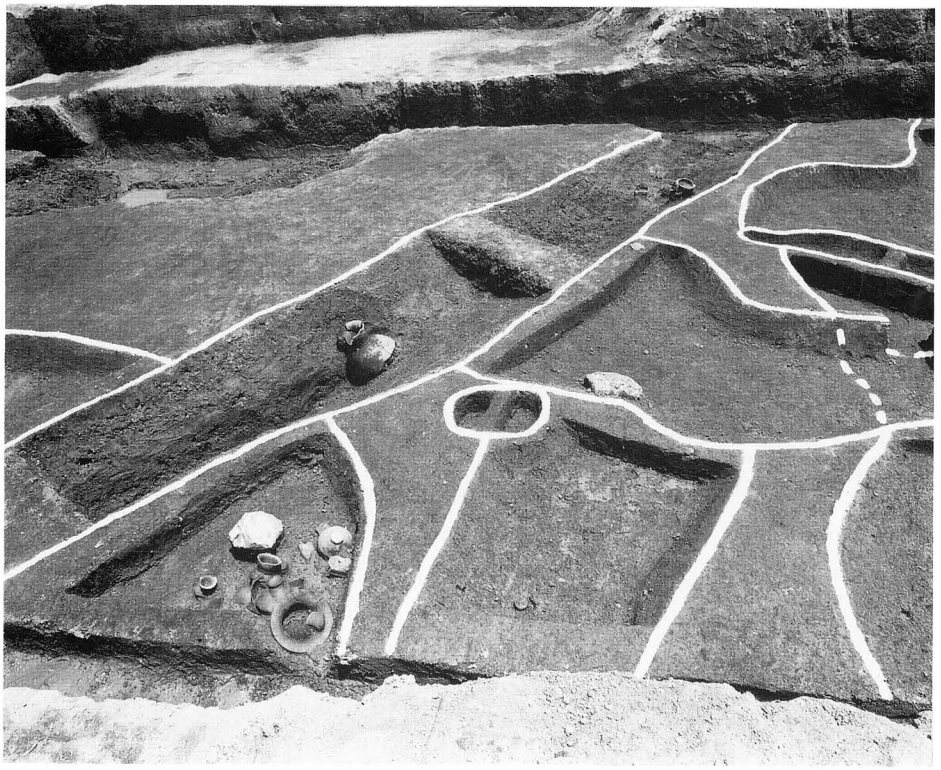


北地区　第２遺構面全景（南から）

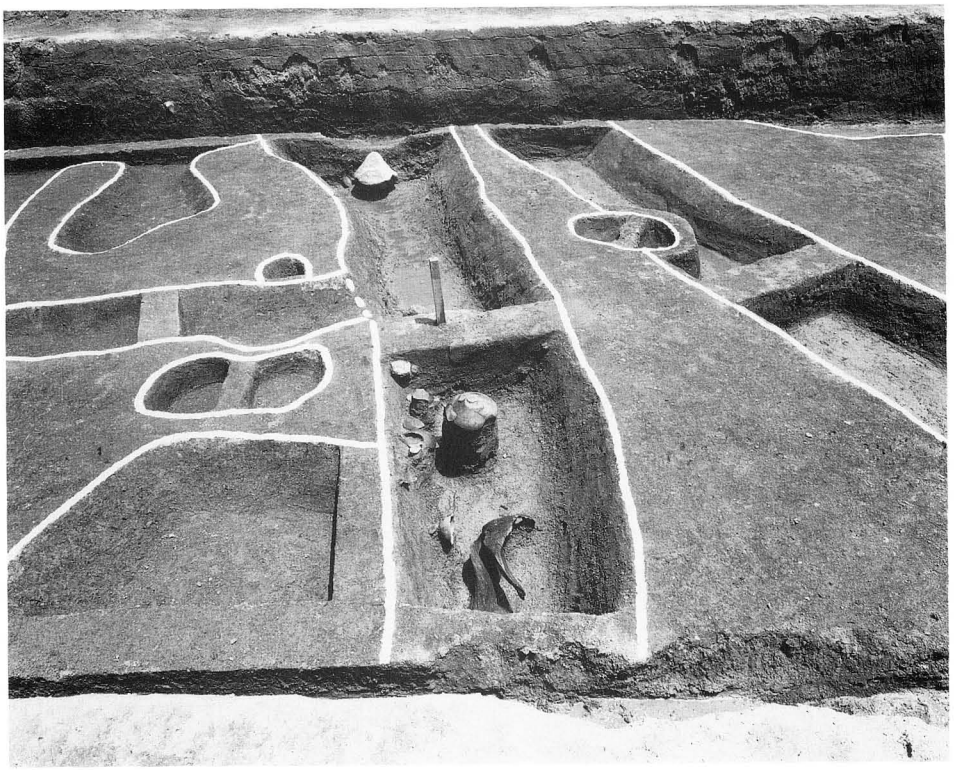
南地区　遺構面全景（北から）

ＳＥ－101断ち割り（東から）

ＳＥ－101完掘状況（東から）



北地区　第２遺構面北部（西から）



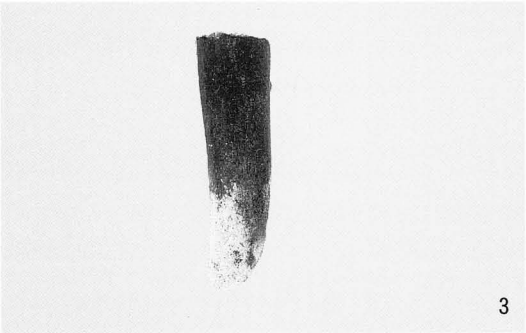
北地区　第２遺構面中央部（西から）

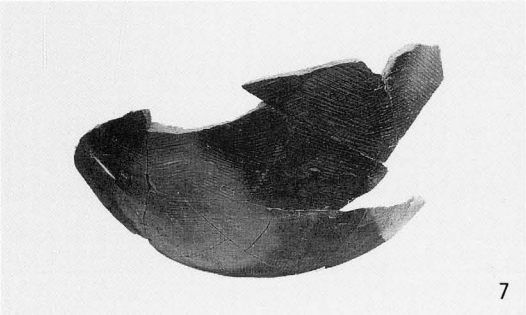
ＳＤ－202西部　土器集積（西から）

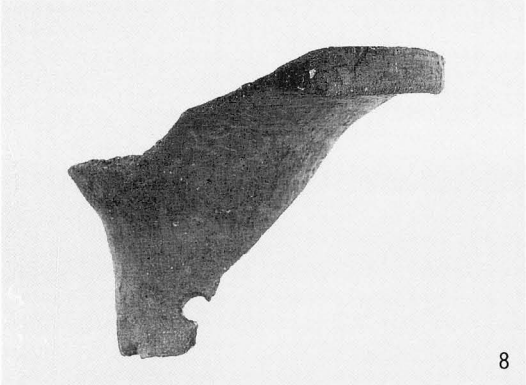
土器棺墓１検出状況（東から）

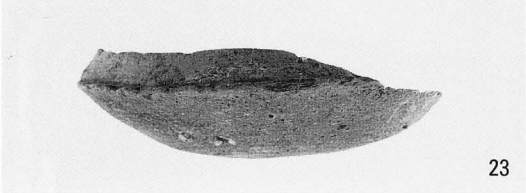
土器棺墓２検出状況（北から）

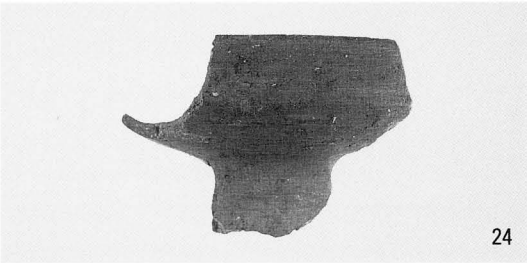
図版六　出土遺物

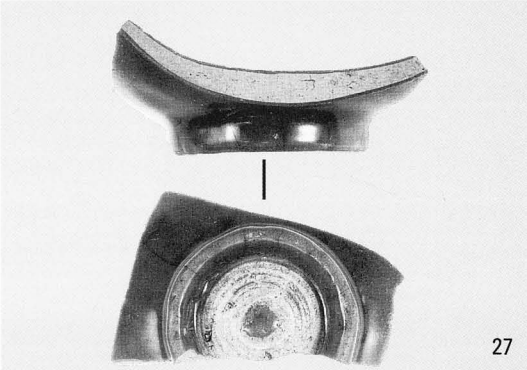


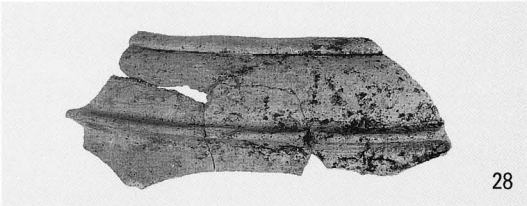


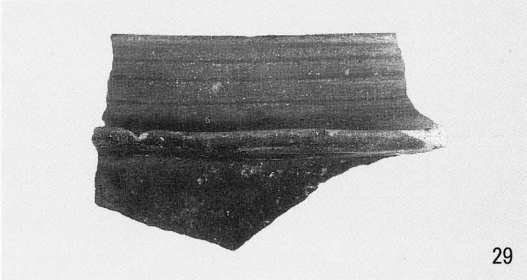


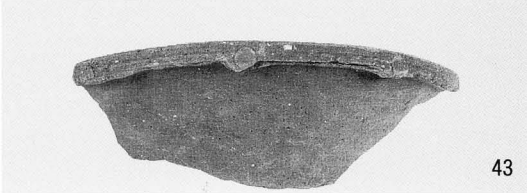




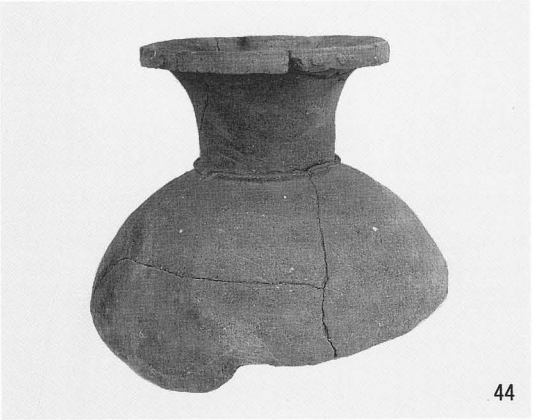


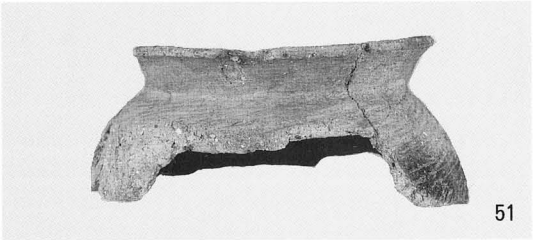


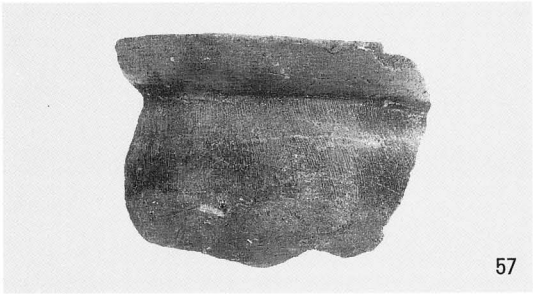


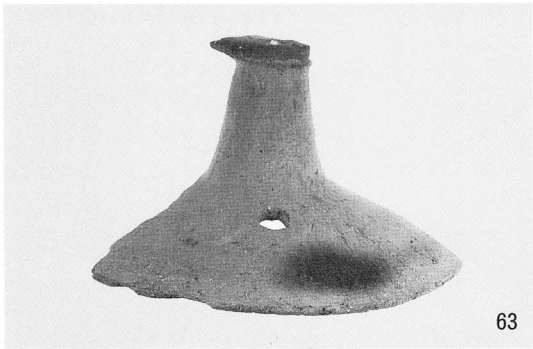


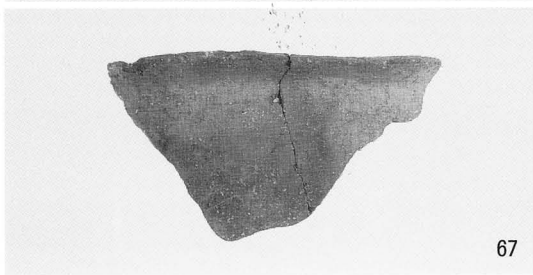
ＳＥ－101　3・7・8、ＮＲ－101　19、第６層　23・24・25・27・28・29、ＳＤ－201　43

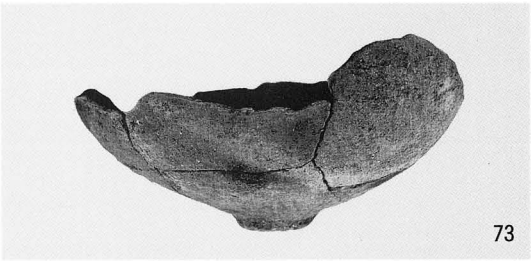


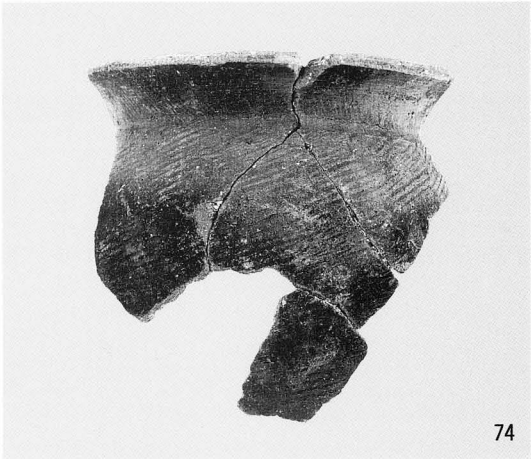






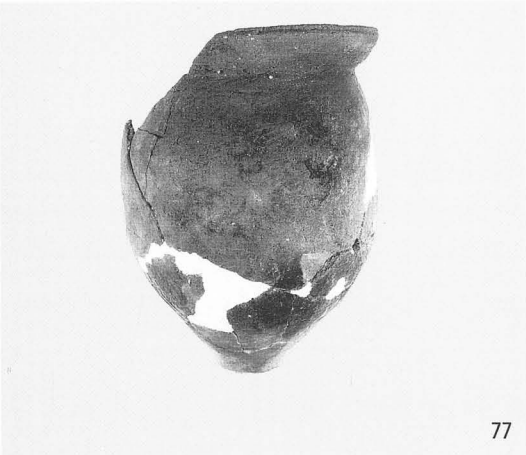






ＳＤ－201　44・51・57・63・67、ＳＤ－202　69・73・74・76

図版八　出土遺物

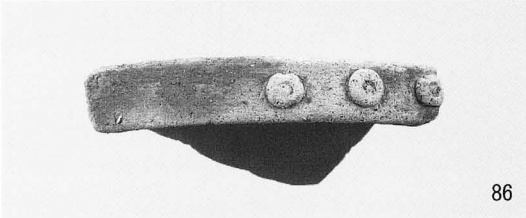

77

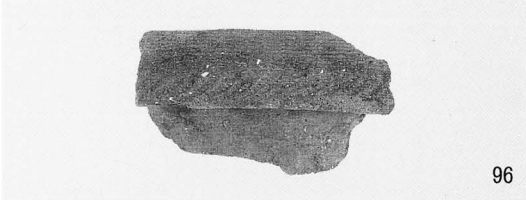
78

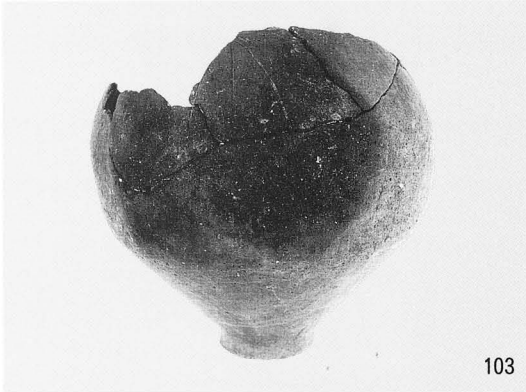
80

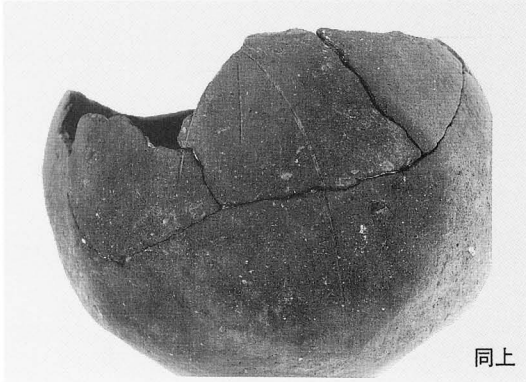
84

85

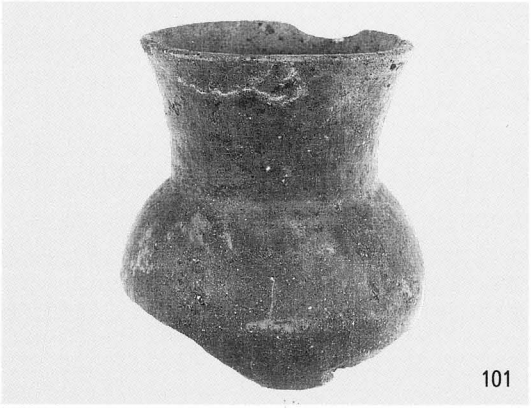

86

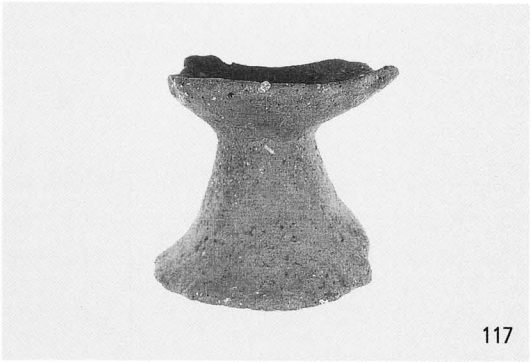

96

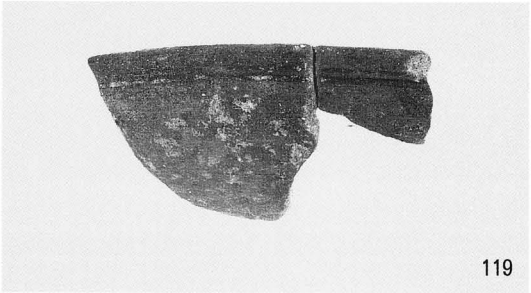

103

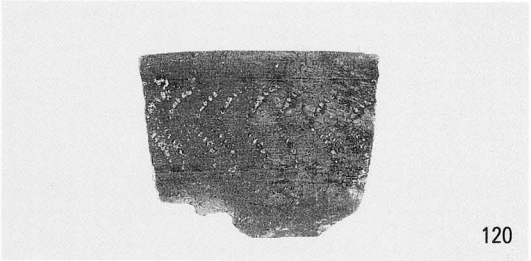

同上

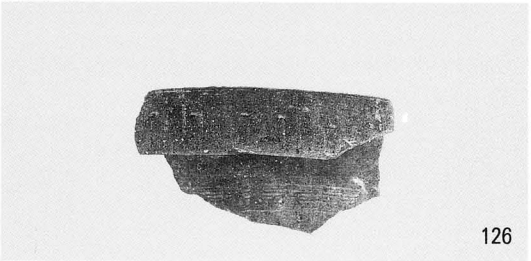
ＳＤ－202　77・78・80・84・85、ＳＤ－204　86、ＳＤ－206　96、ＳＯ－201　103





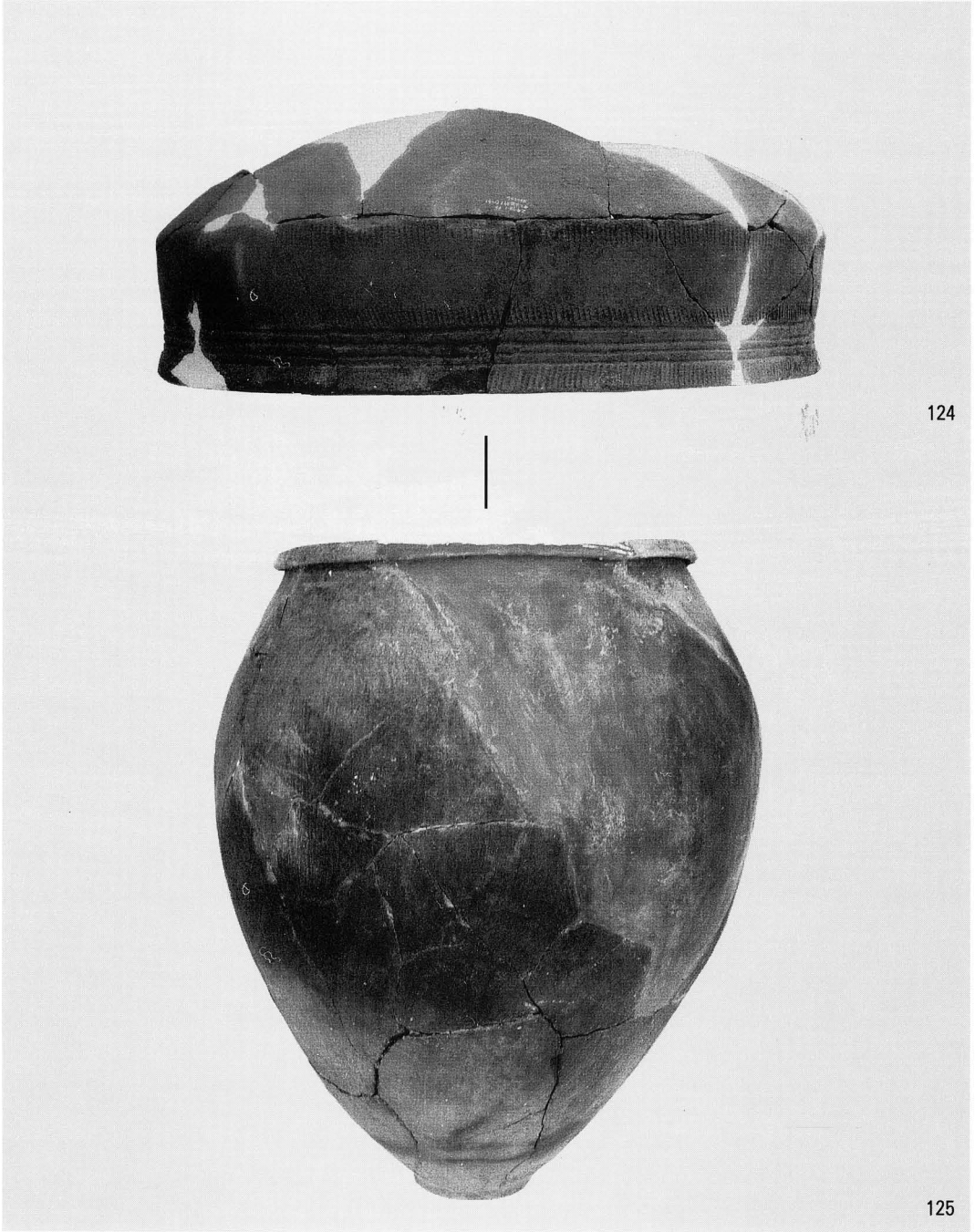




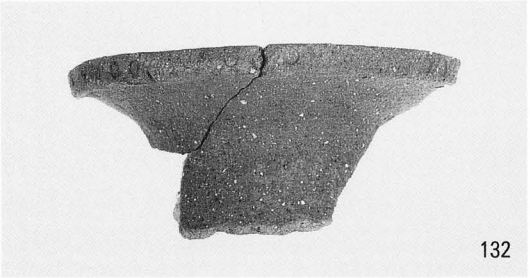


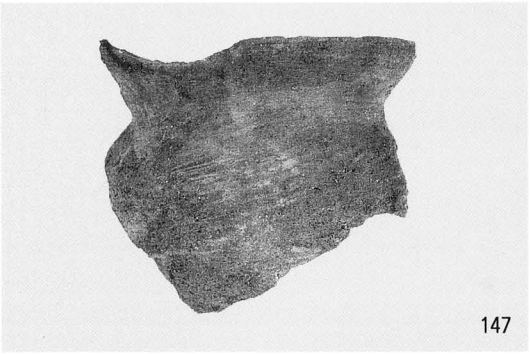
ＳＯ－201　101・105・110・117、ＳＯ-202　119・120、第７層　126・131

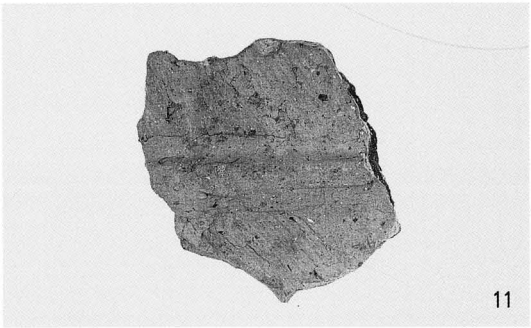
土器棺墓1　122・123

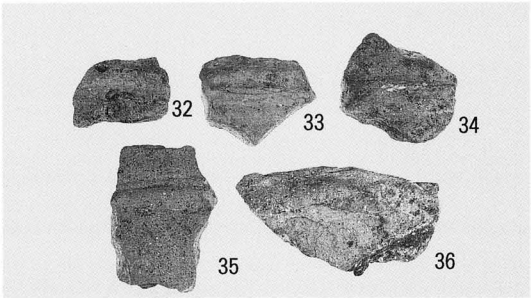


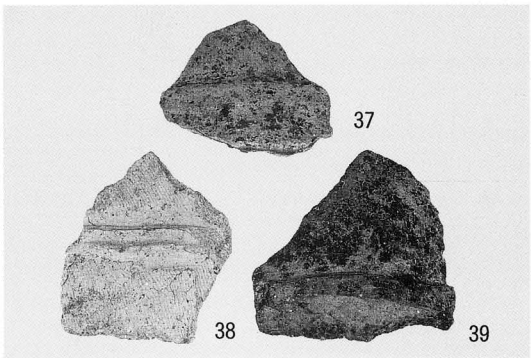
土器棺墓 2　124・125



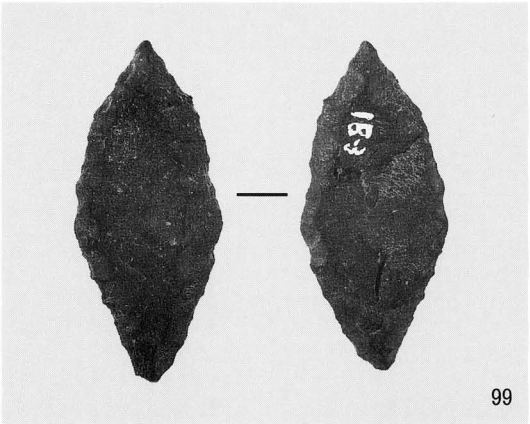


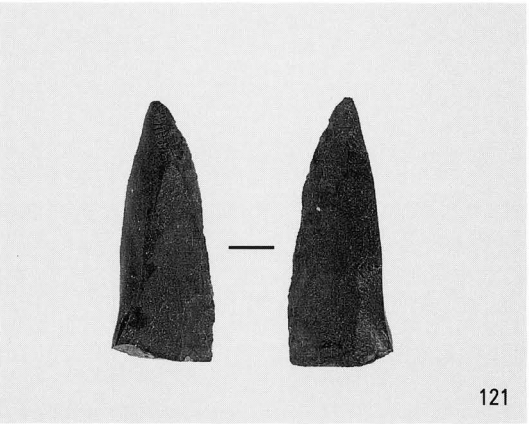


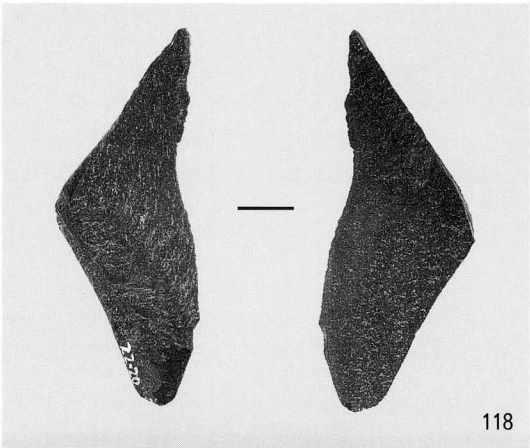


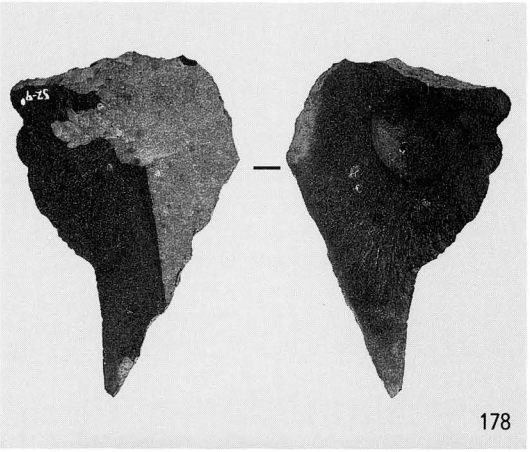


第７層　132・147・152・168・173・175
第６層　32～39
ＳＥ－101　11

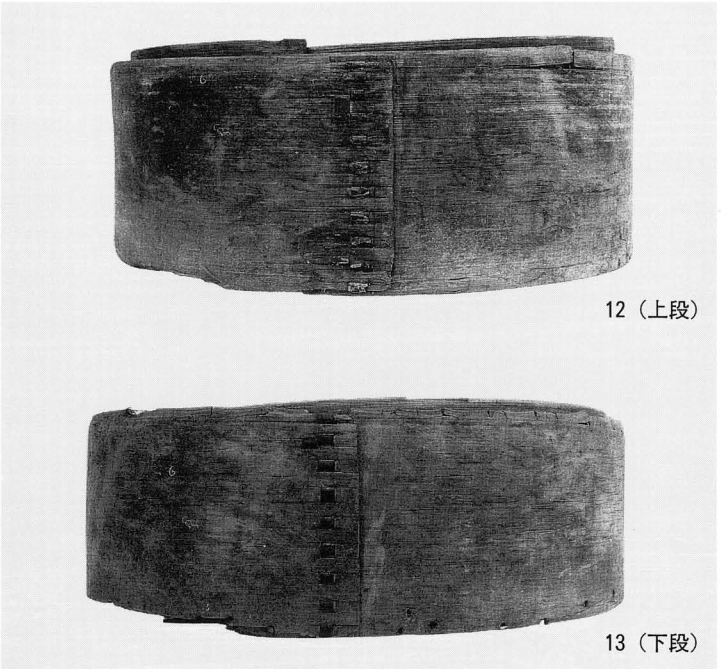




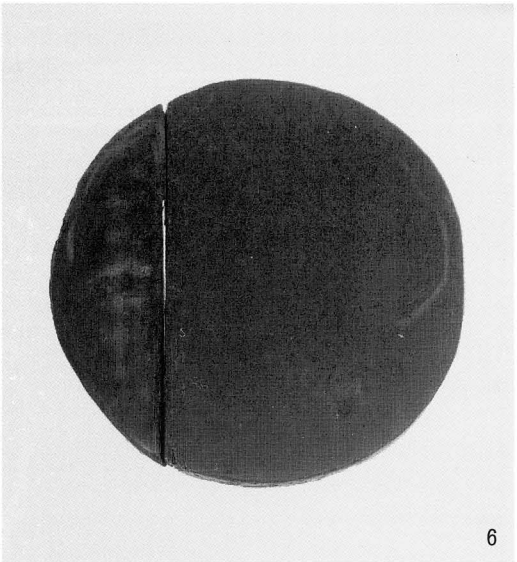




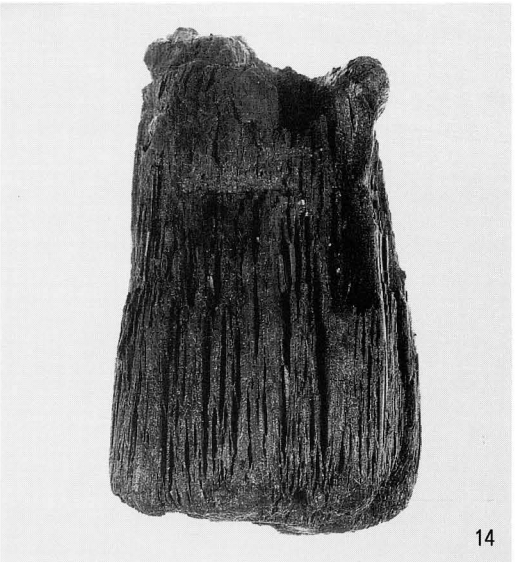
ＳＤ－206　99
ＳＯ－201　118
ＳＯ－202　121
第７層　178
ＳＥ－101　４・５



ＳＥ－101　曲物



ＳＥ－101　曲物容器底板



ＳＰ－104　柱根

Ⅳ　花岡山遺跡第２次調査（ＨＯ91－２）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市大字楽音寺637-1～2、688～640、641-1、794-1の大阪経済法科大学で実施した、学校施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

1．本書で報告する花岡山遺跡第２次調査（ＨＯ91－２）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋38号　平成３年６月10日付）に基づき、学校法人大阪経済法律学園　理事長　金澤俊行氏から委託をうけて実施したものである。

1．現地調査は、平成３年７月３日から７月24日にかけて成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、指示面積（建築予定面積）約650㎡のうちの約220㎡である。

1．内業整理は、調査に並行して随時行い、平成４年３月に終了した。

1．現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音字順）。
磯上サカエ・坂下　学・濱田千年・船倉早苗・宮崎寛子

1．出土遺物のうち屋瓦の一部については、福永信雄氏（東大阪市教育委員会）にご教示いただいた。記して感謝いたします。

1．方位は磁北である。図面の縮尺については、ことわりのないものに限り、遺構は50分の１、遺物は４分の１である。

本　文　目　次

第１章　はじめに……81
第２章　調査の方法と経過……82
第３章　調査概要……83
　第１節　地区割り……83
　第２節　基本層序……83
　第３節　検出遺構と出土遺物……84
　　１）１区の概要……84
　　２）２区の概要……88
　　３）その他の出土遺物……97
第４章　まとめ……98
　付　表……99

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……81
第２図　調査区設定図……82
第３図　調査区北側壁面図……83
第４図　ＳＫ－１・ＳＫ－２平断面図……85
第５図　ＳＫ－３平断面図……86
第６図　ＳＫ－１・ＳＫ－２・ＳＫ－４出土遺物実測図……87
第７図　ＳＫ－５～ＳＫ－７・ＳＰ－６・ＳＰ－７・ＳＤ－11～ＳＤ－13・
　　ＳＤ－17～ＳＤ－20平断面図……89
第８図　ＳＫ－８平断面図……90
第９図　ＳＫ－９平断面図……90
第10図　ＳＫ－11・ＳＫ－12・ＳＰ－14・ＳＤ－21・ＳＤ－22平断面図……91
第11図　ＳＫ－14出土遺物拓本・写真……92
第12図　ＳＫ－13～ＳＫ－15平断面図……93
第13図　ＳＫ－６・ＳＫ－９・ＳＫ－11・ＳＫ－12・ＳＫ－15出土遺物実測図……94
第14図　ＳＯ－２出土遺物実測図……96
第15図　その他の出土遺物実測図……97
第16図　調査区平面図 ……103・104

図　版　目　次

図版一　１区全景(南から)　２区全景（南から）
図版二　調査区遠景(西から)　西の山古墳を望む　１区遺構検出状況　ＳＫ－１（東から）
　　ＳＫ－２（東から）　ＳＫ－３(西から)　ＳＫ－４(東から)　ＳＯ－１（南から）
図版三　ＳＫ－６西半（東から）　ＳＫ－６東半（東から）ＳＫ－８ほか（北から）
　　ＳＫ－11ほか（南から）　ＳＫ－12（南から）　調査風景
図版四　ＳＫ－13ほか（北から）　ＳＫ－14（西から）　ＳＫ－15（東から）
　　ＳＯ－２（北から）　ＳＤ－21（北から）　ＳＤ－22・ＳＤ－23ほか（南から）
図版五　ＳＫ－１・ＳＫ－２出土遺物
図版六　ＳＫ－４・ＳＫ－６・ＳＫ－９出土遺物
図版七　ＳＫ－12・ＳＫ－15・包含層出土遺物
図版八　ＳＯ－２出土遺物